

松山市埋蔵文化財調査年報 II

昭和62~63年度

松山市教育委員会

序

瀬戸内に位置する松山市は気候風土に恵まれ、早くから東西の文化を受け入れ栄えた都市であり、埋蔵文化財の宝庫であります。

近年、著しく進む諸開発事業に伴って発掘調査も激増をきたしている状況であります。それらの中で、繩文晩期初期農耕の大瀬遺跡、平形銅剣出土の祝谷六丁場遺跡、他例を見ない大規模な官衙遺構検出の来住庵寺寺域調査、これらの成立期を示唆する「久米評」線刻土器の発見など全国的に見ても屈指の重要遺跡が相次いで発見されるなど、着々とその調査成果を得ているところであります。

これらの歴史的文化遺産は、発掘から整理、研究、保存処置、報告書作成など一連の処置をすると共に展示公開を含め広く知らしめ、また、後世へ伝えるべく性格のものであります。

本書は、これら松山市教育委員会が近年2ヵ年にわたって実施した発掘の概要を収録したものです。

文化財の保護・普及の上からも広く活用されることを願っております。

調査にあたりまして、ご指導いただいた文化庁、奈良国立文化財研究所、愛媛大学、愛媛県教育委員会外研究者の方々、調査に際して深いご理解とご協力をいただいた地権関係者及び地元関係者に厚く御礼申し上げます。

平成元年3月31日

松山市教育長

平井 龜雄

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会が昭和62年度～63年度にかけて実施調査した年報である。
2. 各調査遺跡については、概観的にまとめて収録した。
3. 昭和61年以前の調査遺跡については、一覧表にした。
4. 本書の編集及び執筆は、西尾幸則、重松佳久、池田学、松村淳、栗田茂敏、宮崎泰好、梅木謙一、丹下道一、島瀬美穂が担当した。
5. 調査組織

松山市教育委員会

教育長(前任) 西原多喜男
教育長 平井 亀雄
参事(前任) 松原 重勝
次長 井手 治己
次長 古本 克
文化教育課課長(前任) 伊賀 俊輔
〃 課長 渡部 忠平
〃 課長補佐 大野 衡治
〃 第二係長(前任) 戸田 浩
〃 第二係長 管野 治之
〃 〃 主任 西尾 幸則
〃 〃 主事 重松 佳久
〃 〃 嘱託 池田学、松村淳、栗田茂敏、宮崎泰好、梅木謙一、丹下道一
補助員 宮内慎一、木下公一、石丸直樹、高尾和長、相原浩二、
井上泰三、河野史知、大森一成、山本健一、水本完児

6. 近年の発掘及び試掘資料類を含め、古照資料館の利用状況等も合せて収録した。

7. 指導、助言に感謝申し上げます。

愛媛大学教授 下條 信行 氏
〃 助教授 宮本 一夫 氏
〃 講師 平井 幸弘 氏

8. 焼裡作業等の協力者

真木潔、武智良夫、小笠原善治、谷久広之、加島次郎、武正良浩、大西朋子、小坂ゆかり、中野祥子、松垣芳江、緑尚美、丹生谷康恵、丹生谷道代、中井美奈子、藤原利江子、藤井宏枝、森田利恵、越智美代子、松本美知子、渡部美代子、黒田令子、山本好枝、森田晶子、栗林千恵、藤沢真美

9. 協力機関

国立奈良文化財研究所、愛媛大学考古学研究室

図版目次

- 卷頭図版 『久米評』線刻土器（久米高畠遺跡7次調査出土）
- 図版 1 1 大潤遺跡 A区第5層出土彩文壺
2 大潤遺跡 A区第7層出土朱漆塗結歯式堅櫛
- 図版 2 1 高月山古墳群 全景
2 高月山古墳群 鉄劍（2号墳）
- 図版 3 1 船ヶ谷向山古墳 全景
2 船ヶ谷向山古墳 墓輪列
- 図版 4 1 北齊院地内遺跡 SB-1
2 北齊院地内遺跡 第1号木棺墓
- 図版 5 1 南江戸桑田遺跡 北区（東南から）
2 南江戸桑田遺跡 11号墓（南から）
- 図版 6 1 客谷B区古墳群 1号墳全景
2 客谷B区古墳群 2号墓全景（左・A石室、右・B石室）
- 図版 7 1 大峰台遺跡 北より
2 大峰台遺跡 西より
- 図版 8 1 辻遺跡 全景
2 辻遺跡 近景
- 図版 9 1 澤遺跡 SB-1（北より）
2 澤遺跡 SK-3
- 図版 10 1 道後城北RN B遺跡 東壁上層
2 道後城北RN B遺跡 浅鉢
- 図版 11 1 祝谷六丁場遺跡 平形銅劍埋納壙
2 祝谷六丁場遺跡 平形銅劍埋納壙（遠景）
- 図版 12 1 伊台惣部遺跡 調査地全景（北から）
2 伊台惣部遺跡 SB-5（南から）
- 図版 13 1 中村松田遺跡 A区全景
2 中村松田遺跡 SB-4
- 図版 14 1 筋違E遺跡 全景（北東から）
2 筋違E遺跡 SB-1
- 図版 15 1 筋違F遺跡 全景
2 筋違F遺跡 SB-5
- 図版 16 1 淨蓮寺II遺跡 全景
2 淨蓮寺II遺跡 近景

- 図版 17 1 来住庵寺寺域確認調査 北回廊状造構（東から）
2 来住庵寺寺域確認調査 北回廊状造構（西から）
- 図版 18 1 来住庵寺寺域確認調査 回廊状造構（南東隅調査区東から）
2 来住庵寺寺域確認調査 回廊状造構（南西隅調査区南から）
- 図版 19 1 久米高畠遺跡（5次） SB-3
2 久米高畠遺跡（5次） SK-2
- 図版 20 1 久米窪田古屋敷遺跡 東北より
2 久米窪田古屋敷遺跡 SK-14
- 図版 21 1 久米深田森元遺跡 SK-1
2 久米窪田森元遺跡 SK-1
- 図版 22 1 久万ノ台遺跡 A区全景
2 古照G遺跡 遺物出土状況
- 図版 23 1 道後鶯谷遺跡 木器出土状況
2 樽味立添遺跡 貨泉（北より）
- 図版 24 1 福音寺川付遺跡 壺棺
2 北久米常祇遺跡 SB-1
- 図版 25 1 久米高畠遺跡（2次） 遺物出土状況
2 久米高畠遺跡（3次） SK-13
- 図版 26 1 久米高畠遺跡（4次）
2 南久米才歩行遺跡 遺物出土状況

本文目次

1	大瀬遺跡	1
2	高月山古墳群	5
3	船ヶ谷向山古墳	7
4	吉藤宮ノ谷遺跡	9
5	久万ノ台遺跡	11
6	北齊院地内遺跡	13
7	南江戸桑田遺跡	15
8	古照G遺跡(3次)	17
9	客谷B区古墳群	19
10	大峰台遺跡	21
11	辻遺跡	25
12	澤遺跡	27
13	道後城北RNB遺跡	29
14	松山城北郭遺跡	31
15	道後鶯谷遺跡	33
16	祝谷六丁場遺跡	35
17	祝谷大地ケ田遺跡	39
18	伊台惣部遺跡	41
19	中村松田遺跡	45
20	櫻味四反地遺跡	49
21	梅味立添遺跡	53
22	梅味高木遺跡	57
23	桑原田中遺跡	59
24	筋違D遺跡	61
25	筋違E遺跡	63
26	筋違F遺跡	65
27	福音寺川付遺跡	67
28	淨蓮寺II遺跡	69
29	北久米當塚遺跡	71
30	来住庵寺域確認調査	73
31	久米高畠遺跡(2次)	79
32	久米高畠遺跡(3次)	81
33	久米高畠遺跡(4次)	83

34 久米高畠遺跡(5次).....	85
35 久米高畠遺跡(6次).....	87
36 来住町遺跡(1次).....	89
37 南久米才歩行遺跡.....	91
38 久米瀬山古墳敷遺跡.....	93
39 久米瀬田森元遺跡.....	95
40 久米高畠遺跡(7次).....	97
付編松山市埋蔵文化財関係資料.....	99
松山市考古博物館(仮称)の開館案内.....	106
あとがき.....	107

表 目 次

昭和62年度松山市埋蔵文化財確認調査一覧.....	99
昭和63年度松山市埋蔵文化財確認調査一覧.....	101
昭和62~63年度松山市埋蔵文化財発掘調査一覧.....	103
松山市古墳資料館利用状況(昭和59~63年度:月別).....	105

付 図

- 昭和62・63年度松山市埋蔵文化財発掘調査位置図
 昭和62年度松山市埋蔵文化財確認調査位置図
 昭和63年度松山市埋蔵文化財確認調査位置図



「久米評」線刻土器（久米高畠7次調査出土）



大汶遺跡 A區第5層出土彩文壺



大汶遺跡 A區第7層出土朱漆齒式竖櫛



高月山古墳群 全景



高月山古墳群 鐵劍(2号墳)



船ヶ谷向山古墳 全景



船ヶ谷向山古墳 墓輪列



北斎院地内遺跡 SB-1



北斎院地内遺跡 第1号木棺墓



南江戸桑田遺跡 北区(東南から)



南江戸桑田遺跡 11号墓(南から)



客谷B区古墳群 1号墳全景



客谷B区古墳群 2号墓全景(左·A石室、右·B石室)



大峰台遺跡(北より)



大峰台遺跡(西より)



迁遗址 全景



迁遗址 近景



澤遺跡 SB-1(北より)



澤遺跡 SK-3



道後城北RNB遺跡 東壁土層



道後城北RNB遺跡 浅鉢



祝谷六丁場遺跡 平形銅劍埋納壙



祝谷六丁場遺跡 平形銅劍埋納壙(遠景)



伊台惣部遺跡 調査地全景(北から)



伊台惣部遺跡 SB-5(南から)



中村松田遺跡 A区全景



中村松田遺跡 SB-4



筋違E遺跡 全景(北東から)



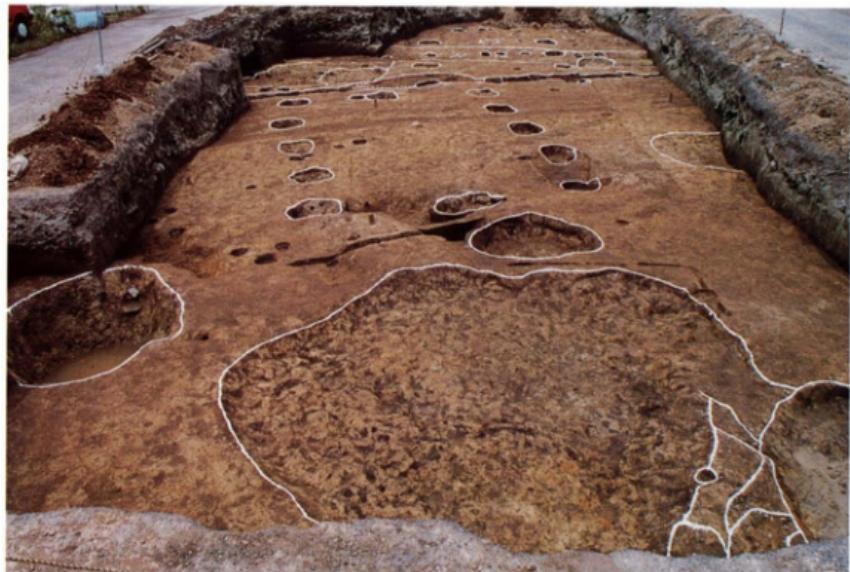
筋違E遺跡 SB-1



筋違F遺跡 全景



筋違F遺跡 SB-5



淨蓮寺II遺跡 全景



淨蓮寺II遺跡 近景



来住廃寺寺域確認調査 北回廊状遺構(東から)



来住廃寺寺域確認調査 北回廊状遺構(西から)



来住廃寺寺域確認調査 回廊状遺構（南東隅調査区東から）



来住廃寺寺域確認調査 回廊状遺構（南西隅調査区南から）



久米高畠遺跡5次 SB-3



久米高畠遺跡5次 SK-2



久米座田古屋敷遺跡 北東より



久米座田古屋敷遺跡 SK-14



久米窪田森元遺跡 SK-1



久米窪田森元遺跡 SK-1



久万ノ台遺跡 A区全景



古照G遺跡 遺物出土状況



道後鶴谷遺跡 木器出土状況



湯味立添遺跡「貨泉」(北より)



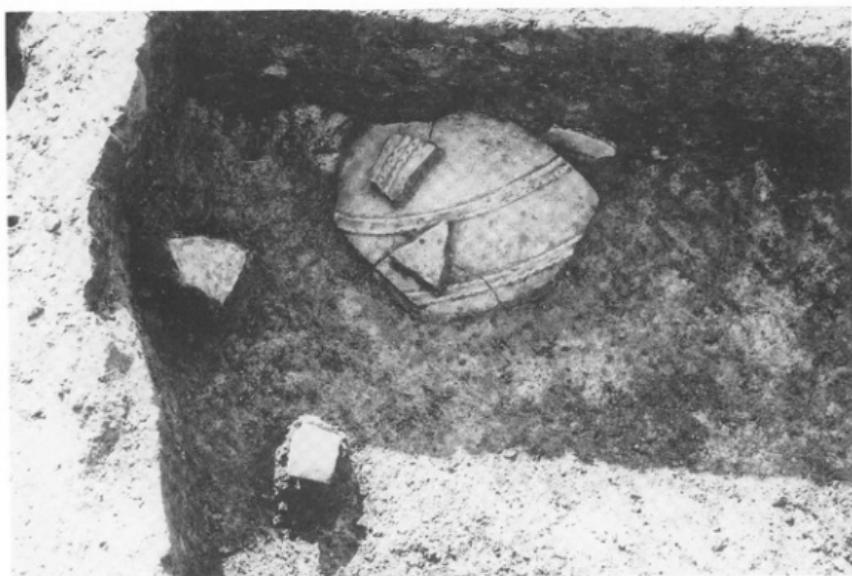
福音寺川付遺跡 壺棺



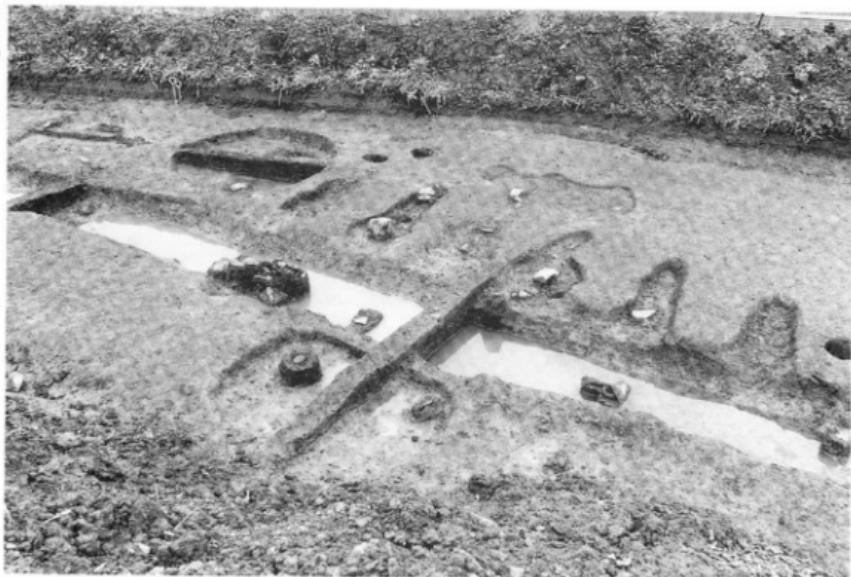
北久米常埋遺跡 SB-1



久米高烟遺跡(2次) 遺物出土状況



久米高烟遺跡(3次) SK-13



久米高畠遺跡(4次)



南久米才歩行遺跡 遺物出土状況

本文

1. 大渕遺跡

1. 所在地 松山市太山寺町甲 496 ~
498他
2. 絶対位置 東経132°44'15"
北緯 33°52'52"
3. 調査年月日 昭和62年7月4日~11月
2日
4. 調査面積 4,500m²



図1-1 大渕遺跡位置図

昭和64年度開校予定の鴨川・内宮中学分離新設校建設に先立つ発掘調査である。用地は南北160m、東西100m、16,000m²に及ぶ水田地で、現水田面の海拔は3.5m、東南から西北にかけての極めて緩やかな斜面をなしている。調査地西方100mに太山寺山塊に連なる丘陵を眼のあたりにし、東方には若干の高みが抜がる。調査地の東300mを北流する久万川は2kmを経て和気海岸に達する。調査地は西方の丘陵と東の微高地の間に抜がる低湿地である。南方約1kmには縄文晚期後半の遺物と、河川状構造を検出した船ヶ谷遺跡、南方300mには弥生前期及び、後期の包含層が確認された三光遺跡が所在する。

試掘調査の結果、2地点において縄文晚期の遺物を含む暗褐色粘質土を検出した。この2地点のうち北方の区域1,000m²をA区、南方の区域600m²をB区として調査を行った。

調査の結果、A区においては黄色粘土層をベースとして落ち込む湿地状地形の落ち際付近で、縄文晚期後半の遺物が第5層から第7層にかけて安定した堆積状況で出土した。5層における出土量が最も多い。遺物は現在整理段階ではあるが、甕は口唇直下に刻み目突帯を一条貼り付けるものを中心とする。口唇部も刻むものが多い。二条突帯甕、粗製条痕文深鉢も若干出土している。浅鉢は体部下半に条痕を残すもののがほとんどである。壺は10数個体出土しており、丹塗を施されるものが多い。大型壺の中には肩部に丹塗と黒斑を交互に施し、八ツ手の葉状の彩文を行っているものがある。また、第5層において結晶片岩製の磨製石庖丁を出土している。外湾刃、直背で両端に抉りを持つ器型である。第5層~7層で出土した板圧痕を有する土器片数点とあわせて、この時期、当遺跡周辺において初期稻作が行われていた可能性が極めて強くなったと言えよう。なお、石器類では偏平打製石斧、蛤刃石斧、石鎌、その他、サヌカイト剝片平箱一杯分、黒曜石、姫島産黒曜石の剥片を200点余り出土している。同じく突帯文土器を出土する第7層において朱漆塗結歯式豎櫛を2個体検出した。この豎櫛、丹塗壺の赤色顔料はともに水銀朱である。A区北半では、第5層直下、黄色粘土層を切り込んだ状況で、土壤8基及び、柱穴群を検出した。これらの土壤のいくつかからは、突帯文よりも一型式先行する土器類の出土をみた。なお、A区において8層以下を数グリッド深掘りした結果、縄文後期中葉から突帯文に至るまでの土器類が混淆した状況で出土した。

B地区においては、層位的にA区の基盤面と同一土層の窪みから、同じく晩期後半の土器類、磨製石庖丁、更にその下層より、アカガシの亜属とされる倒木の出土をみた。

(栗田)

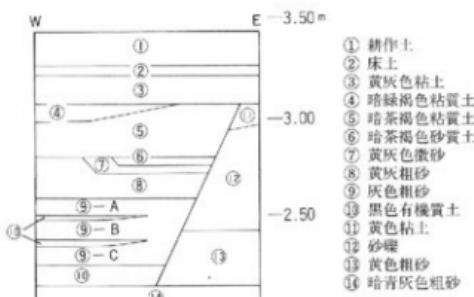


図1-2 土層図（A区模式図）

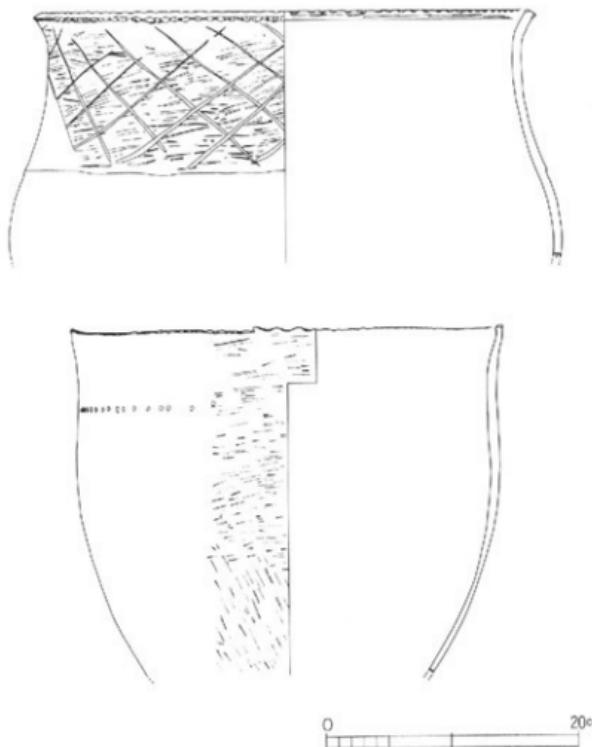


図1-3 遺物実測図（土壤内出土）

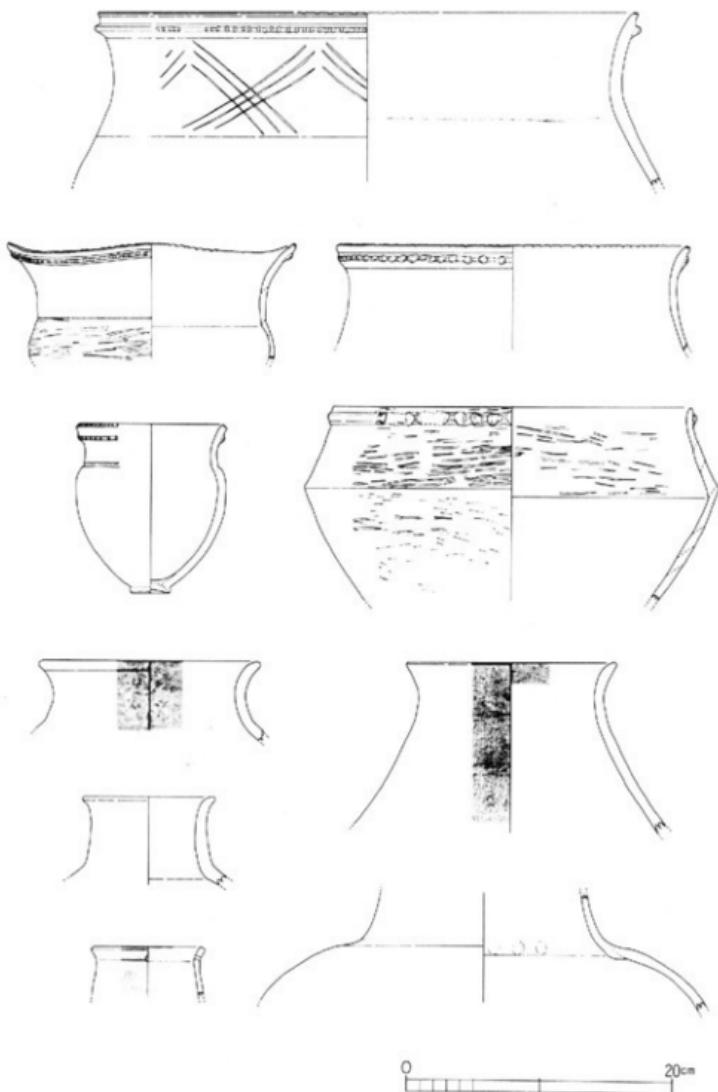


図1-4 遺物実測図（第5層出土）

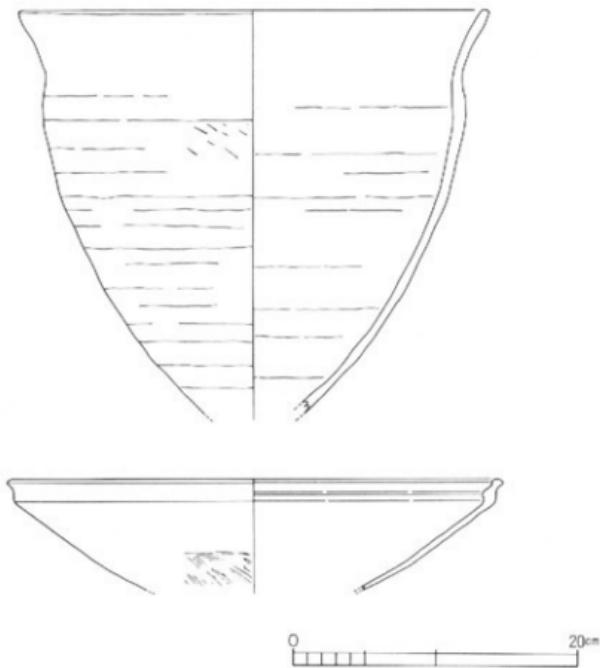


図1-5 遺物実測図（第5層出土）

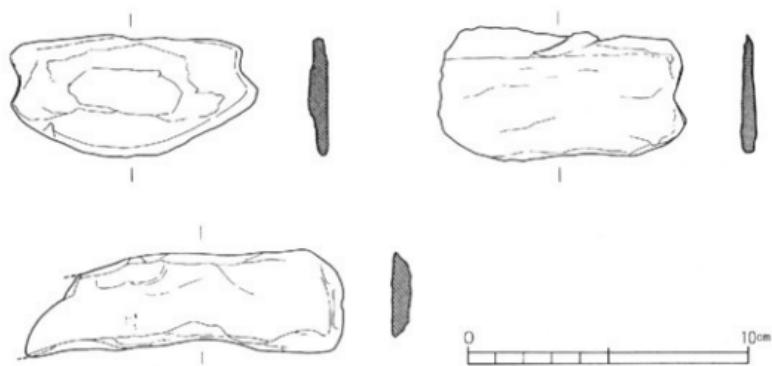


図1-6 石庵丁・石鎌実測図

2. 高月山古墳群

1. 所在地 松山市勝岡町乙22他

2. 絶対位置 東経132°43'32"

北緯 33°53'50"

3. 調査年月日 昭和62年10月8日～11月
11日

4. 調査面積 300m²



図2-1 高月山古墳位置図

本古墳群が所在する太山寺山塊は、勝岡、太山寺、片廻等の古墳群が所在する。また、昭和63年に船ヶ谷向山古墳の調査を行い、墳裾のくびれ部状に多くの円筒埴輪や形象埴輪が出土しており、この向山古墳が古墳時代中期の前方後円墳の可能性を残しているなど古墳の多い地域で、この高月山からは松山平野や瀬戸内海を遠望できる良好な立地状況である。

この高月山は、山頂から西に延びる尾根と北に延びる尾根を持っている。山頂には以前石室が確認されており、現在「ほこら」が祭つてある。山頂部と尾根線上に計7基の古墳を確認した。このうち調査対象区内の北に延びる尾根に立地する3基の古墳を調査した。調査の結果、古墳時代前期の内部主体を箱式石棺とする古墳2基と主体部消失の円墳が1基、弥生時代後期初頭の住居址状遺構を1基検出した。

第1号古墳は、主体部消失の径約10mの円墳で一部周溝を検出し、覆土中より上師器片が出土した。

第2号、第3号古墳は、緑泥片岩を部材とする組合せ式箱式石棺を内部主体としている。又、両古墳とも尾根線背後に、尾根線に直交する直線的な溝でもって墓域を区画している。溝の形状及び傾斜変換点から、第2号古墳は長方墳、第3号古墳は楕円形の円墳と思われる。

他の遺構として、弥生時代後期初頭段階の住居址状竪穴1基を検出した。この遺構は、高地に立地する住居址と考えられ、水住的というよりも一過性の住居址と考えられる。

出土遺物としては、第2号古墳周溝内より、布留1式併行期の底部に円孔を持つ直口壺が出土している。この壺には、内外面とも赤彩されている。又、柳葉形の銅鏡（茎には麻の繊維が巻き付けられている）が1点出土。第2号古墳主体部側石沿い、青色粘土中より、全長45cmの鉄劍一振、鍔先1点、鉄斧1点、鉄鎌片1点が出土した。

第3号古墳からは、石棺内より鉄劍片1点が出土した。他の出土遺物として、弥生式土器片、寛永通宝3点が出土した。

県下の箱式石棺の調査のうち墳丘部までの調査例は少なく、石棺構築時の時期決定の遺物が少なかった。

今回の調査により、2号墳だけだが、布留1式併行期の直口壺が出土しており、絶対年代を4世紀末～5世紀初頭段階に位置づけられ、前期古墳の一様相が確認できた意義は大きい。

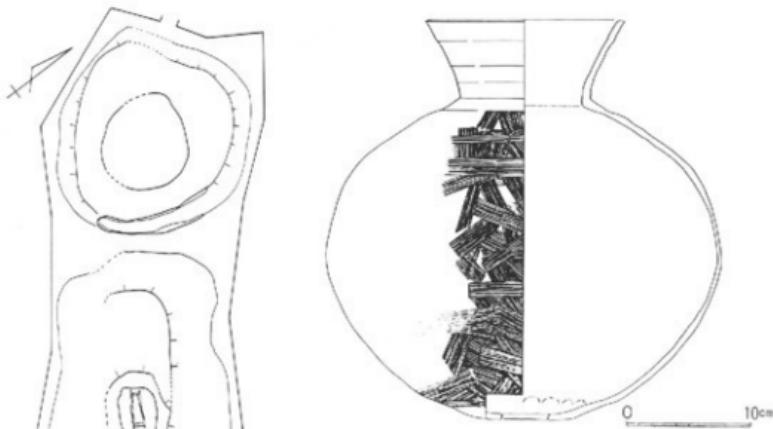


図2-3 壺実測図（2号墳出土）

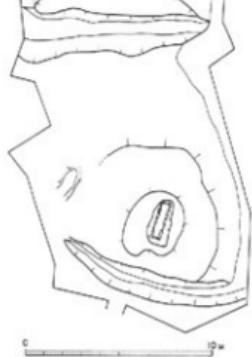


図2-2 遺構配置図

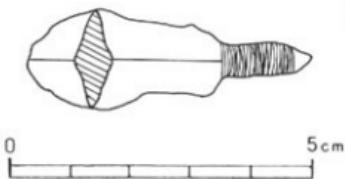


図2-4 銅鐘実測図（2号墳出土）

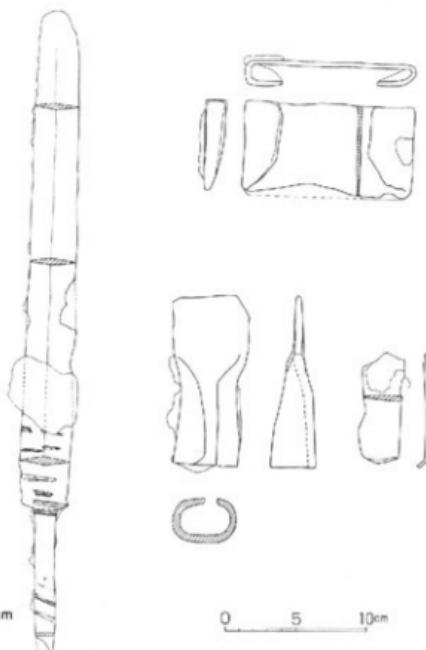


図2-5 鉄器実測図（2号墳出土）

3. 船ヶ谷向山古墳

1. 所在地 松山市船ヶ谷町245-6
他

2. 絶対位置 東経 $132^{\circ}44'14''$
北緯 $33^{\circ}51'59''$

3. 調査年月日 昭和63年6月1日～7月
1日

4. 調査面積 4,135m²



図3-1 船ヶ谷向山古墳位置図

船ヶ谷向山古墳は、松山平野北西部太山寺山塊西側の分岐丘陵上に立地する東山町古墳群に所在する。この太山寺山塊の西側と北側は瀬戸内海に面し、他方は、松山平野を望む分岐丘陵上には、多数の古墳群が存在するが、あまり詳細は知られていなかった。南に、久万の台古墳、永塚古墳が、東の低地に大溝遺跡、船ヶ谷遺跡が所在する。

今回、宗教法人靈法会教会建設に伴い、緊急調査を行った。この向山は、分岐丘陵上で、松山平野に向かい突出した小高い山で、西側に背を持っていたと言われるが、8年程前に、不法に造成工事が行われ、向山頂部が削平されていた。

この向山古墳は、標高29～31mの向山頂部に立地する古墳で、南西に山が連なり、南西部が馬背状にやや平坦面をなす。試掘調査で多数の埴輪片と調査区西側で円筒埴輪列を確認し、調査を行った。調査区西側の埴輪列は、やや湾曲しつつ、全長3.77mで、13個体検出した。途中、1個体欠けた部分があり、その間隔を除くと平均10cm弱の間隔で配置してあった。埴丘の下段と想定される。径26mの円墳部と南西に連なる馬蹄状の平坦部の円筒埴輪列西側で、長さ11.5mの「くびれ部」を検出した。このくびれ部分で、多数の埴輪片（円筒・形象）と、須恵器片、鉄片が出土した。前記のくびれ部と、円筒埴輪列を下段と想定すると、小型の前方後円墳か帆立形古墳と推定されるが、調査区南西部を調査したところ、耕作時と造成時及び農道建設時の削平がひどく、南西端は確認できず、現状では可能性を残すとしか言えない。

出土遺物として、須恵質の円筒埴輪、形象埴輪としては、器財埴輪の櫛、動物埴輪の馬・犬・鳥が出土した。このうち円筒埴輪は、本古墳墳裾全域で出土したが、形象埴輪片は、いずれも調査区南西のくびれ部裾からの出土である。他に、弥生土器（中期初頭）、須恵器（壺・杯身・杯蓋・高杯）・上師器（壺）・鐵鋤・鉄片・白玉・銅片が出土した。（池田・宮崎）

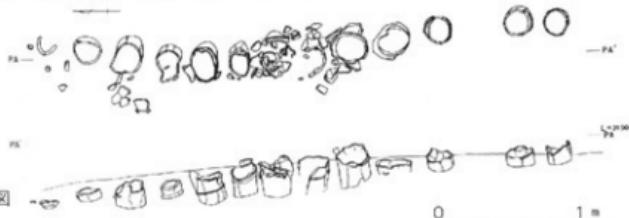


図3-2
円筒埴輪列平面図



図3-3 遺構配置図

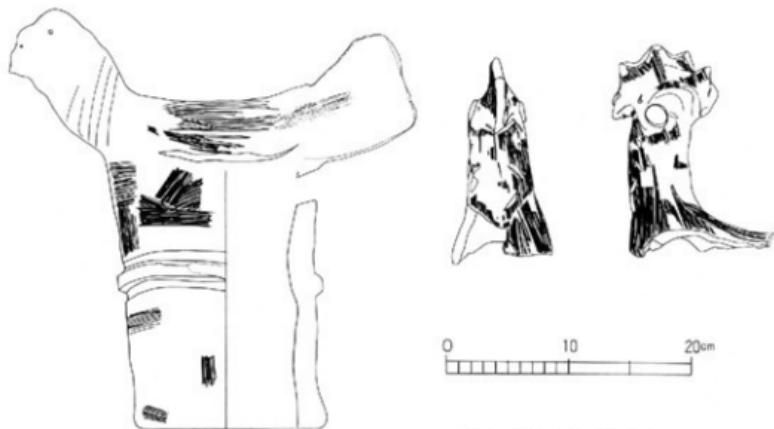


図3-4 遺物実測図

4. 吉藤宮ノ谷遺跡

1. 所在地 松山市吉藤1丁目714-2・3

2. 絶対位置 東経132°45'54"
北緯33°52'03"

3. 調査年月日 昭和62年12月21日-29日

4. 調査面積 220m²



図4-1 吉藤宮ノ谷遺跡位置図

当遺跡は松山平野北部、高繩山系西南面の分岐丘陵裾端部、海拔25~26mの緩斜面に位置する。丘陵上には姫原、長建寺、祝谷等の古墳群、裾部には平型銅劍を出土した祝谷六丁場遺跡や潮見ラドン温泉遺跡、姫原遺跡等の弥生遺跡が数多く所在する。

住宅新築に伴う試掘調査の結果、包含層を2枚確認したため、緊急発掘調査を行った。2枚の包含層のうち上層の1枚、暗褐色粘質土層は古墳時代から中世の遺物とともに約20cm堆積しているが、造構が認められなかったため、下層の弥生の造構に焦点を絞って調査を実施した。調査の結果、土壙8基、溝状造構7条、柵状造構1条が検出された。土壙のうち時期を特定できる遺物を検出したのは、SK-1、6、8の3基である。SK-1、8は中期中葉に、SK-6は後期に比定できる。SK-6からは壺棺を出土している。

溝状造構のうちSD-2は中期中葉のSK-1に切られるものの、出土遺物に形式差はみられず、同時期に扱えるものである。SD-4は四線文の時期、中期後葉に比定できる。SD-3からは後期の遺物を出土している。SA-1はSD-3の肩に沿って6間分検出されており、SD-3に付帯する施設と考えられる。柱間は若干の長短があるが、平均1.2mを測る。今年度調査の高地性集落、大峰台遺跡でも斜面に立地する弥生中期の集落に、溝状造構と柵状造構とがセットになって検出されている例があり、当遺跡においてもその斜面立地から、排水及び、土止めの機能を持たせた造構であろうと考えている。その他の溝状造構に関しては、遺物の出土が細片で僅かであり、時期を特定するには至らなかった。

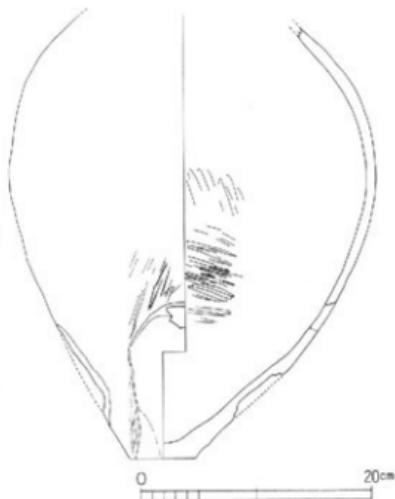


図4-2 壺棺実測図 (SK-6出土)

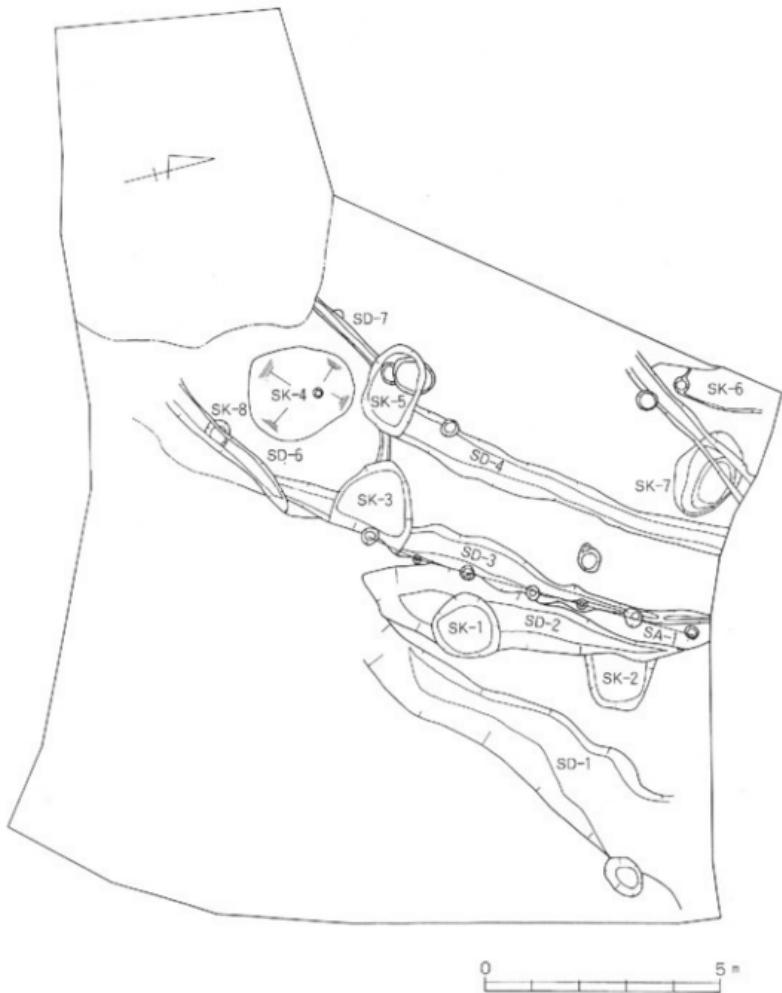


図 4-3 造構配置図

5. 久万ノ台遺跡

1. 所在地 松山市久万ノ台 785-1

他

2. 絶対位置 東経132°44'31"

北緯 33°51'26"

3. 調査年月日 昭和62年10月3日～10月

22日

4. 調査面積 500m²

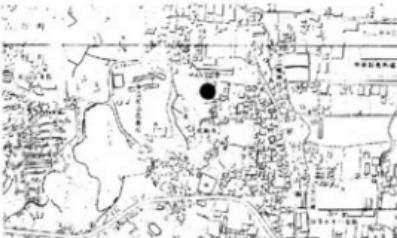


図5-1 久万ノ台遺跡位置図

本遺跡は、JR松山駅より北西約1.5kmに位置しており、松山平野西側の太山寺山塊の久万ノ台丘陵上東斜面に立地している。周辺には、久万ノ台古墳群、衣山古墳群等古墳の多い地域であり、周辺では、久万ノ台古墳と前方後円墳の永塚古墳しか調査されておらず、様相があまり知られていないかった地域である。今回住宅造成に伴い緊急調査を行った。

調査区は、水田耕作時の段カットによる西側の高い水田面をA区、東側の低い水田面をB区として分区して調査を行った。地山(黄色粘土)までの層序は、第1層表土(耕作土含む)、第2層黄褐色土、第3層茶褐色土、第4層褐色土、第5層暗茶褐色土、第6層黒色土。遺物包含層は第5層、第6層。主体は第6層黒色土であった。両包含層からは、弥生時代～中世まで出土している。A区西側は、段カットの為、包含層及び遺構面が削平されていた。

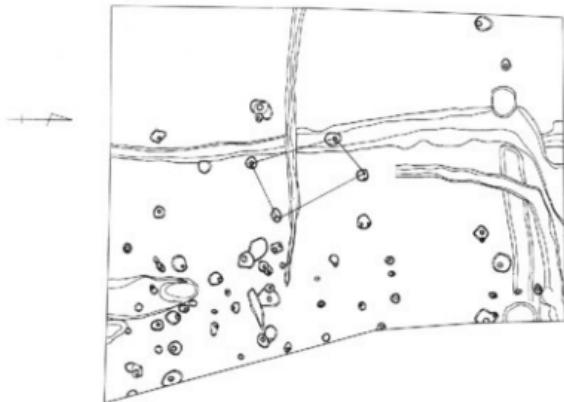
検出した遺構としては、A、B両区より、溝8条、土壙5基、ビット73基であった。内ビットはA区南東に集中していたが、掘立柱は4棟のみで、他のビットは、建物もしくは柵状の柱穴と考えられる。また、ビット内の覆土は、黒色土が全体の2/3で、他は暗茶褐色土であった。溝のうち、SD-1とSD-2は、斜面に直交して南北に流れしており、柱穴群に伴うものと考えられる。溝の覆土は暗茶褐色が主体であった。

出土遺物は、弥生時代～中世まで出土しており、古墳時代が主体であった。弥生時代の甕、壺、鉢が出土しており、中期が数点、後期が約100点であった。古墳時代は、須恵器(甕・壺・杯身・杯蓋)、土師器(杯・皿)が出土している。中世では、黒色土器、瓦器、底部糸切りの土師皿等が、又、近世末の砥部焼の染付皿が1点出土している。他に石製品として、石鎧2点(うち1点は姫島産黒曜石)、偏平磨製石斧(黒色チャート)、石斧(緑泥片岩)、砥石1点、石錘1点が出土している。

今回の調査により、久万ノ台丘陵上の古墳群が所属するであろう生活址の一部が確認できた意義は大きい。これにより周辺部で調査が進めば、よりいっそう久万ノ台古墳群の成立時や、弥生時代中期から、中世にかけての様相が確認できるので注目していきたい。

(宮崎)

A区



B区

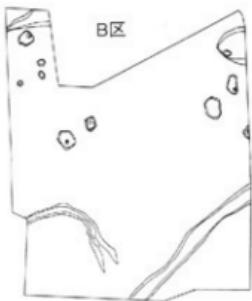


図5-2 造構配置図

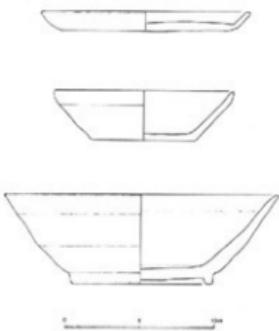
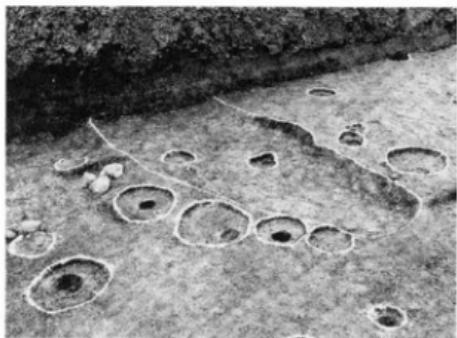


図5-3 遺物実測図



図版5-1 A区南東隅

6. 北斎院地内遺跡

1. 所在地 松山市北斎院町215-2

他

2. 絶対位置 東経132°44'02"

北緯 33°49'53"

3. 調査年月日 昭和63年8月3日~10月

31日

4. 調査面積 2,203m²

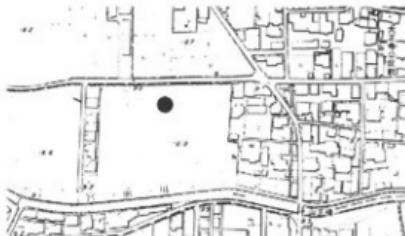


図6-1 北斎院地内遺跡位置図

本遺跡は、JR松山駅より西に約2kmに位置する。大峰ヶ台丘陵の南に流れる宮前川沿いにあり、この宮前川の氾濫により形成された砂層上に立地する遺跡である。

西には津田鳥越遺跡や宮前川遺跡群、東には古照遺跡群があり、北東には岩子山古墳や斎院茶臼山古墳など多くの古墳を有する大峰ヶ台遺跡群が所在する。検出した遺構として、掘立柱建物(SB-1)1棟、井戸(石組み)1基、土塙21基、ピット210基、溝5条、土塙墓6基が上げられる。時期としては、室町時代末~江戸時代にかけてであった。明確な建物は、南北5間9m×東西2間3.6mのSB-1しか確認できなかったが、江戸時代の田園地帯の集落と考えられる。調査区南のSD-1は、宮前川と並行に流れしており、集落の区画の溝と考えられる。

このSD-1内より、掘り方は明確に確認できなかったが、土塙墓が3基(内2基には副葬品として土師杯が出土)を検出するとともに、SD-1の南に土塙墓1基、木棺墓2基を検出した。いずれも人骨が残存していた。これにより、江戸時代においてSD-1より北に集落を営むとともに、集落に密接して南に墓域を構成した事がうかがえる。

出土した土器として、弥生時代後期前半の壺・甕・高杯片と古墳時代の須恵器片と土師器片が少量出土。中近世の土師皿・土師杯・瓦器・黒色土器・常滑窯・土鍋・青磁皿・肥前系磁器等が主体となっていた。他に釘等の鉄器類、木器類、獸骨片。土製品として土鍤が1点。ガラス製の玉1点及び古鏡が12枚出土した。

又、西に所在する宮前川の遺跡群の調査を踏まえて、遺構面調査後グリッドを設定し、深掘り調査を行った。地表下5mで黒色シルト層(厚さ20~30cm)を確認したが、遺物の出土を見なかつた。

又、今回の調査及び整理に対しては、株式会社松井建設の社長をはじめ関係諸氏には協力・援助をしていただきました。ここに記して感謝いたします。

(宮崎)

古銭名	年	国名	年号	点数
皇宋通寶	1039年	北宋	宝元2年	1
治平元宝	1064年	北宋	治平元年	1
聖宋元寶	1101年	北宋	同建中靖國元	1
大觀通寶	1107年	北宋	大觀元年	1
天禧元寶	1017年		江戸期元和3年	1
宋通元寶	958年	日本	鎌倉期	1
永通元寶	1587年	日本	桃山期 天正ノ頃	3
不 明				3

表6-1 出土古銭一覧



図6-2 遺構配置図



No.1



No.2



No.3

土壤墓内出土遺物

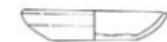
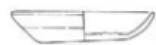


図6-3 遺物実測図

7. 南江戸桑田遺跡

1. 所在地 松山市南江戸5丁目770
765-1、744-1

2. 絶対位置 東経132°44'50"
北緯33°50'17"

3. 調査年月日 昭和63年8月9日～10月
12日

4. 調査面積 500m²



図7-1 南江戸桑田遺跡位置図

本遺跡は、松山平野西部に広がる大峰ヶ台丘陵の東側そぞ部(標高13m)に位置している。古来よりこの地は、石手川、宮前川等の氾濫によってもたらされた肥沃な土壤を利用した、水稻耕作が発達し、古墳期においては、古墳遺跡の大灌漑施設に代表されるように組織的灌漑農業が、営まれた地域と言うことが出来る。

近世、江戸期においては、南江戸村と称し、温泉郡に属している。「慶安郷村數帳」によれば、松山藩領として村高は、「1,193石余、うち田1,031石余、畠162石余」と記されており、松山藩の重要な生産地域として一般的な農村形態を有していた事が、うかがえる。

本発掘調査において江戸前期の墳墓群が検出されている。墳墓の形態としては、桶棺墓11基、箱棺墓1基が上げられるが、他に棺施設を持たない人骨も検出されている。副葬品として土師皿、漆器椀、櫛、盆、数珠、寛永通宝等生活調度品のみで武具等は、検出されていない。造構確認に際して注意して掘り方の確認に務めたが、擾乱砂層に切り込む埋葬施設造営及び、近年の耕作による削平の為、施設造営方法の検出には、不明な点が多く棺施設以外に埋葬例を考察する事が困難と思われる。また、宅地開発による緊急調査のため墓域範囲の規定、他生活施設との関係についても不明な点が多く、現在段階としては、とり急ぎ文献資料との照合に務めている。しかしながら、当時一般的な桶棺の埋葬例としては、座棺とも呼ばれるように竪穴を掘り頭部を上にしての座葬とは異なり、桶棺墓11基中10基までは、頭位を北に向け桶を横倒しにした形で埋葬されている点において、近世における桶棺の埋葬例として興味深い調査資料を検出することが出来た。

現段階では、比較的文献資料において近世の一般的な埋葬事例は、知られてはいるが、発掘実例が少なく、地域的特色として桶棺の使用方法に精神的差異が認められるべきものであるのか、又、過渡的様相を示すものであるのか、さらには、中世的性格を残す屋敷内墓地であるのか、いまだ調査事例の少ない当地域での近世墓の参考資料となりうるものと考えられる。

(重松・丹下)

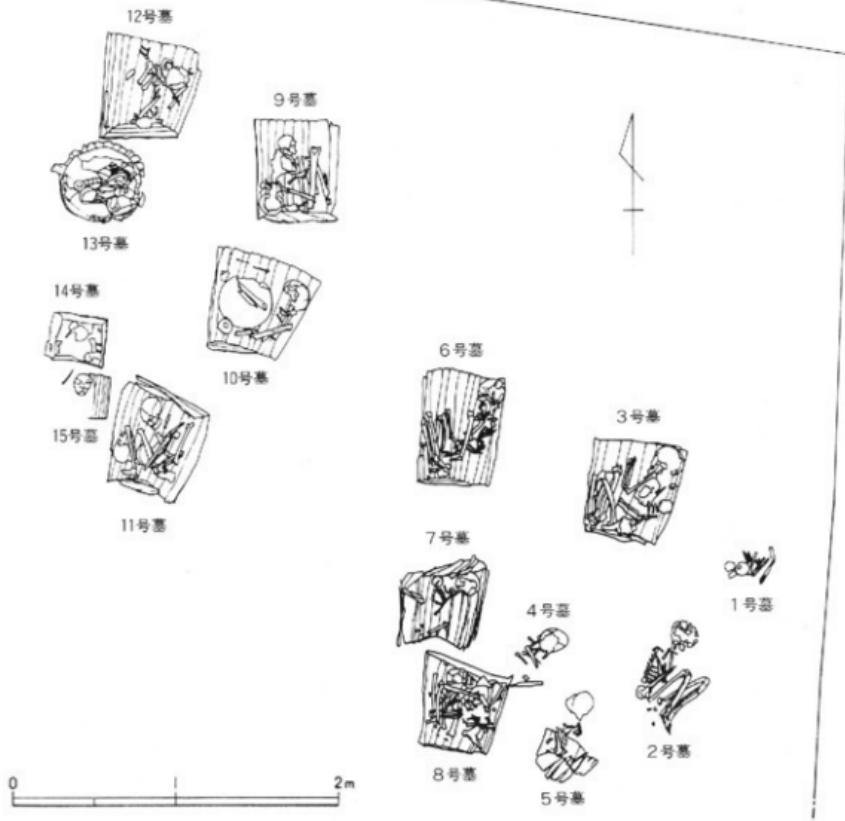


図7-2 遺構配置図

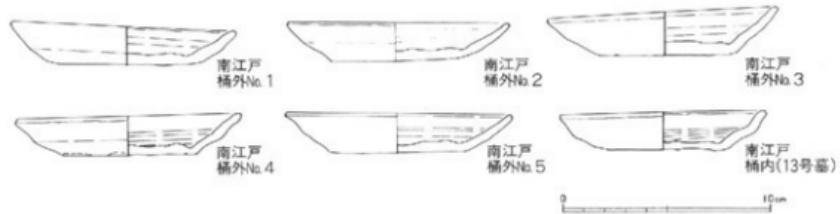


図7-3 遺物実測図

8. 古照G遺跡(3次)

1. 所在地 松山市南江戸2~3丁目

2. 絶対位置 東経 $132^{\circ} 44' 50''$

北緯 $33^{\circ} 49' 59''$

3. 調査年月日 昭和63年4月1日~7月
31日

4. 調査面積 3,000m²



図8-1 古照G遺跡3次位置図

昭和61年より、市道千舟高岡線工事に伴い、事前調査を行っている。今回の調査区は、2次調査区の東続きを行った。この3次調査区は、JR松山駅より南東500m、古照遺跡より東へ500mに位置している。調査区を生活通路と水路の関係で4区に分区し、西端を1区として東へ向かい1~4区に分けた。

1区では、西側に自然流路を確認するとともに、古墳時代の遺物包含層を確認した。

2区からは、地表下50cmより厚さ40cmの黒色包含層を確認した。この層は、中世主体の包含層であった。この黒色土層下面に造構面があり、溝4条、土塹2基、ピット30基を検出した。又、地表下4mの黒色シルト(砂混じり)弥生時代後期末の長頸壺が出土しており、3区では、地表下3.5mの黒色シルト(砂混じり)より、古墳時代前期4世紀後半段階(布留Ⅱ式併行期)の壺、高杯、小型丸底壺が一括で出土した。4区からは、地表下30cmより、近世初頭の土塙墓が2基(人骨・土師皿出土)と、中世の曲物の井戸1基を検出した。

3次調査の出土遺物として、土器では弥生時代後期末~近世前期まで出土している。石器としては、砥石、石鎌、石斧、石庖丁、スタンプ状石器がある。土製品では、土鍤、紡錘車。木器では「スキ」、板状木器や鉄片、古錢等が出土している。

(松村・宮崎)



図版8-1 1区 木出土状況

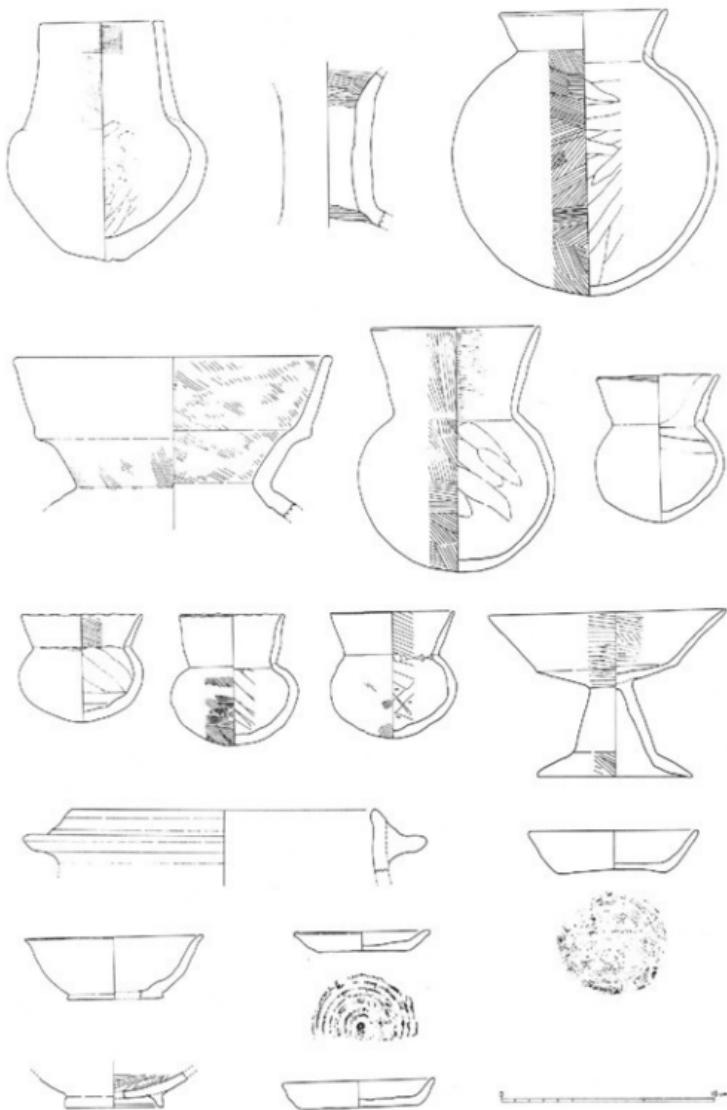


図8-2 遺物実測図

9. 客谷B地区古墳群

1. 所在地 松山市南江戸6丁目1586他
2. 絶対位置 東経 $132^{\circ}44'28''$
北緯 $33^{\circ}50'29''$
3. 調査年月日 昭和63年2月22日～8月
17日
4. 調査面積 900m²



図9-1 客谷B区古墳群位置図

市教委は松山総合公園整備に伴い、大峰台丘陵の数地点を継続的に発掘調査、確認調査を行っている。客谷B地区は61年度調査のA地区丘陵と東側丘陵とに挟まれた鞍部である。この鞍部は南下りの勾配をもって南北に細長く伸びており、その北端の最高所、標高65～70mの地点で南北に並んで2基の円墳が検出された。南を1号墳、北を2号墳としている。

1号墳は墳丘径16mの円墳で現状幅2.5mの周溝を持つ。この墳丘中央部に残存長6.2mの横穴式石室を構築している。主軸方位をN53°Eにとり、南西部に開口する。墳丘とともに主体部も削平をうけており、羨道部では基底石すら残存していない部分がある。玄室長3.9m、幅1.9m、玄門部幅1m、羨道部残存長は2m、幅1.3～1.5m、入口に向けて僅かにハの字状に開いている。2号墳に比べて大ぶりの石材を小口積みして構築し、玄室床面には石室構築材と同じ石材を10～30cmの割り石として河原石とともに敷きつめている。石室内より7世紀第1四半期から第2四半期に比定される須恵器類、鉄器、玉類、耳環を出土した。また、周溝内より第1四半期に比定される提瓶を出土しており、1号墳は7世紀初頭に構築され、中頃まで追葬が行われたものと考えられる。なお、周溝内基底部よりかなり浮いた状態で蛇紋岩製子持勾玉を出土しているが、直接本墳に伴うものとは考え難く、丘陵部からの流入遺物であると思われる。子持勾玉の県内の出土は5例伝えられているが、現在遺物を確認できるのは、今回を含めて3例のみである。

2号墳は径16mの円墳で、一墳丘に複数の石室を持つ。墳丘上にはほぼ磁北に沿って2基の横穴式石室が並んで検出された。西の一基をA石室、東をB石室としている。A石室は全長5.2m、玄室長3m、幅1.7m、羨道部長2.2m、幅1.4～1.9mの規模を持つ。明確な袖はみられないが、玄門部をやや絞ったプランをなす。両袖式の退化形態と考えられるが、いずれの時期かに羨道部に変更を受けており、片袖状に書き直しが行われている。B石室は全長4m、玄室長2.8m、幅1.2m、羨道部長1.2m、幅1.1mの無袖のプランをなす。両石室ともに南に開口し、石室内から7世紀初頭の須恵器を出土している。墳丘南西、南、南東の肩部あるいは斜面部には、1×0.5m規模の小石室が殆んど壊滅状態で検出された。B石室北部の墳丘上および、周溝内には須恵器の大甕が2個体埋設されていたが、内部からの遺物等の出土はなく、その性格については今後の検討が必要であろう。

(松村・栗田)



图9-2 1号填石室平面图

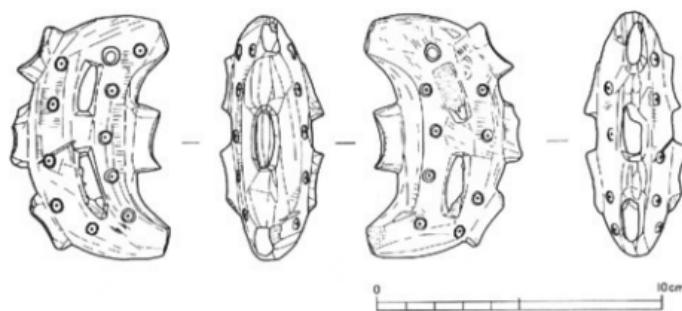


图9-3 子持勾玉实测图（1号周溝出土）

10. 大峰台遺跡

1. 所在地 松山市南江戸5丁目1586

- 6

2. 絶対位置 東経 $132^{\circ}44'36''$

北緯 $33^{\circ}50'30''$

3. 調査年月日 昭和62年11月4日～63年

5月12日

4. 調査面積 1,500m²



図10-1 大峰台遺跡位置図

当遺跡は、松山平野西部、大可賀、三津浜海岸の東方、約3.5kmに位置する大峰台丘陵の山頂部、海拔133mを僅かに下った南斜面（海拔128~120m）に位置する。山頂部からの眺望は当平野の独立丘陵中でも随一で、南西は伊予市、北は北条市の海岸線までを一望でき、沖に浮かぶ瀬戸内の島々も手にするが如く望むことができる。また、平野部に視線を移せば、はるか東方の石鎚連山を背景に、松山平野の隅々までを見渡すことができる。南方約1kmには古墳時代中期の大規模な灌漑施設として名を馳せた古照遺跡を眼下にし、その他、当平野の各遺跡のほとんどを眺望の中に含んでいる。その立地から、第二次大戦中には高射砲陣地として利用され、頂上部稜線上には残塹等によって破壊されている。今回の調査においても、径8m、正八角形のコンクリート製の砲台跡を検出している。

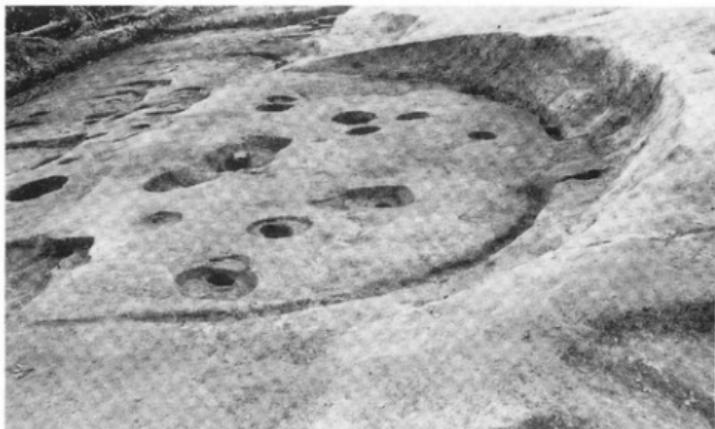
本調査区の東に隣接する区域は、昭和49年に当教委によって調査が行われ、住居址、土壙等が検出されている。昭和64年度一部開闢予定の松山総合公園整備に先立ち、当教委は昭和59年より分布調査、確認調査を行っており、これらの調査成果に基づいて当調査区の発掘調査を行った。

本遺跡は40mの間に8mの比高差を持つ南斜面に立地している。検出された遺構は、竪穴住居址14棟、掘立柱建物2棟、溝状遺構6条、柵状遺構10条、段状カット遺構4個所、200を越える柱穴等で、これらの遺構はすべて弥生時代中期中葉の短かい一時期に存在していたものである。竪穴住居は、円形の大型のものSB-7、8と、その他の隅丸長方形の小型のものとに分けられる。SB-7は段状カット遺構に切られており、一部分が残存するのみで、周壁溝の一部が検出されたことにとどまった。SB-8は、径6.5mの円形で斜面下方の南半分は遺存していない。柱穴は4本検出されており、その配置から6本柱の主柱構成になるものと思われる。中央部に焼土の抜がりが確認された。斜面を半月形に深くL字カットして平坦面をつくり、その半月形の立ち上がり基部に周壁溝を掘る。掘削土を斜面下に造成して1棟分の平坦面を確保していたものと思われる。周壁溝は斜面の最も高い部分で1mの間隔を残して途切れる。これは入口に伴うものとも考えられるが、斜面という立地を考えれば、こういった部分に入口を設けるのは不合理であり、何か別の機能を考えるべきかもしれない。小型の住居址は3×2.5m前後の隅丸長方形をなし、SB-8の上、下方のほぼ同一センター上に並

んでいる。床面に焼土は認められず、またそのいずれもが合理的に割り付けられる柱穴を伴っていないところから、無柱の仮小屋的なものと考えられる。掘立柱建物はSB-16、18の2棟である。SB-16は1×2間分検出されているが全容は不明、SB-18は1×2間の建物で、四隅の柱穴が径、深さともに1mと非常に大きく、桁行中央の柱穴は小規模である。四隅の大柱穴はそれぞれ、桁行側の小規模な柱穴を切っており、これら小柱穴で構成される1×2間の建物を拡張、建て替えしたものと考えられる。なお、大柱穴には抜きとりの痕跡がみられ、抜きとり穴には壺、甕の破片が投入されていた。おそらく、建物廃棄の際の祭祀



図版10-1 調査地近景（西より）



図版10-2 SB-8（東より）

にかかるものであろう。棚状造構には2種類ある。1つは3~4間の柱によるもので、多くの場合、溝状造構に伴う。もう一例は杭によると思われる棚である。これらは発掘区の南西部で検出されているが、径10cm内外の逆円錐状の穴が0.4~0.5mおきに全長3~4mにわたって数条検出された。溝、棚ともに斜面に直交して設けられており、排水や土止めのためのものと考えられる。先述のように、出土遺物は中期中葉に比定される。甕においては、直角ないし斜め上方に張り出した口縁とその直下に押圧突帯を貼付するもの、壺は垂下口縁の外面に多くの場合、ヘラ描きの鋸歯文を施し、頸部に断面三角形の突帯を2条、或いはそれ以上巡らすものを主とする。なお、包含層から分銅型土製品、碧玉製管玉を各1点、柱穴、包含層から土製勾玉を3点出土している。石器は打製及び磨製石鏃、磨製石斧、石庖丁の未製品を石斧に転用したもの等が出土した。

(栗田)

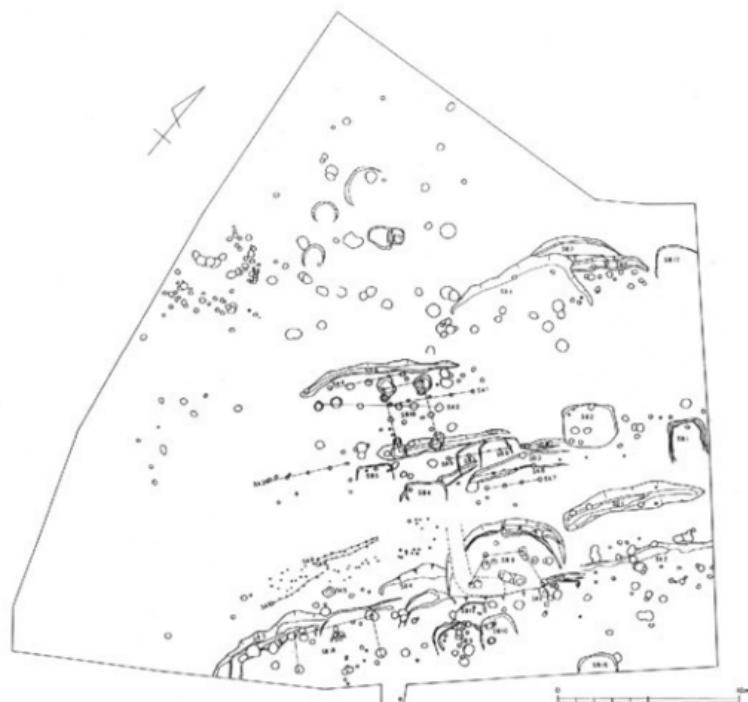


図10-2 遺構配置図

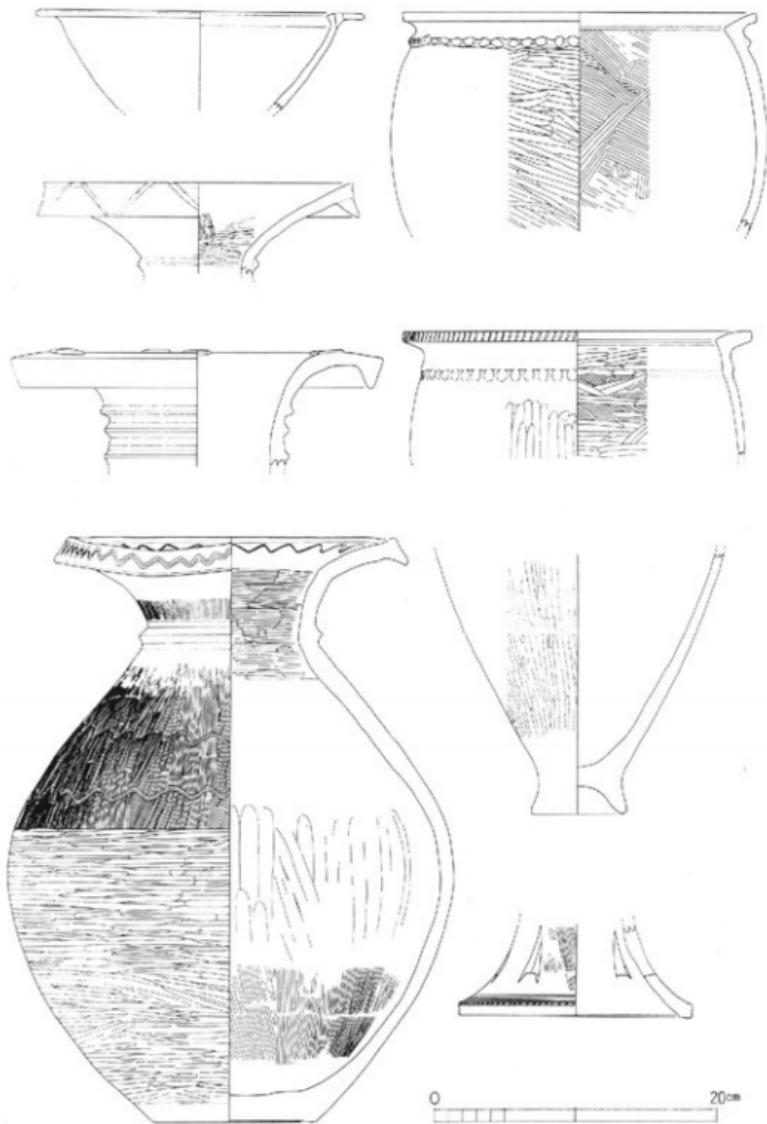


図10-3 遺物実測図

11. 辻 遺 跡

1. 所 在 地 松山市朝日ヶ丘1丁目
1376他
2. 絶 对 位 置 東経132°44'37"
北緯 33°50'26"
3. 調査年月日 昭和63年5月11日～平成元年2月28日
4. 調 査 面 積 3,000m²



図11-1 辻遺跡位置図

当遺跡は、昭和62年11月から63年4月の頂上部の調査によって弥生時代中期中葉の高地性集落址が検出された大峰台丘陵の東裾部、標高35mに位置する。頂部と同様、松山総合公園整備に伴う調査である。現状変更予定の園地エントランス部、園路部分についてトレンチによる確認調査を行った結果、園路部分の2地点、B区、C区において遺物の出土がみられた。63年はB区の調査を主として行った。B区は丘陵東斜面裾部の鞍部にあたる地点である。この鞍部を利用して、江戸時代末期の弘化2年には土盛りによる堰を築いて溜め池が構築されており、堰下には現在も紀年銘入りの一宇一石塔が残されている。調査地は、この溜め池の堰下の水田地である。現状は水田造成のため、削平、造成されているが、本来は西から東へかけてのかなりの勾配を持っていたものと思われる。鞍部の谷地形は幅10m、長さ16mにわたって調査区の北西から南東方向に検出されており、土砂の流入堆積がくり返されている。土層は21層に分層されるが、大きくは7層に分けることができる。上層より水田耕土（1～5層）、弥生、古墳、古代混在層（6層）、弥生後期後葉包含層（7層）、無遺物層（8層）、弥生中期中葉包含層（9層）、無遺物層（10層）、弥生中期中葉包含層（12、14層）となる。14層まで地表下2.6m、谷の底面は緩いU字状を呈する。6層及び、9層以下の包含層については、その出土状況、遺物の量から流入堆積によるものと思われる。9層、12、14層出土の中期の遺物は、頂上部と同時期の凹線文出現以前のものである。7層では、器台、小型壺等の供獻用土器をはじめとする、弥生後期後葉の遺物が疊とともに密集して出土した。完形品も比較的多く、原位置を大きく動いた様相も窺えないところから、意図的に投棄されたものと考えられる。大峰台南麓周辺には弥生後期の土壤墓が分布することが知られており、東麓での分布は不明ながら、これらの土壤墓に関連を持つ可能性が強い。

（栗田）

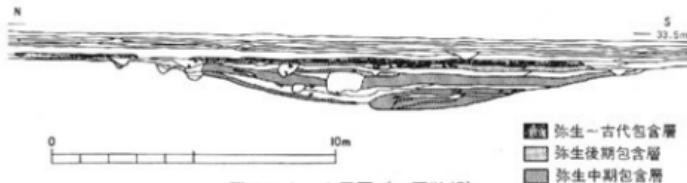


図11-2 土層図（B区鞍部）

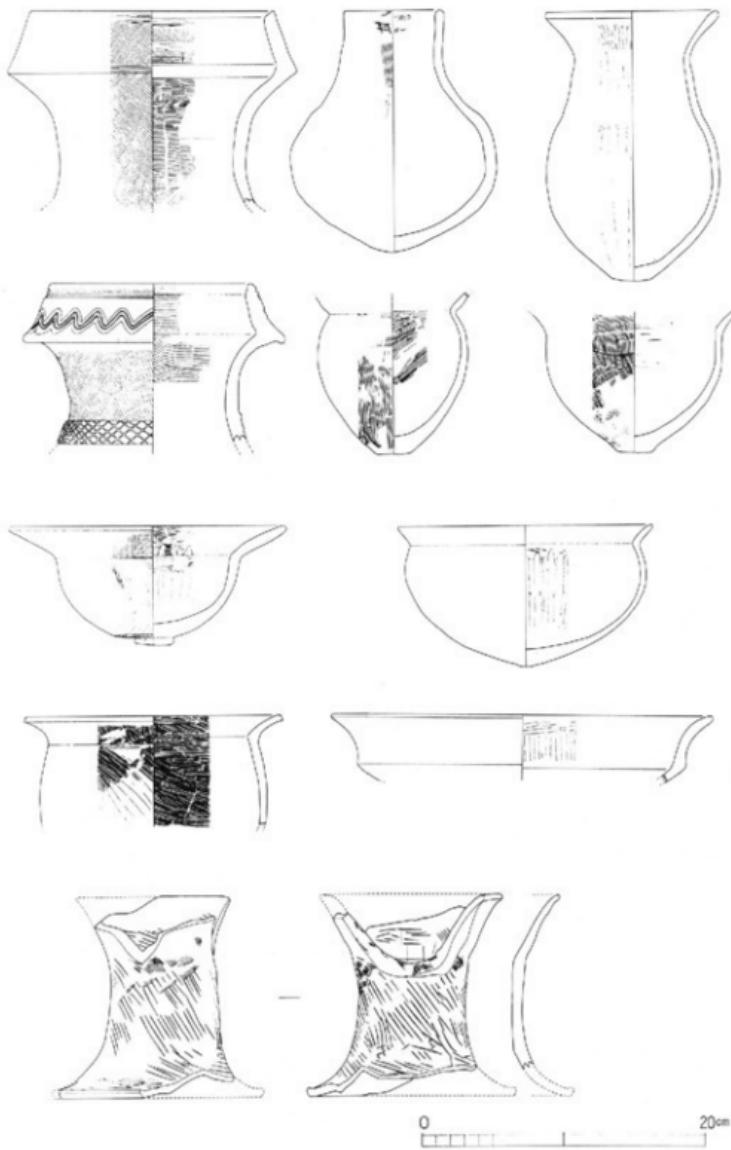


図11-3 遺物実測図（B区7層出土）

12. 澤 遺 跡

1. 所 在 地 松山市朝美2丁目4-30

2. 絶対位置 東経 $132^{\circ} 44' 52''$

北緯 $33^{\circ} 50' 42''$

3. 調査年月日 昭和63年8月17日～10月

25日

4. 調査面積 500m²



図12-1 澤遺跡位置図

本調査は、松山市道、本町～宝塔寺線建設整備に伴う代替地となる市有地の発掘調査である。調査地は松山総合公園としての整備が行われている大峰台丘陵の北東裾部、標高18～21mの住宅地で、現在、建設省により建設が進められている松山西部環状線によって西側のA区と東側のB区の2区に分割されている。両区は道路幅分、約30m離れており、道路部分については歴史文化財センターによって調査が行われた。先述のように山麓部の住宅跡地であるため、ひな段状の削平造成が行われており、削平を免れた部分にのみ遺構が検出された。A区では総柱の掘立柱建物SB-1と、SB-1を切る掘立柱建物SB-2、その他に棚状造構、溝が検出された。このうち溝については遺物の出土が僅かであり、明確な時期を云々することはできないが、層位、埋土の状況から、かなり新しい時期に掘られたものと思われる。SB-1は桁行、梁行ともに3間、あるいはそれ以上の総柱建物である。桁行柱間1.8m、梁行柱間1.3mを測る南北棟の建物となる。柱穴は径80cm前後の円形、または隅丸方形のプランをなす。SB-1を切るSB-2は西辺の一部が検出されたのみで規模、プラン等は不明であるが、主軸方位をSB-1と同じくすることからSB-1の建て替えと思われる。この区の包含層からは弥生時代中期、後期、古墳時代終末期、奈良時代、平安時代、さらに近世の遺物を出土しており、建物の年代を特定するには困難を伴うが、SB-1の柱穴出土遺物の下限が平安時代、11世紀の前半期におさまると考えられる高台付土師器窯の底部片であることから、建物の上限はこの時期におくことができる。ただし当地における古代以降の土師器編年は、その諸についたばかりであり、年代についてはなお流動的である。棚状造構は長さ3間の簡略なものであり、これらの掘立柱に伴うものとは考え難い。前年度調査の大峰台遺跡、吉藤宮ノ谷遺跡、また当遺跡B区において弥生時代中、後期の斜面立地の集落に類似の遺構が多くみられることから、この時期の遺構と考えられる。B区では弥生時代後期の壺棺墓3基、竪穴住居址1棟、掘立柱建物1棟、棚状造構が検出された。竪穴住居は一辺3.2mの方形で、大峰台遺跡の方形住居址と同様に斜面をコの字状にL字カットして構築されており、斜面上部に棚状造構を伴う。また壺棺墓SK-1からは上製勾玉が1点出土している。

(松村・栗田)



図12-2 A区造構配置図

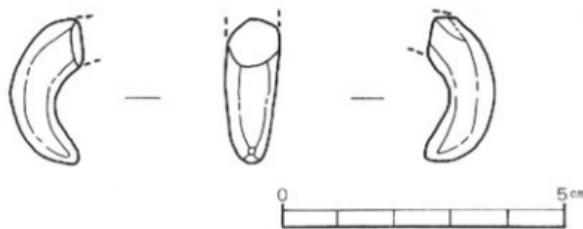


図12-3 土製勾玉実測図 (B区SK-1出土)

13. 道後城北RNB遺跡

1. 所在地 松山市道後樋又

2. 絶対位置 東経132°46'18"

北緯 33°50'56"

3. 調査年月日 昭和63年1月5日～同年
2月4日

4. 調査面積 300m²



図13-1 道後城北RNB遺跡位置図

松山城北側一帯の広範囲にわたって存在する道後城北遺跡は、これまで松山市立東中学校をはじめ、愛媛大学、県立北高等学校、松山大学、日赤などから弥生前期から古墳期に涉って住居址や土器類の出土があると共に、平形銅劍や分銅形土製品なども合わせて出土している地域である。調査地はこれら集落の形成された微高地西北端辺部（海拔26m）に立地している。

本遺跡の調査については、松山市樋又町、南海放送スタジオ増築工事に伴って事前確認（No.67文京遺跡）を行い緊急調査した遺跡である。

検出層序のうち、地表下99～115cmにあたる6層中の下位層からは柱穴数個と南北溝（S D - 1）幅70cm深さ30cm長さ18mを検出し、それより須恵器片が出土している。7層からの遺物出土は認められなかった。

8層から9層（9A層）は、縄文晩期後葉から弥生初頭期のもので、少量であるが弥生土器の様相をもつものに如意形口縁をなす彫形土器や胴部を赤色塗彩する壺形土器が出土し、これらと合わせて晩期後葉段階の刻目突帶文土器や黒色磨研系の浅鉢、サスカイト製石鍬、石匙などの石器類が出土した。このうち刻目突帶文土器は、一条突帶と二条突帶のものがそれぞれ見られている。

9層下層（9B層）から10層上層（10A層）にかけては、前者と大きく時期を隔てるが後期後半段階の縁帶文土器、粗製無文深鉢形土器、注口土器などが出土した。

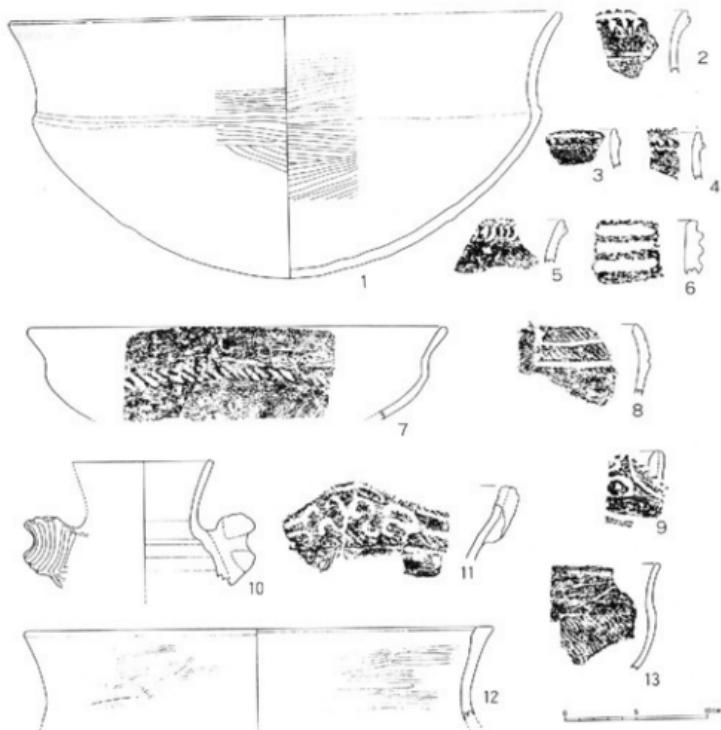
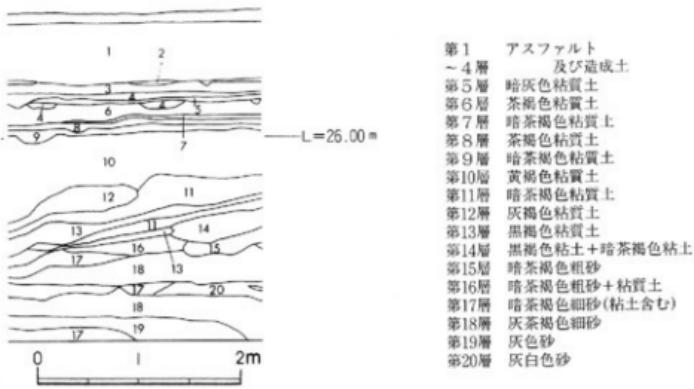
10層段階での検出地形は、和泉砂岩による黄褐色土（厚さ40～70cm）で東の愛媛大学方向から広く一帯に堆積が認められているもので、本調査地では全体的にみて西北下がりの地形を呈している。また調査地西端部からは北々東から南々西方向にかけての河川遺構（長さ18m）を検出し、砂層に伴って流木の出土もみられた。11層からは遺物の出土はなく砂層と砂砾層が互層に厚く堆積しており、地質学的に見て約5千年前段階の氾濫層とみられている。^(注1)

なお本調査地での検出層序のうち、6層上層段階が本調査地西隣地の松山大学7号館より検出の8層相当層としてみられる。^(注2)

（西尾）

注1. 平井幸弘、「松山平野、石手川扇状地の地形と沖積層」

注2. 松山大学7号館より検出、土師皿13C出土層



14. 松山城北郭遺跡

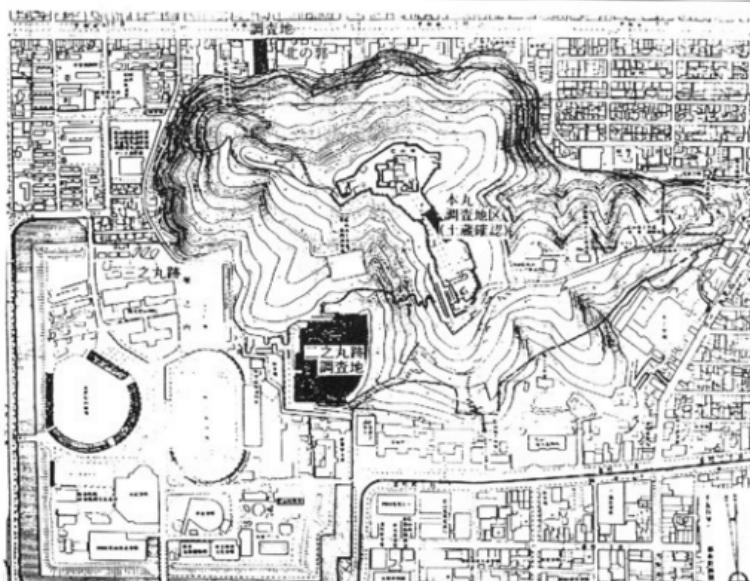


図14-1 松山城北郭遺跡位置図

1. 所在地 松山市平和通4丁目1-

6

2. 絶対位置 東経132°45'55"

北緯 33°50'40"

3. 調査年月日 昭和62年10月21日～10月

30日

4. 調査面積 250m²



図版14-1 全景

松山城関係の調査としては、昭和59年7月本丸内での土蔵遺構の確認や、同年9月から昭和62年3月にかけての二之丸郷関係遺構の調査、昭和64年1月からの若草町、家臣屋敷地の調査などがある。

本調査地域は、加藤嘉明によって築造された松山城北ノ郭跡地にあたるもので、東西79間1尺(143.39m)、南北18間～32間半(32.7～58m)地に、高さ4間(7.27m)の高石垣があり、終戦まで存在した所である。当調査では、丁度その西端部の石垣基底石(御影石70cm大)南北13.5mと裏込めを検出したものである。
(西尾)

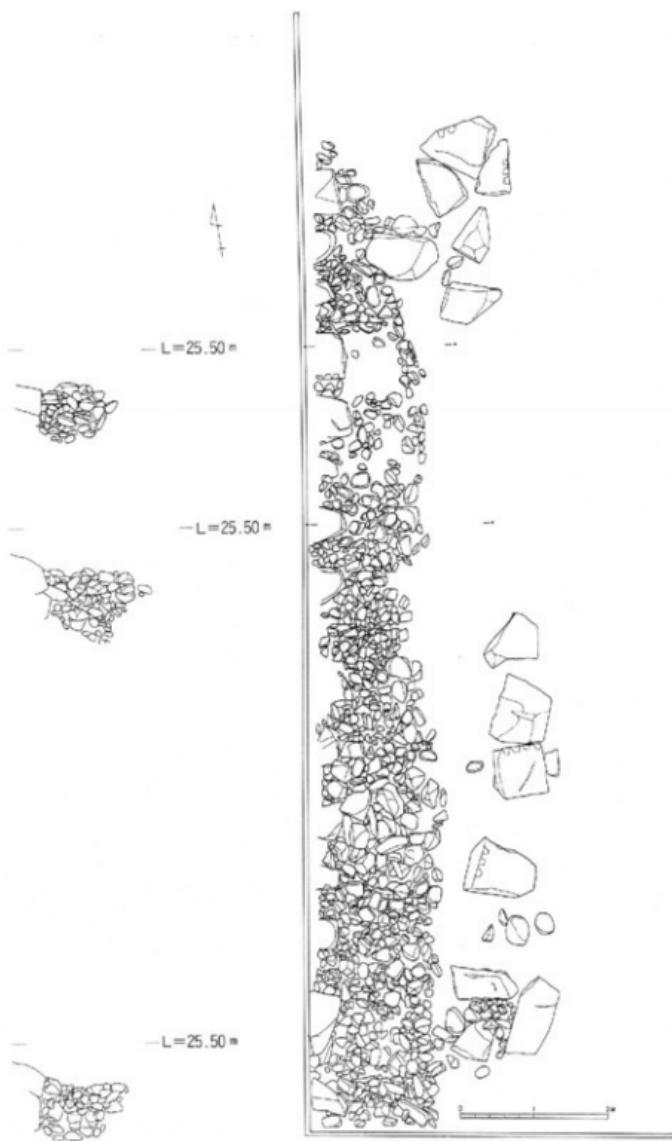


図14-2 北部検出遺構図

15. 道後鷺谷遺跡

1. 所在地 松山市道後鷺谷町5-32

2. 絶対位置 東経132°47'23"

北緯 33°51'05"

3. 調査年月日 昭和62年5月11日～5月
30日

4. 調査面積 200m²



図15-1 道後鷺谷遺跡位置図

当遺跡は、松山市東部の道後地区に所在し、松山平野を遠望できる丘陵裾部に立地する。当遺跡や文京遺跡、道後今市遺跡等が所在する道後城北遺跡群は、縄文時代から近世に至るまで遺跡の密度が高い。道後今市遺跡、道後樋又遺跡、祝谷六丁場遺跡、道後公園東麓遺跡からは、平形銅劍が出土しており、弥生時代においては中心的な遺跡群と考えられている。今回、道後椿会館増築工事に伴い調査を行った。

調査区は、丁度丘陵と丘陵にはさまれた谷部であった。地山岩盤上で弥生時代の包含層を確認した。造構は、旧地形では谷あいの湿地帯の為、検出されなかったが、調査区南西隅、丁度、谷の最深部の落ち込みより弥生時代中期の木器類（堅歛・板状木器・柄状木器）がまとまって出土した。他に、調査区南隅断面に打ち込み杭を1本検出した。

出土遺物としては、上記の木製品の他、土器として弥生時代前期後半～後期後半の壺・甕・高杯。古墳時代須恵器・土師器片。中世の黒色土器。近世の土師皿が出土した。又、主体となるのは、弥生時代中期中葉～後期初頭の時期であった。他に石器として石鍬・石斧・砥石・凹石。土製品として、他に例を見ない径3.8cmの人面形土製品が出土した。この人面形土製品は、髪の毛を刺突で、目を半截管状工具。口をヘラ状工具で表現しており、かなりリアルな表現になっており、道後城北遺跡群（文京・祝谷六丁場）で多く出土する分銅形土製品に類似する表現法である。ただ人面部はほぼ面を成すが、裏は割れの状態で同一個体の破片がなく、ただの円盤状か棒状の土製品に付くのか、土器の貼り付けかは判断しがたい。

又、今回の遺物の出土により、当調査区の西及び東の丘陵上に集落が存在する可能性を示すと思われる。

今回の調査にあたり、ホテル「椿館」の関係諸氏には、協力、援助をいただきました。記して感謝いたします。 (宮崎)

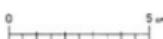


図15-2 人面形土製品実測図

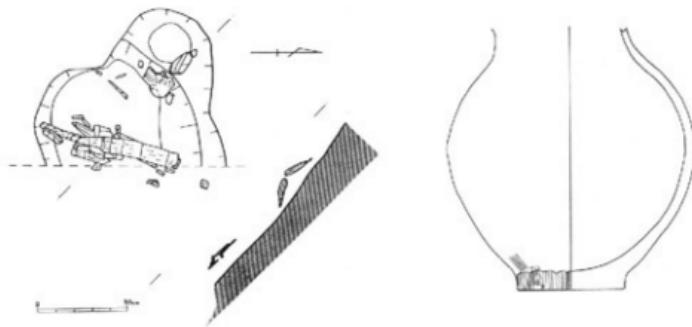


図15-3 木器出土状況図

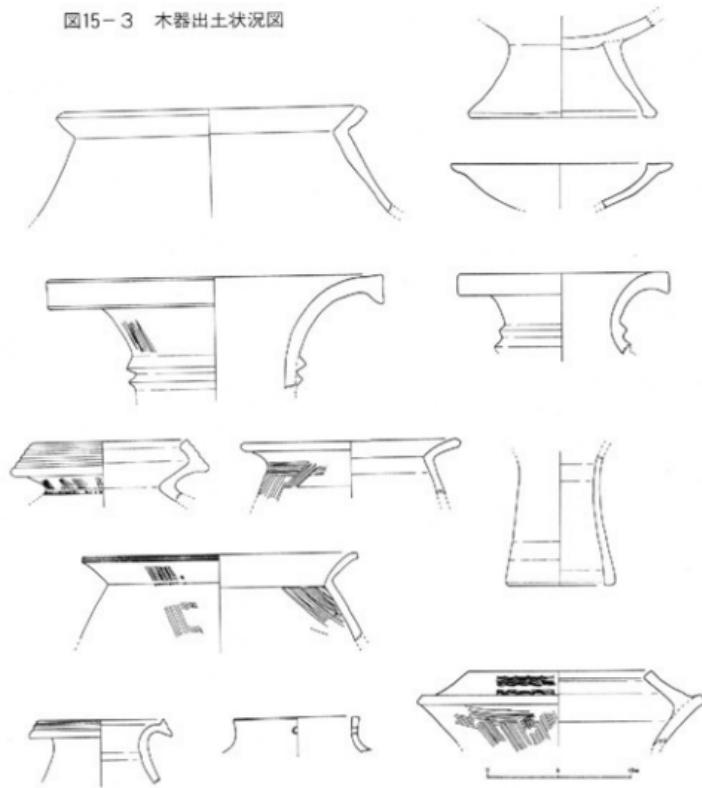


図15-4 遺物実測図

16. 祝谷六丁場遺跡

1. 所在地 松山市祝谷6丁目1122他

2. 絶対位置 東経 $132^{\circ} 46' 39''$

北緯 $33^{\circ} 51' 31''$

3. 調査年月日 昭和62年11月12日～昭和63年7月31日

4. 調査面積 9,200m²

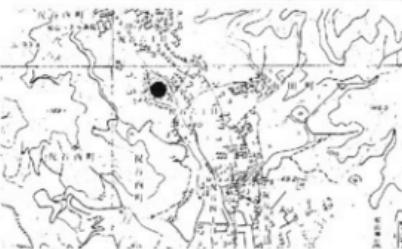


図16-1 祝谷六丁場遺跡位置図

祝谷六丁場遺跡は、松山市北東部道後城北地区の丘陵谷間(標高48.5～63.3m)の緩斜面上に立地する。弥生時代中期中葉を主体とする遺跡であり、今回埋納状況で平形銅劍一振出した。周辺の道後城北地区は、弥生時代の平形銅劍や分銅形土製品が多く出土する地域である。調査区は、丸山川に面する丘陵と丘陵にはさまれた緩斜面上にあり、遺物を包含する谷間2条と、丸山川西岸のテラス上の遺構群を検出した。

調査区内の基本層序は、第1層(表土)。第2層(暗茶褐色土)中世～弥生時代。第3層(黒色シルト層)弥生時代中期中葉～後葉。第4層(黄褐色土)弥生時代中期中葉。第5層(砂層)弥生時代中期前半。又、第5層は調査区末端のテラス下層のみであった。調査区南西の丘陵すそ標高約60mで、第3層(黒色シルト)堆積後、平形銅劍一振を埋納していた。この埋納塚は長さ63cmを測り、基底面は、丁度平形銅劍を一振埋納できる長さ47cmを測る。この平形銅劍は、樋の線が滑らかな一本線で、平形銅劍の終末タイプのB II b式で道後今市出土の銅劍と同タイプであった。他の遺構として、円形の豊穴住居址6棟(内2棟は石鐵工房址)。土壙、溝ビット。井戸(径1.2m、深さ1.6m)1基であり、溝の1条を除きいずれも弥生時代中期中葉段階であった。

出土遺物として、土器では、弥生時代中期～後期。須恵器。土師器。黒色土器。輸入陶磁器などで、主体は弥生時代中期中葉で全体の8割出土であった。土製品として、分銅形土製品10点。紡錘車。土鍤。投彈状1点。石器類として、石戈1点(松山平野2例目)。石包丁。石斧(蛤刃・偏平・ノミ形)。石鎗、石皿、作業台、凹石、石鐵、叩石、紡錘車、砥石、石槍、多量のフレーク・チップ類。鉄器として、鉄斧、鋤先、刀子。木器として堅歛など、多種多量の遺物が出土している。又、鹿の絵画土器が1点出土(壺体部上半部線刻)しており、この壺の破片は弥生時代中期前半であった。

今回の調査地が緩斜面上に立地しており、調査区北東やや平坦面に生産址要素の強い石鐵工房址と土壙ビットを検出した。これらの集落に伴う居住区域は、当調査区西側の丘陵上に存在したとかがわれ、それらの居住址からの土石器の廃棄が、当調査区の遺物包含の谷間2条にたまたまと考えられる。この事は、松山平野における弥生時代中期中葉の集落址が、山間部や丘陵に多い事とともに、地域相を考えるべきと思われる。又、土石器包含層堆積状

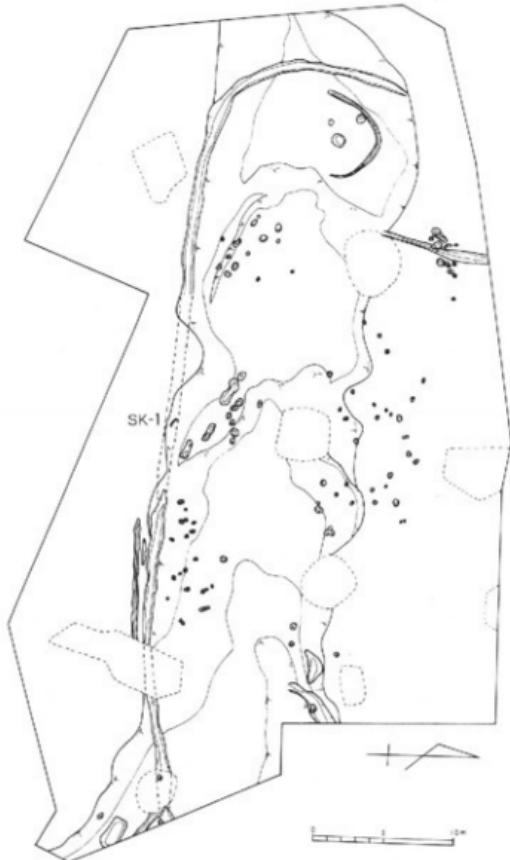


図16-2 3区遺構配置図

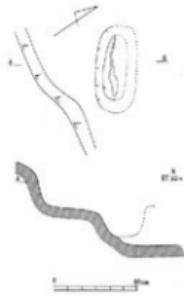


図16-3 平形銅刺出土状況図(SK-1)



図16-4 平形銅刺実測図

況が安定している事から、弥生時代中期中葉～後葉段階の土器編年資料として重要と考えられ整理を進めたいと思う。

発掘調査及び整理作業にあたっては、株式会社グリーンサービス古茂田芳郎社長を初め社員の方々及び関係諸氏には、御援助・御協力をいただき、ここに記して感謝いたします。 (宮崎)

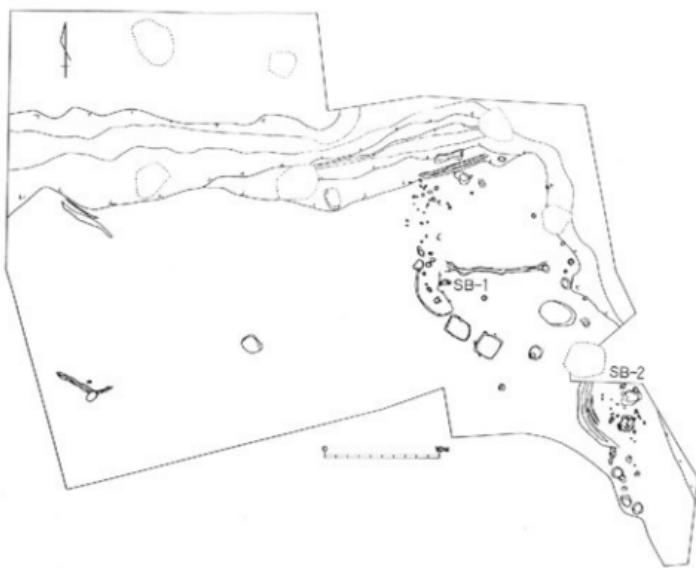


図16-5 1区遺構配置図

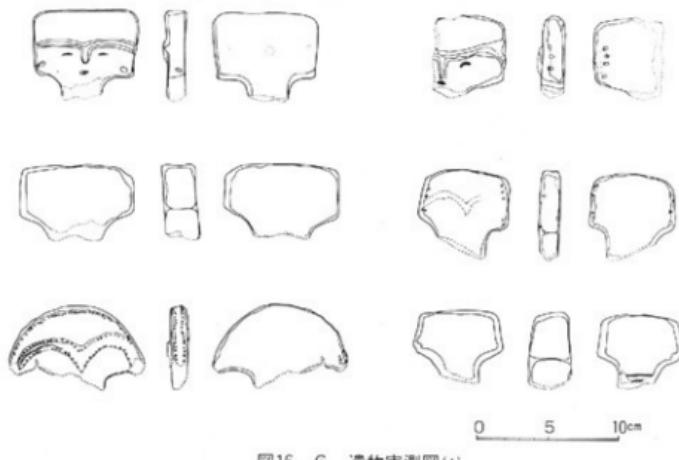


図16-6 遺物実測図(I)

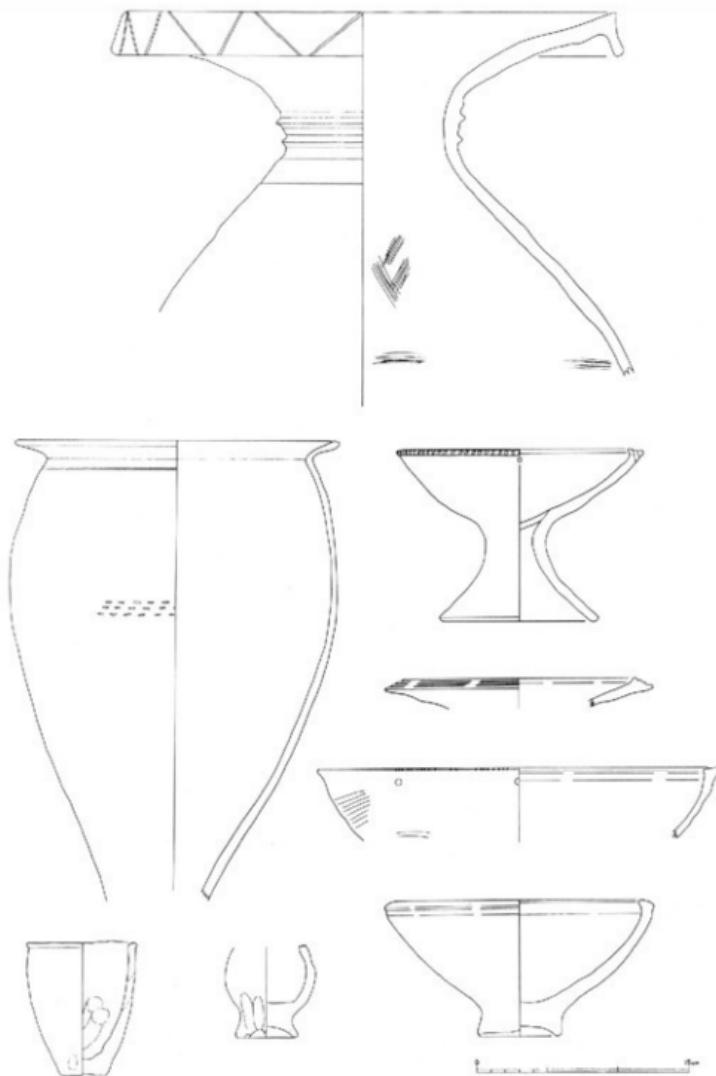


図16-7 遺物実測図(2)

17. 祝谷大地ヶ田遺跡

1. 所在地 松山市祝谷4丁目964

2. 絶対位置 東経 $132^{\circ}46'49''$
北緯 $33^{\circ}51'23''$

3. 調査年月日 昭和63年1月11日～1月
23日

4. 調査面積 200m²



図17-1 祝谷大地ヶ田遺跡位置図

祝谷大地ヶ田遺跡は、道後城北遺跡群のうち道後今市遺跡の北方1000m、祝谷六丁場遺跡より南東へ800mで、祝谷地区を流れる丸山川が形成する河川の氾濫原(標高42m)に立地する。今回個人住宅新築工事に伴い事前調査を行った。

河川の氾濫原の為、遺構面ではなく、遺物包含層(弥生時代中期～古墳時代)を検出したのみであった。基本層序は、第1層耕作土、第2層暗褐色土、第3層暗青灰色シルト層(弥生時代中期～古墳時代)、第4層砂レキ層(弥生時代中期～後期)であり、遺物の出土は、第4層上面～上層にかけて多く出土した。主たる出土は、弥生時代中期中葉(壺・甕・高杯・ショッキ形)であった。又、本年報収録の弥生時代中期中葉が主体の祝谷六丁場遺跡と土器比率の比較をすると、大地ヶ田、六丁場とも中期中葉が主体であるが、中期後葉～後期前葉の上器の比率を見ると、大地ヶ田の方が後出する土器の比率が多く、山間部の祝谷六丁場遺跡と文京遺跡との関連や移動を示唆するものと考えられる。第3層出土の須恵器は、6世紀前半であった。石器は、石鎌・石斧(船刃・ノミ形)、石皿・石包丁・フレーク・チップが出土した。

(宮崎)



図版17-1 遺物出土状況

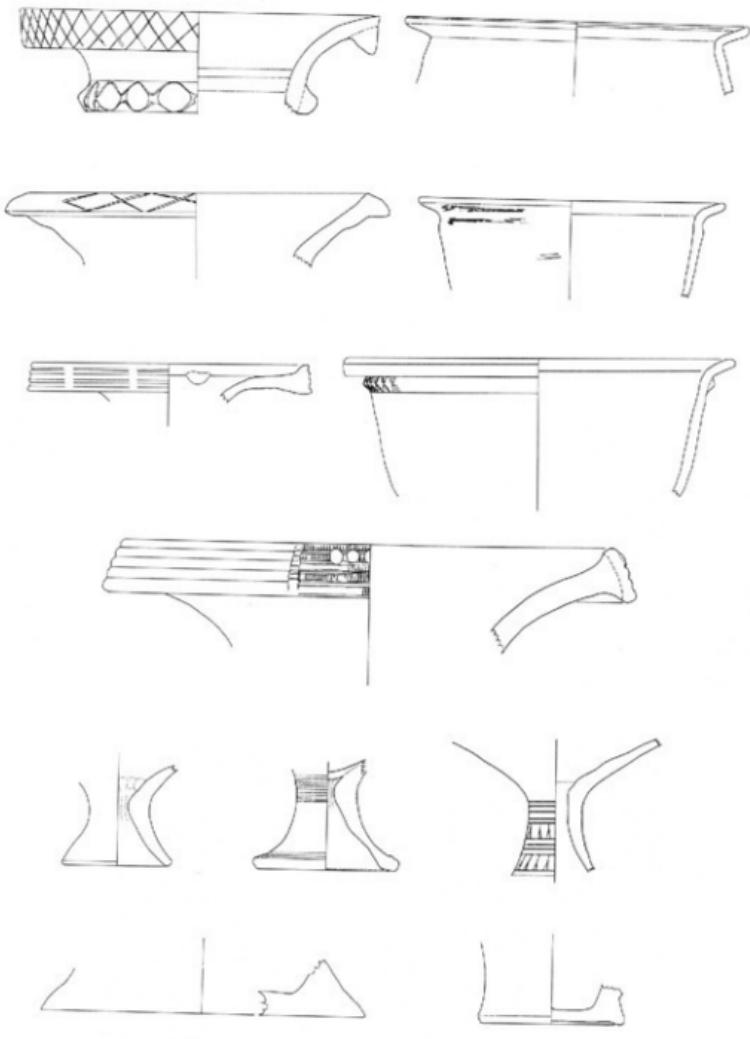


図17-2 遺物実測図

18. 伊台惣部遺跡

1. 所在地 松山市下伊台町1103番地

2. 絶対位置 東経 $132^{\circ}48'15''$

北緯 $33^{\circ}52'11''$

3. 調査年月日 昭和63年9月1日～11月
19日

4. 調査面積 8,100m²

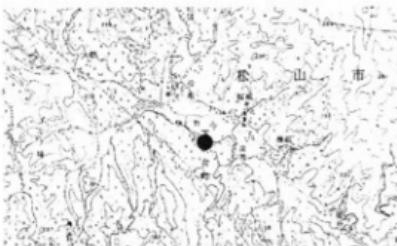


図18-1 伊台惣部遺跡位置図

本遺跡は、松山平野の北東に広がる高龜山系（標高400m）に囲まれた小規模な盆地地形に所在し、伊台川の侵食作用によって発達した低位河岸段丘の西麓緩斜面（標高140～150m）に位置している。

現在まで、当伊台地域においては、表面採集資料等により弥生・古墳群等の存在は知られていたが、発掘調査に基づく資料の位置づけは皆無であり、このような山間部での詳細な遺跡群の把握が、望まれていた。今回調査対象となった惣部地区は、未踏査地区ではあったが伊台・五明統合新設中学校建設に先立ち発掘調査が、実施されたものである。

本発掘調査において、竪穴式住居4棟、摺立柱建造物2棟、礫群1基、溝状造構等が検出され、弥生時代・中期から古墳時代に続く複合遺跡の存在が、明らかにされた。竪穴式住居4棟は、方形プランであり、多少の時間差は考えられるものの、ほぼ同時併存の古墳時代初期の小集落と考えられる。特にうち1棟（SB-5）は、火災住居と見られ一片約3m程度の不整形の小型住居址内全面に渡り、多量の炭化物と柱等の焼失家屋材が検出された。また、同時に布留式並行期の土師質土器（椀、小形丸底壺、甕、高杯、壺）が、原位置を保った状態で検出された。

当時期における出土例として、標高100mを越える山間部での検出は、類例がなく、今後石手川水系及び祝谷等平野部との何らかの社会的変化を持つものであるのか、古墳期における山間部開発の開始時期ともあわせて検討を要している。また、当時期の集落構造を理解するうえでも、山間部という特殊性を考慮しても余りある資料と考えられる。

その他、興味深い資料として、礫群（SX-1）より検出された弥生時代中期の絵画上器片と意図的とも思われる礫群の構成は、当期の祭祀形態を考える上で、多分に検討を要していると言えよう。また、後期旧石器時代の所産と考えられるサヌカイト製ナイフ形石器（三稜ポイント）もトレンチ内より採取されており、今後、当地域での資料の増加もあわせて検討を加えて行きたい。

（重松・石丸）

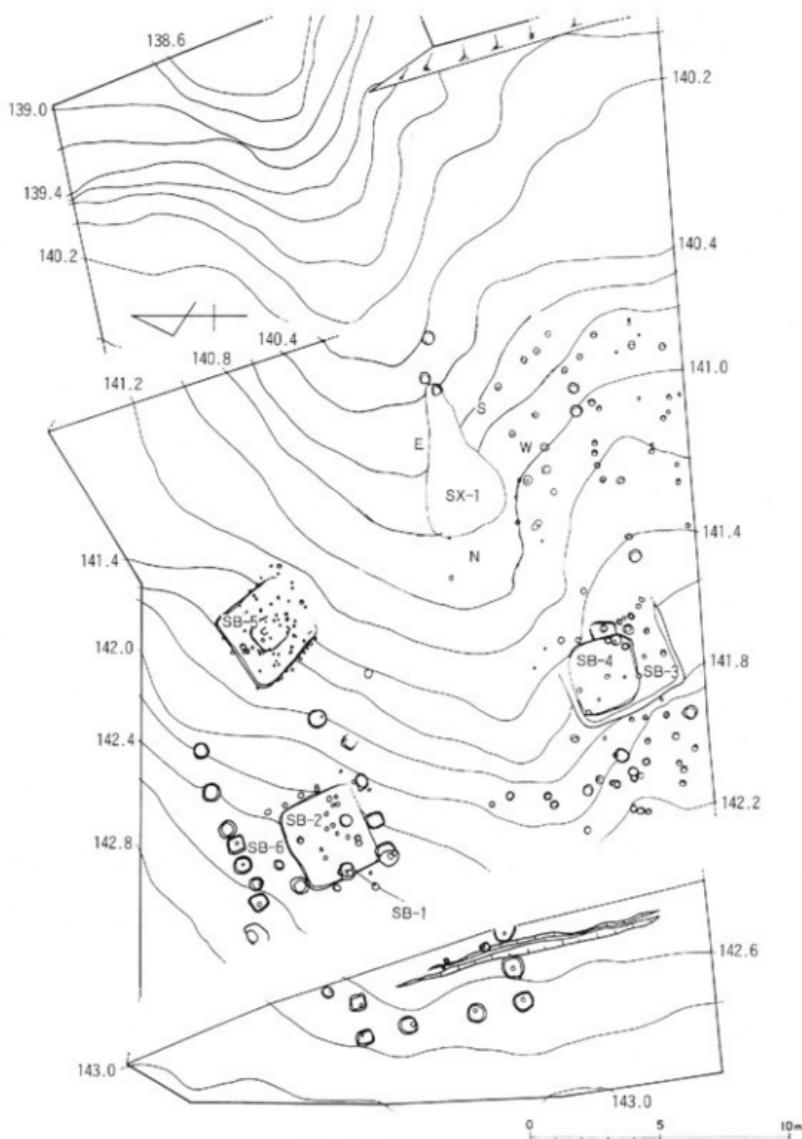


図18-2 造構配置図

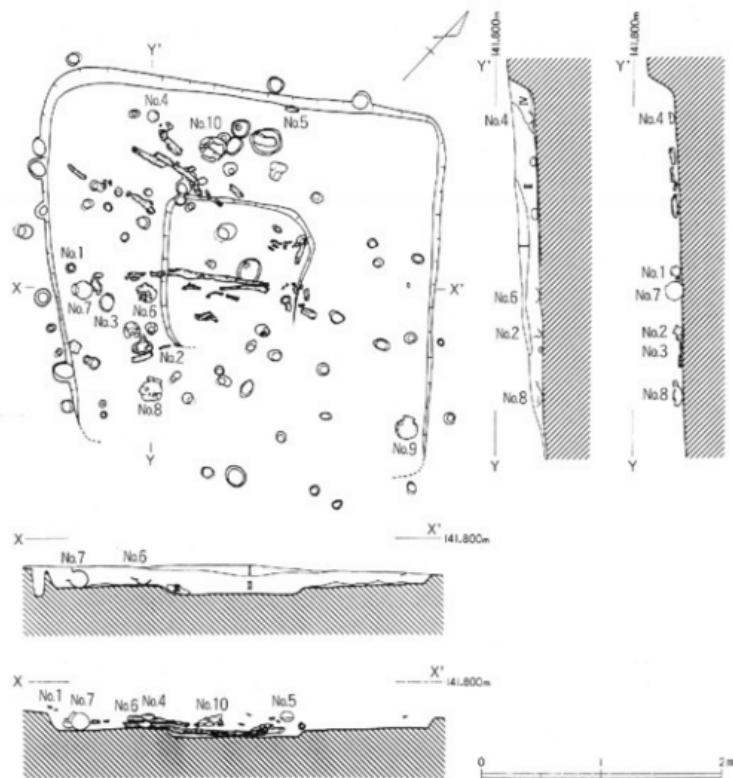


図18-3 SB-5住居址平・断面図

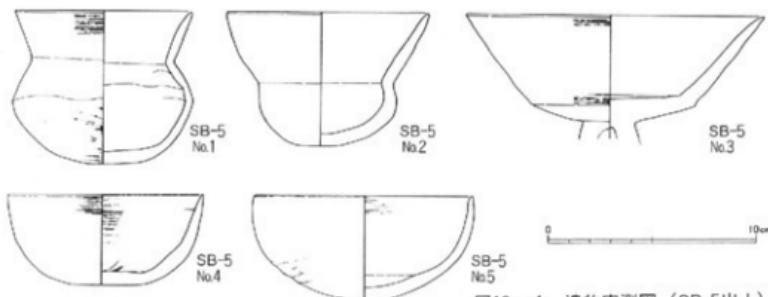


図18-4 遺物実測図 (SB-5出土)

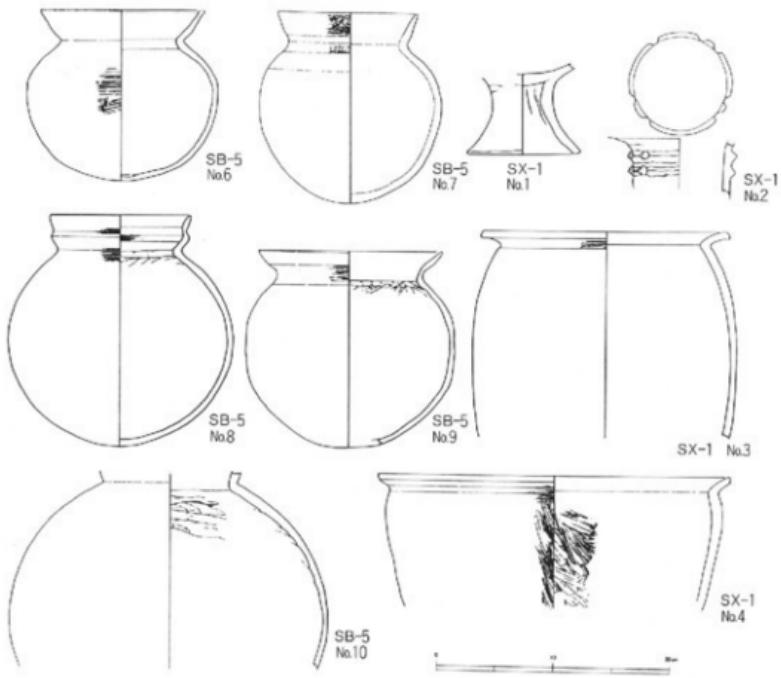


図18-5 遺物実測図（1）

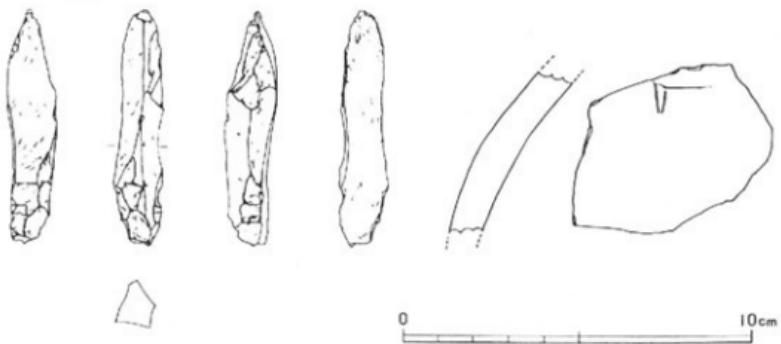


図18-6 遺物実測図（2）

19. 中村松田遺跡

1. 所在地 松山市中村1丁目65-2

2. 絶対位置 東経132°46'50"

北緯 33°49'53"

3. 調査年月日 昭和62年3月11日～5月
30日

4. 調査面積 1,400m²



図19-1 中村松田遺跡位置図

本遺跡は、国道11号線永木橋の南方約30m、旧右手川の扇状地（海拔27m前後）に立地している。付近には中村長正寺遺跡をはじめ、釜ノ口遺跡、拓南中学校遺跡など、同時期の遺跡が広がっている。

北側の発掘区をA区、南側の発掘区をB区として調査をすすめた。A区からは、円形竪穴住居址2棟、方形竪穴住居址3棟、土壙8基、掘立柱建物1棟を検出した。このうち、SB-1では多量の木炭および粘土塊が認められた。またSB-2は、床面を一度拡張している。いずれの住居址も外周に径10cm前後のピットを多数検出しており、壁体溝をもたないこととあわせて住居の構造を考える上で興味深い資料であり、詳細な検討をする。特筆すべきはSB-4で、住居址全体に数十個体の土器が、20cm大の角レキ数個とともに充てんされていた。土器は壺、甕が大半であるが、鉢、高杯、器台などもあり、鳥形注入土器1点も出土している。このほか、SK-4、SK-5からも土器を検出した。掘立柱建物SB-6は、桁行5間、梁間1間分を確認している。

B区からは、円形竪穴住居址2棟、土壙4基、溝状遺構1条を検出した。円形竪穴住居址はいずれも壁体溝をもち、外周のピットではなく、A区の住居址と構造を異にしている。土壙の中には角レキ数個を配しているものもあり、墓の可能性も考えられる。溝状遺構は、住居址と土壙を切って南北につくられており、幅1m前後、検出長26mでさらに南へ続いている。この中からも多量の土器が出土しており、A区のSB-4と同様、何らかの契機によって一括投棄されたものであろう。

他に、出土遺物としては石庵丁4、砾石3、磨石2、石製小玉1などがある。

各遺構の時期については、現在遺物整理中のため詳細は後に委ねるが、A区の掘立柱建物は奈良時代、他の遺構はほぼ弥生時代後期前半のものと考えられる。

(島瀬)

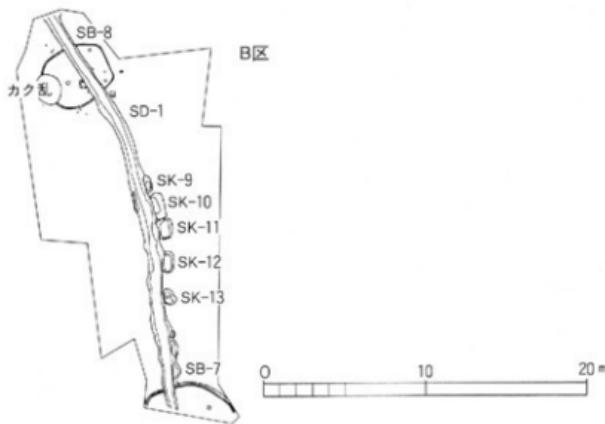
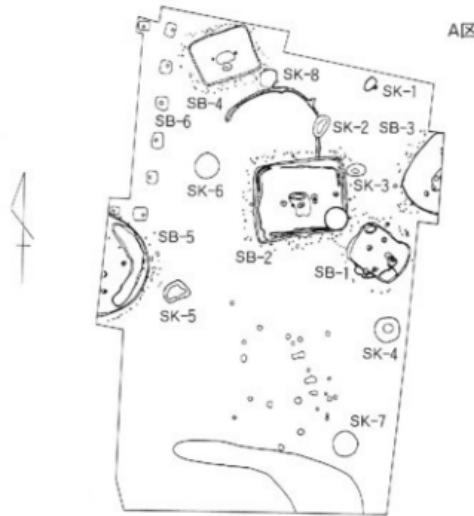


図19-2 造構配置図

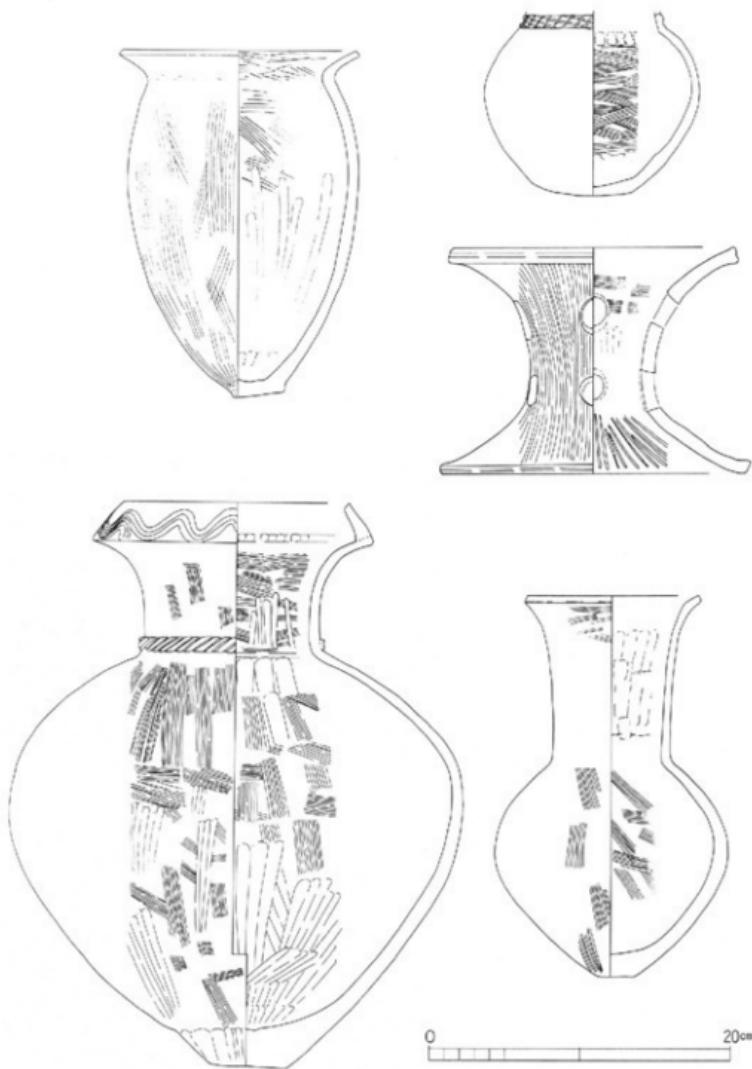


図19-3 遺物実測図 (SB-4)

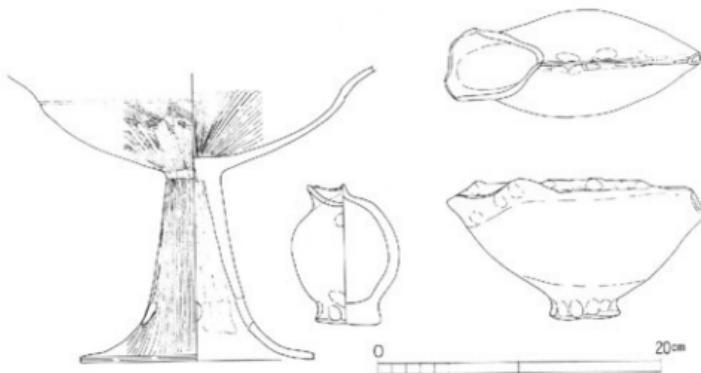


図19-4 遺物実測図 (SB-4)



図版19-1
中村松田遺跡 (B区全景)



図版19-2
中村松田遺跡 (SD-1)

20. 樽味四反地遺跡

1. 所在地 松山市樽味4丁目204番

1~4

1. 絶対位置 東経132°47'38"

北緯33°50'18"

3. 調査年月日 1988年4月1日~同年6

月21日

4. 調査面積 1,500m²



図20-1 樽味四反地遺跡配置図

本調査は、樽味遺物包含地内における宅地開発に伴う事前調査である。

立地 樽味遺物包含地は石手川上中流域右岸にひろがる低位段丘上にある。本調査区は、この低位段丘の南西端にあたる。

遺跡周辺の歴史的環境 樽味遺物包含地内には調査区北東150mの地点に樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）があり、弥生前期から中世までの生活関連遺構と遺物を確認している。東接する高中位段丘地には調査区北東1,500mに東野お茶屋台古墳群（5~6C）、南東800mに全長48.5mの前方後円墳の経石山古墳がある。

調査の概要 本調査区は、字名より遺跡名を樽味四反地遺跡とする。調査区は、調査以前は耕地整備された水田であった。基本層序は（図20-2）、第Ⅰ層が耕作土（現水田）、第Ⅱ層が水田底土であり地表下40cmまでは開発が進められていた。第Ⅲ層は黒褐色シルトで20~30cmの堆積を測る。本層が遺物包含層である。第Ⅳ層は黄褐色シルトで地山と呼んでいるものであり、第Ⅴ層は砂礫層である。遺構は、第Ⅲ層中からの掘り込みであり、第Ⅳ層におよんでいる。検出遺構は、調査区南半に集中しており溝状遺構3基、土塹1基、ピット74基を確認した。調査区北半は、旧河川及びその氾濫地帯であり遺構は北端を除き検出されなかつた。遺物の出土状況は、北端の自然地形の落ち込み部分で弥生土器が集中して出土したほか、旧河川及び溝状遺構（図20-4）において土師器・須恵器片が混在して出土している。遺物包含層からは、弥生土器、土師器、須恵器がコンテナ約30箱、縁釉陶器片1点、石庖丁1点他が出土している。本調査にて注目されるのは、調査区北端部でAT火山灰を確認したことである。AT火山灰は、第Ⅳ層直下で部分的に小角礫や微砂を若干含んだ状況で検出された。なお、AT火山灰中及び上下層には遺物の出土はなかった。

小結 本調査により弥生時代中期、古墳時代後期に同地及び周辺地域に集落が存在したことが明らかとなった。これは、同時代の石手川南岸域の集落構造を考える上で好資料となるものである。なお、本調査にあたっては地主川添政子、越智住宅産業株式会社の各氏には多くの協力・援助をうけたことを記して深く感謝の意を表します。

(梅木)

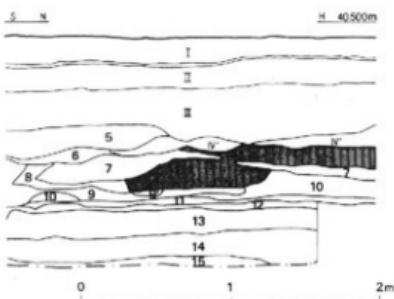
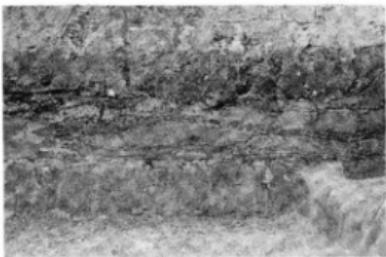


図20-2 西壁土層図（東より）

- I 耕作土
- II 床土 (ミニチ状の土器を含む)
- III 包含層 (濃黒褐色シルト) 炭、鉄分含む
- IV 淡黄褐色シルト (V層に砂混入)
- 5 灰色砂
- 6 濃黄色シルト+砂レキ土
- 7 黄灰色砂 (微砂、炭を含む)
- 8 淡黄色砂質土 (微砂、鉄分含む)
- 9 淡茶褐色砂質土 (微砂)
- 10 淡黄灰色シルト
- 11 灰色砂
- 12 淡黄灰色砂 (微粒子)
- 13 淡茶褐色粘土 (鉄分含む)
- 14 黄灰色砂 (7よりやや明るい)
- 15 黄灰色砂 (5~10cm大のレキ多し)
- スクリントーン 火山灰



図版20-1 西壁土層（東より）

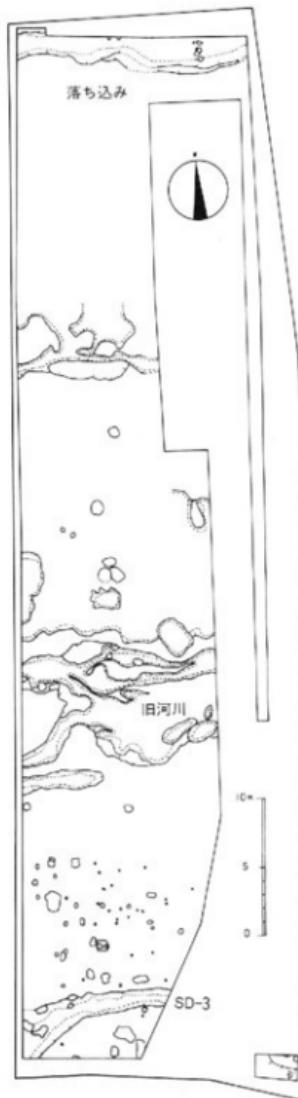
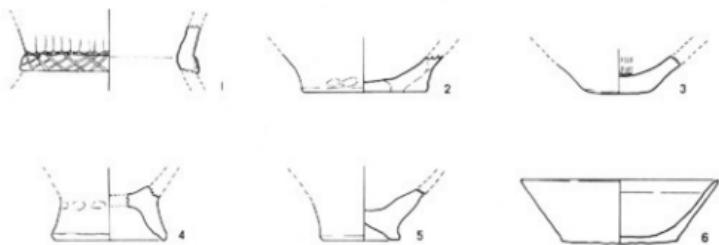
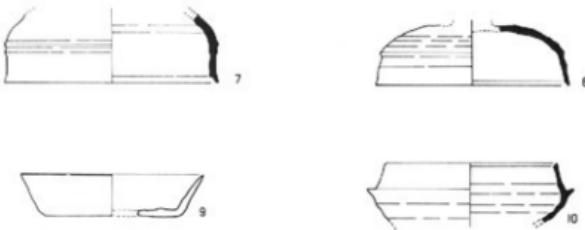


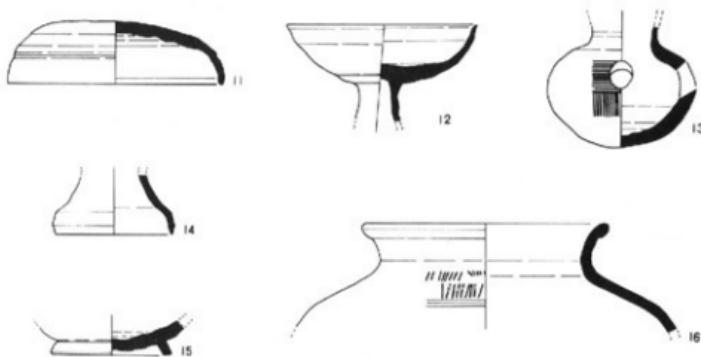
図20-3 造構配置図



1-6 落ち込み部出土遺物



7-10 第III層出土遺物



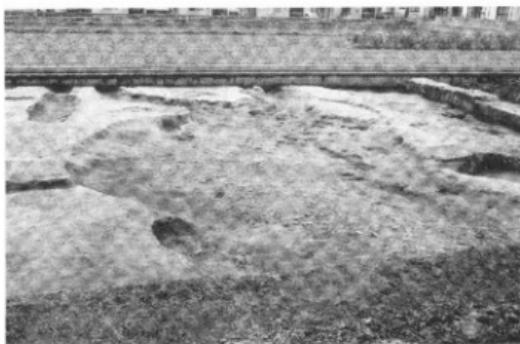
11-16 旧河川出土遺物

0 10 20cm

図20-4 遺物実測図



図版20-2 旧河川（北より）



図版20-3 旧河川（東より）



図版20-4 SD-3溝状遺構（南西より）

21. 檜味立添遺跡

1. 所在地 松山市檜味2丁目58

2. 絶対位置 東経132°47'40"

北緯33°50'43"

3. 調査年月日 1988年6月22日～同年10月15日

4. 調査面積 1,691m²



図21-1 檜味立添遺跡位置図

本調査は、檜味遺物包含地内における宅地開発に伴う事前調査である。

立地・遺跡周辺の歴史的環境 本調査区は、檜味四反地遺跡の北260mで標高42.65m前後に位置する。詳細は檜味四反地遺跡（P49）を参照。

調査の概要 本調査区は、字名より檜味立添遺跡とする。基本層序は（図21-2）、第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層水田床上で地表下20～40cmまで開発が行われている。第Ⅲ層は遺物包含層であり暗茶褐色シルトが10～60cm堆積している。第Ⅳ層黄褐色～褐色シルトは地山と呼んでいるものである。第Ⅴ層砂礫層は石手川上流域の変成岩を含んでいる。検出遺構は、弥生時代後期～古墳・奈良時代の竪穴式住居址13棟、掘立柱建造物10数棟、土壙15基、ピット302基（掘立柱建造物柱穴を含む）その他である。出土遺物は、弥生土器（中期後半・後期後半～末）、土師器・須恵器・石器（石窓T2点他）、勾玉1点、貨幣1点等がある。注目されるのは、包含層中の出土であるが『貨泉』の完形品1点を検出したことである（巻頭図版23-2）。調査出土例としては中・四国初のものである。

小結 本調査では、当地を含む石手川上中流域の低位段丘上では、弥生中期後半～古墳時代を通して集落が営まれていたことが明らかとなった。詳細は、現在整理中にて本報告書にて行うこととする。

なお、本調査にあたり地主浅川主水、鹿島商会の各氏には多大な協力・援助をうけたことを記して深く感謝する次第である。

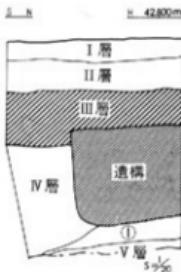


図21-2 土層図

- I層 表土
- 耕作土
- II層 (赤～黄) 褐色シルト
- 床土
- III層 暗茶褐色シルト（上部砂混入）
- IV層 黄褐色シルト～褐色シルト
一部破混じり
- V層 砂レキ層
- ① 黄褐色砂

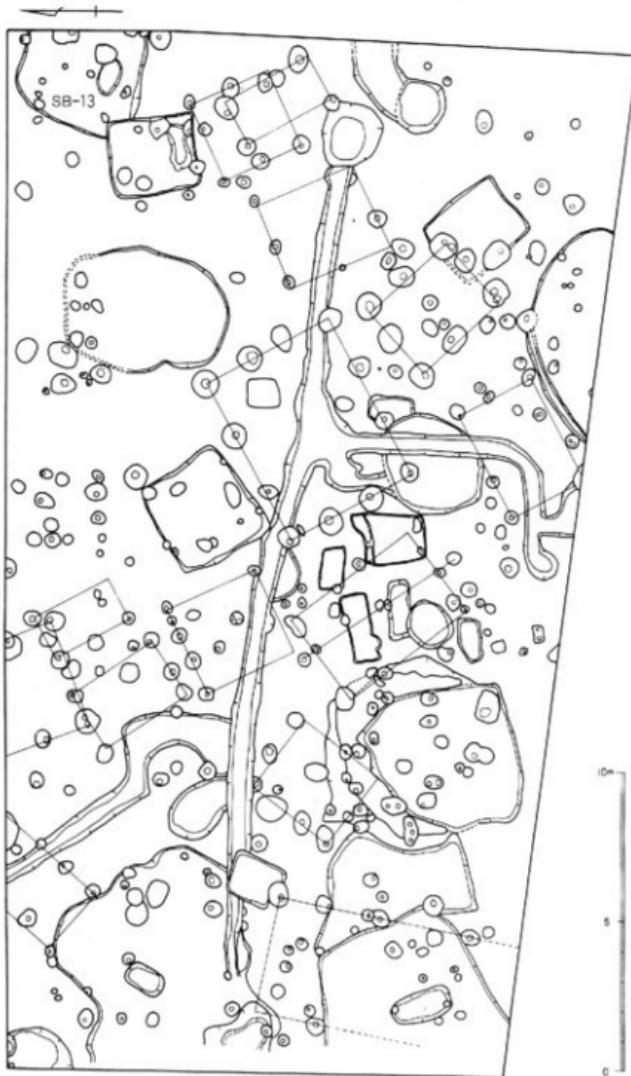


図21-3 遺構配置図

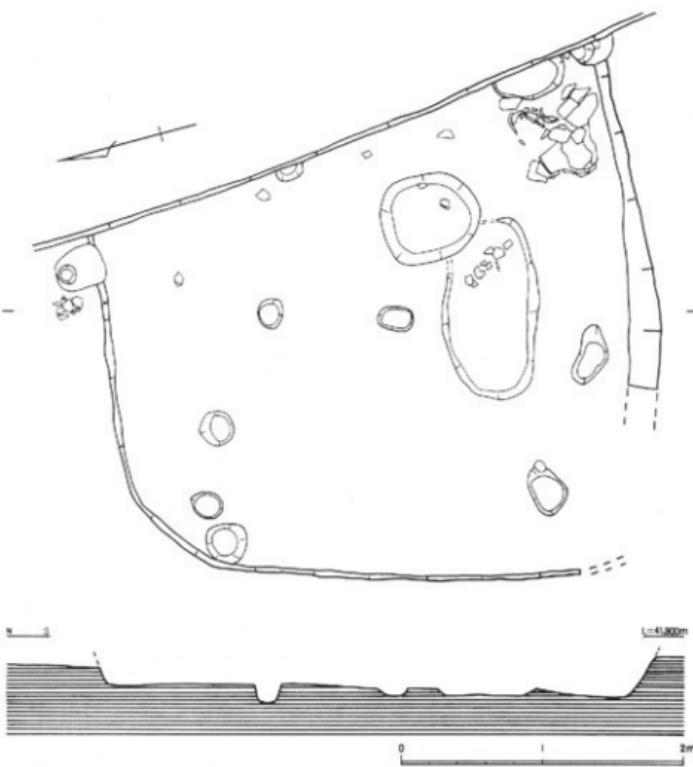


図21-4 SB-13住居址平・断面図

SB-13号住居址(図21-4) 本住居址は、調査区北東隅にて検出された。東壁は調査区外であり、南西隅はSB-1号住居址により切られている。平面形は隅丸方形になるものと考えられ南北は3.9mである。壁高は32cmを測る。主柱穴は3個を確認しており、柱穴間は2.6m~2.9mを測る。炉址は南側の主柱穴間にあり長楕円形プラン(68cm×132cm、深さ40cm)である。炉址内には焼土及び炭を確認している。遺物は、炉址周辺で集中して出土している(図21-5)。出土土器より当住居址は弥生時代後期末~古墳時代初頭に位置づけられるものである。埋土は、茶褐色シルトである。

(梅木)

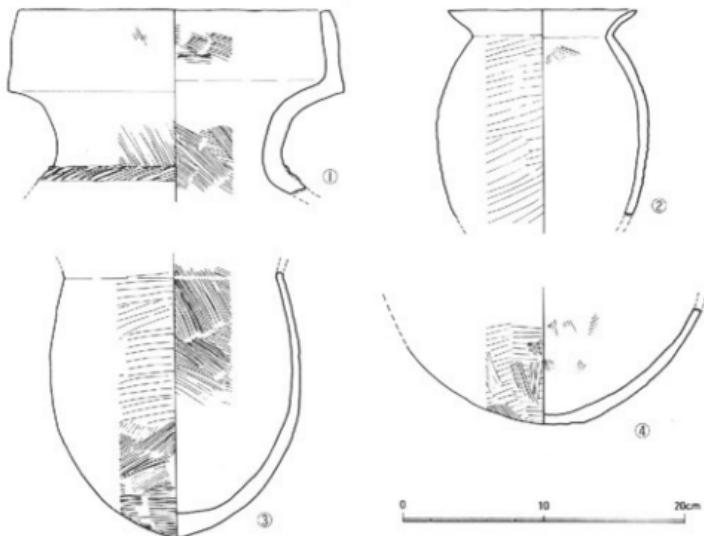
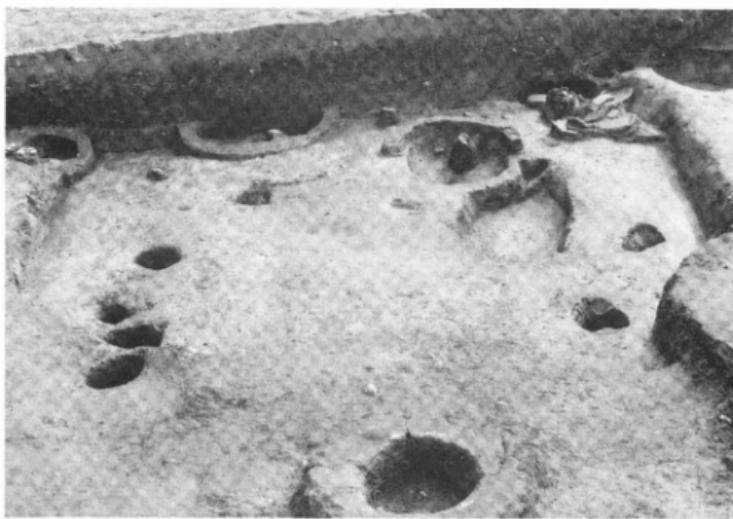


図21-5 遺物実測図 (SB-13住居址)



図版21-1 SB-13住居址 (西より)

22. 榛味高木遺跡

1. 所在地 松山市榛味4丁目 266 - 1
2. 絶対位置 東経132°47'35" 北緯33°50'26"
3. 調査年月日 1989年1月4日～同年2月27日
4. 調査面積 430.23m²



図22-1 榛味高木遺跡位置図

本調査は、榛味遺物包含地内における宅地建設に伴う事前調査である。

立地・周辺の歴史的環境 本調査区は、榛味四反地遺跡の北西70m、榛味立派遺跡の南西200mで標高40.50mに位置する。他、詳細は榛味四反地遺跡（P49）を参照。

調査の概要 本調査区は、字名より榛味高木遺跡とする。基本層序は（図22-2）、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層水田床土で地表下約30cmまで開発が行われている。第Ⅲ層は遺物包含層であり濃黒褐色シルトが50～60cm堆積している。第Ⅳ層黄褐色土は地山と呼んでいるものである。第Ⅴ層砂礫層は拳大の凹縫を含んでいる。検出遺構は、弥生時代中期～古墳時代後期までの住居址7棟、掘立柱建造物数棟、溝状遺構4基、土壙6基、ピット270基（住居址・掘立柱建造物穴を含む）である。遺物は、第Ⅲ層及び遺構内からの出土であり弥生土器（中期中葉・後葉・後期後半）、土師器（古墳時代前期他）、須恵器、石器（石庖丁2点、石鎌1点他）、植物種子1点、動物骨（小骨2点）他である。注目されるのはS B-5号住居址である。（図版22-3、4）東壁を欠くが1辺4.5mの方形プランを確認した。北壁側床面には完形の小型丸底壺を含む古墳時代前期の土師器が10数個体分出土している。一括遺物として取り扱いのできるものである。

小結 本調査では、古墳時代前期の一括遺物資料が得られた。これは、伊台惣部遺跡出土遺物とあわせ、松山平野の古墳時代前期における土器編年の好資料となるものである。

なお、本調査にあたり地主森義三郎、鹿島商会の各氏には多大な協力・援助をうけたことを記して深く感謝する次第である。
(梅木)

第Ⅰ層	20cm
第Ⅱ層	10-15cm
第Ⅲ層	50-60cm
第Ⅳ-①層	20-30cm
第Ⅳ-②層	10-20cm
第Ⅳ-③層	20-30cm
	10cm
	10+cm
第Ⅴ層	

図22-2 土層模式図

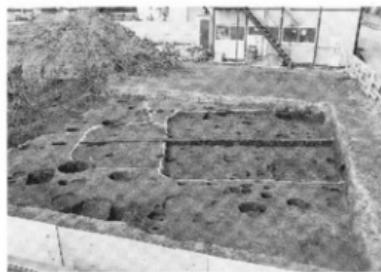
第Ⅰ層	表土
第Ⅱ層	水田床土
第Ⅲ層	黒褐色シルト 遺物包含層
第Ⅳ層-①	明褐色粘土
-②	褐色シルト 粘性強し
-③	淡褐色シルト 微砂多し
第Ⅴ層	粗砂+礫 (10cm大凹縫)



図22-3 遺構配置図



図版22-1 調査区西半遺構配置図（南より）



図版22-2 調査区東半遺構配置図（南より）



図版22-3 SB-5住居址（南より）



図版22-4 SB-5住居址遺物（南より）

23. 桑原田中遺跡

1. 所在地 松山市桑原6丁目499-1

1. 絶対位置 東経 $132^{\circ}47'34''$
北緯 $33^{\circ}49'39''$

3. 調査年月日 昭和63年9月19日～11月
12日

4. 調査面積 1,252m²



図23-1 桑原田中遺跡位置図

桑原田中遺跡は、石手川右岸の東野から南に続し低段丘上に立地する。丁度市中心部の松山城より南東1800mに位置する。北側丘陵上には、畠寺竹ヶ谷古墳群、東野お茶屋台古墳群、南東1000mには前方後円墳の経石山古墳が所在しており、近年樽味遺跡（愛媛農学部内）や、樽味立添、樽味四反地、樽味高木遺跡（本年報収録）等発掘調査が多くなった地域である。

今回宅地造成に伴い事前調査を行った。当調査からは、全面から黒色シルトの遺物包含層（約40cm平均）が堆積し弥生時代後期～白鳳期の遺物が混在していた。

又、当調査区は、周辺と較べてやや低地であり、明確な建物遺構はなく、小河川及び溝状遺構が全面から検出した。又、弥生時代後期後半の土器溜り遺構が1基検出した。この土器溜りからは、多量の壺・甕・高杯が出土しており、当刻期の土器編年作成の好資料と成りえるものと思われる。

調査区中央部に流れる河川状遺構の基底面からは、計27基のピットを検出しており、何らかの施設と考えられ検討を加えたいと思う。

調査区からは、小量であるが縄文時代後期後半の粗製の深鉢の破片が出土している。この事により、当調査区が東側丘陵上に縄文期の遺構、遺物の検出が期待でき、これから調査に期待したい。
(池田・松村・宮崎)



図版23-1 土器漏り遺構



図23-2 造構配置図

24. 筋違D遺跡

1. 所在地 松山市星岡町621-1

2. 絶対位置 東経132°47'23"

北緯33°49'04"

3. 調査年月日 昭和62年5月6日~5月

12日

4. 調査面積 70m²



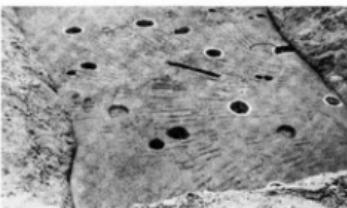
図24-1 筋違D遺跡位置図

昭和60年に当教委によって発掘調査がなされた筋違C遺跡の西南約30m、国道11号バイパスを間に向かいあわせの位置になる。C遺跡の調査では弥生末と5世紀末の住居址、それぞれ2棟づつ、また、7世紀以降の掘立柱建物、12~13世紀の掘立柱建物を各1棟検出している。

今回の調査は、店舗新築に伴う緊急発掘調査である。海拔27.5mの扇状地上に位置し、土層は現地表下1mまでは造成土、以下15cmが水田耕土、その直下の黄色粘土層が造構面となる。包含層は遺存しておらず、水田耕土に混入した状況で、弥生、土師器、須恵器の細片が少量採集された。

検出された造構は、掘立柱建物2棟である。両者ともに束柱を伴っており、床張りを持つ建物である。SB-1は調査区南西部で検出された。梁行2間、桁行2間分を検出している。梁行の柱間2m、桁行の柱間1.8mを測る南北棟で、磁北にはほぼ等しい主軸方位をとる。南邊の中間の柱穴は規模が小さく束柱と推定され、桁行は南へ延びるものと思われる。

SB-2は調査区北西部で検出された。1×2間の南東コーナー部を検出したのみで、プランの全容は明らかでない。南北の柱間2.2m、東西2mを測る。軸線は磁北よりもわずかに東に偏している。両建物とともに柱痕跡を確認しており、その柱穴埋土からは弥生前期の甕片をはじめとして、弥生土器、土師器、須恵器の細片を出土している。削平以前には、おそらく弥生前期から古墳時代に至るまでの複合遺跡としての状況を呈していたものと思われる。柱穴出土の遺物のなかでも最も新しいものは6世紀代に比定されると思われる須恵杯身小片であり、2棟の建物はこの時期を上限とする建物と考えられる。
(栗田)



図版24-1 遺跡近景

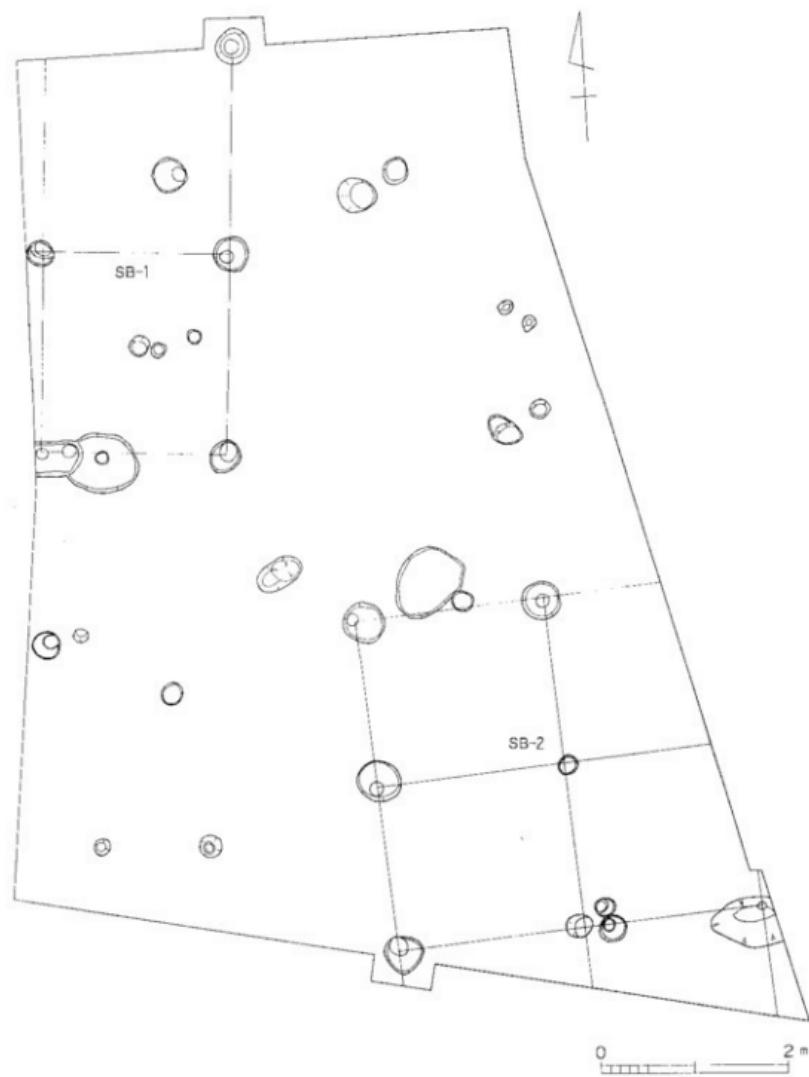


図24-2 遺構配置図

25. 筋違E遺跡

1. 所在地 松山市福音寺 448-1

2. 絶対位置 東経 $132^{\circ}47'24''$

北緯 $33^{\circ}49'10''$

3. 調査年月日 昭和63年2月5日～4月
4日

4. 調査面積 1,234m²



図25-1 筋違E遺跡位置図

筋違E遺跡が所在する福音寺地区は、本年報収録の筋違D～F遺跡を初め国道11号バイパスの筋違A～C遺跡など遺跡の多い地域である。この福音寺地区は、松山平野東側丘陵部畠寺、東野から続く微高地土標高28mに立地し、現状で西南の11号バイパスから西南がやや落ち際になった立地状況を示している。

検出遺構としては、竪穴住居址6棟、掘立柱建物跡7棟、土壙10基、溝1条、ピット198基、性格不明1基であった。この内竪穴住居址は、いずれも不整の楕円形状を呈しており、規模は小さめであった。出土遺物から5世紀末～6世紀初頭に位置づけられる。又、今回検出の掘立柱建物跡は、竪穴住居址よりも後出する時期で、当調査区内出土の遺物から7世紀～8世紀初頭段階の範囲に納まると考えられ、軸線の違いや柱穴が近づいている等から構築時期の差があると思われる。

掘立柱建物のうち特筆すべきは、規模が大きい掘立柱建物跡（SB-7・SB-12・SB-13）を検出している事である。SB-7は、径60～70cmの円形柱穴でやや東西が長い3間×3間の建物である（東西7m×南北6m）。SB-12は、調査範囲の為、東西3間分10m・南北1間（285m）分の検出である。柱穴は円形もしくは楕円形で径90cm前後・深さ60cmを測る。SB-13もSB-12と同様で建物跡の北側を検出していないが、東西5間（12.2m）×南北3間（7.4m）で、柱穴は、75cm～110cmのやや不整な楕円形を呈している。これらの3棟の掘立柱の建物跡は、規模が大きい事、柱穴の掘り方等が大きい事から、豪族色の強い権力者の居宅跡の可能性を示していると思われ、当該地域における台地上の占地や利用状況を解明する一資料を提供すると考えられ、周辺調査地との有機的な比較検討を行っていきたいと考えている。

又、性格不明造構として調査区中央やや北西寄りから、長軸8.85mの範囲で布掘り状造構を検出した。これは、布掘りを13基伴い、各布掘りは、長軸1.5m短軸0.4～0.8mを測るもので、利用等これから検討が必要な遺構と考えられる。

（池田・宮崎）

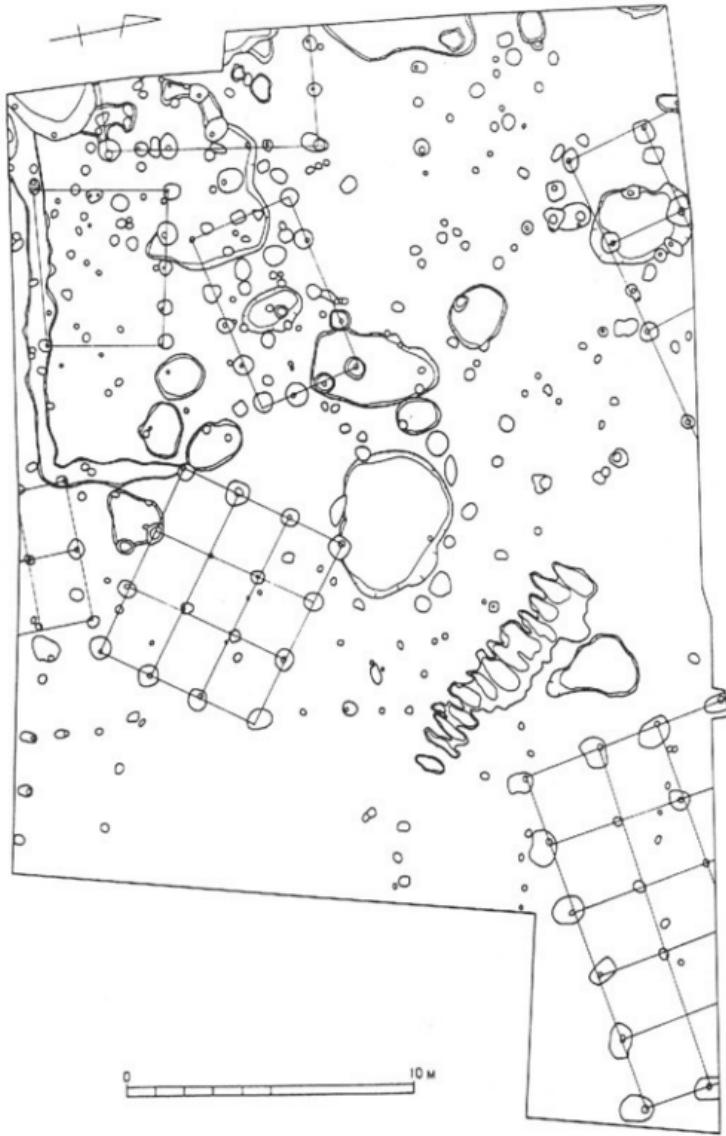


図25-2 造構配置図

26. 筋違F遺跡

1. 所在地 松山市福音寺 426、427
- 4

2. 絶対位置 東経132°47'26"
北緯33°49'11"

3. 調査年月日 昭和63年9月6日～12月
27日

4. 調査面積 1,500m²



図26-1 筋違F遺跡位置図

本遺跡は、松山城の南東2.8km伊予鉄福音寺駅北側地に位置し、東方の東野、畠寺地域から舌状に延び出した微高地（標高28.5m）に立地する。

筋違地区の遺跡としてはこれまで、昭和49年に国道バイパス建設により発掘した福音寺筋違B遺跡が南方200mにあり、これより、本遺跡間まで筋違C、E地区遺跡の発掘を行い同時段階の遺跡の広がりを確認している。

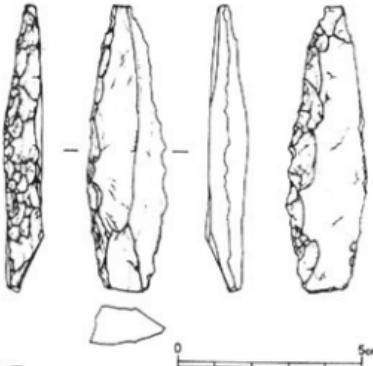
検出遺構は、円形竪穴住居址1基、長方形竪穴住居址1基、方形竪穴住居址5基、不整形竪穴住居址2基、土壙9基、掘立柱建物4棟、埠状遺構1条などで、このうち特筆すべき遺構にSB-5円形住居址（径7m）は、2カ所の入口（幅2.1～2.3m）を持つが、共存か作り替えか不明である、柱組は6本柱（柱間1.7～2.3m）をなし、中央南寄り部に長方形（幅1m長さ1.6m）の炉址がある。

出土物としては、弥生後期中葉段階の壺、甕を中心に高杯、鉢、器台など一括投棄された状態で多量の土器が出土した。一集落単位での相当量の投棄が考えられると共に、性格的にも中村松田遺跡SB-4（本年報P45）と合わせて同様の様相があり、今後の整理課題である。

その他同時期のものとしては、本調査地北西部検出のSB-7長方形住居址がある。ほかに古墳期の方形竪穴住居址があり、竹ノ下遺跡段階から筋違地区遺跡全体にかけて広がっている時期の遺構でSB-1、3、10からは、土師器と共にTK47、MT15段階の須恵器が出士した。

この遺構を切ったSB-4掘立柱建物は、南北3間（総長4.35m）、東西3間（総長5.25m）規模のもので、MT15以降の古墳期段階の遺構として考えられる。

(西尾・池田)



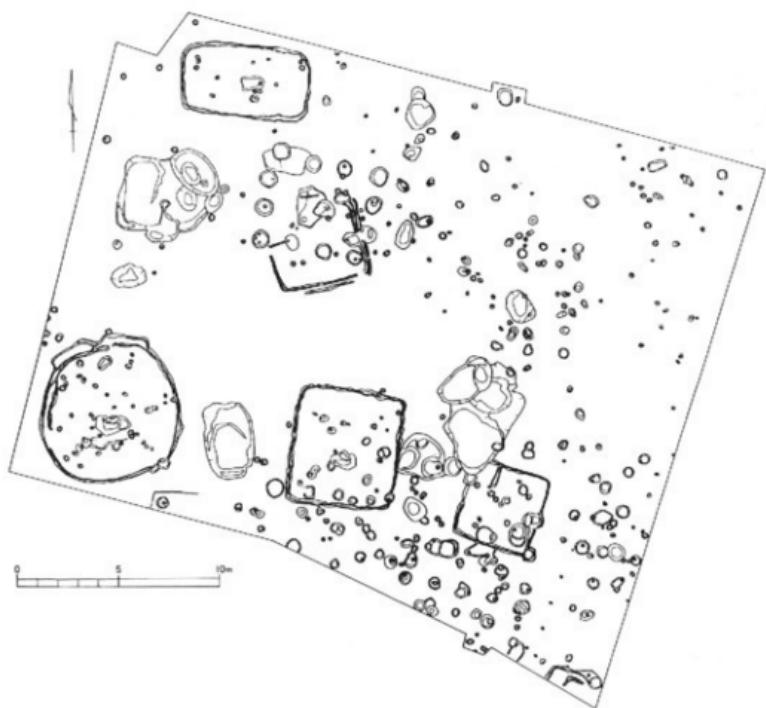


図26-2 遺構配置図

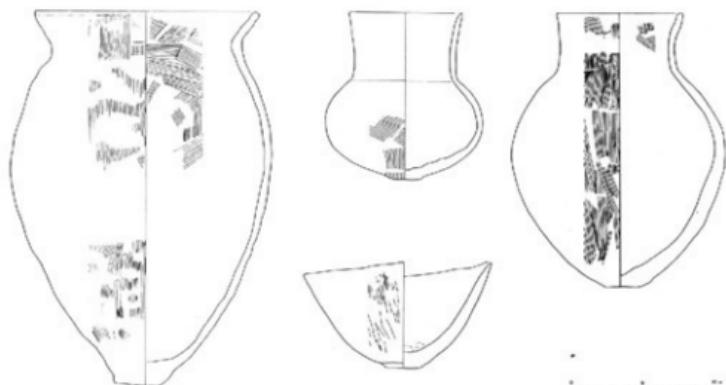


図26-3 遺物実測図

27. 福音寺川付遺跡

1. 所在地 松山市福音寺 567-11

2. 絶対位置 東経132°47'15"

北緯33°49'06"

3. 調査年月日 昭和63年11月14日～12月
26日

4. 調査面積 495m²



図27-1 福音寺川付遺跡位置図

本遺跡は、松山平野の中央南部に独立する天山丘陵の南東に所在し、天山丘陵から南東へ延びる微高地の南側緩斜面に位置している。

当地域は、松山平野の中でも、比較的弥生期から古墳期にかけて良好な生活址が点在しており釜ノ口遺跡をはじめとして、天山丘陵を中心とした弥生期の集落構造を理解する上で重要な地域と言いうことが出来る。

本調査においては、調査面積の北側約半分程、すでに近世の耕作等により削平され、また小規模な宅地開発に伴う緊急調査であった事ともあわせて、散発的な遺構の検出にとどまった。しかしながら、弥生期を主体として古墳期の遺構・遺物、近世の桶棺墓1基が検出されており、遺構の広がり等は確認できなかったものの長期に渡る当調査地に刻まれた地誌を読み取ることが出来る。

弥生期の所産として、壺棺墓1基が確認されており、松山平野における類例としては、土壇原北遺跡、石井東遺跡がある。現在の所、壺棺墓については、その葬制等未解明な点が多く、墓域内における構造的理解はされていないものの土壇原北遺跡同様に他の埋葬施設と組み合わされた形で墓域を形成するものと想定される。また、壺棺墓の蓋として転用された高杯は、型式編年の上で、第Ⅴ様式第2型式時期の所産と考えられ、土壇原北遺跡にその類例を見る事が出来る。

(松村・重松)

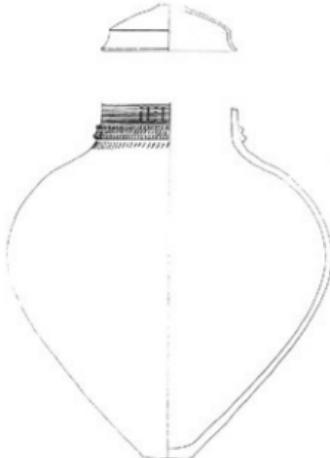


図27-2 壺棺

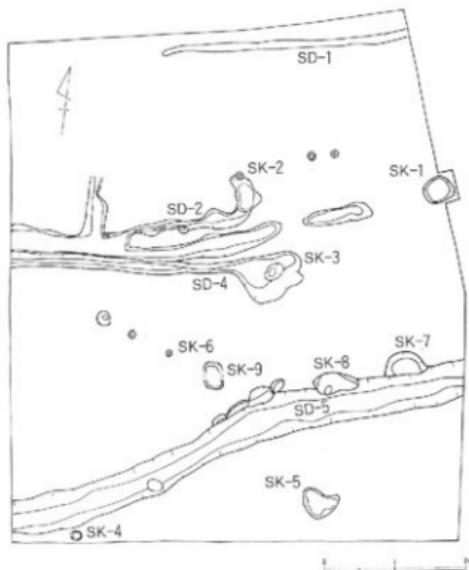


図27-2 遺跡配置図

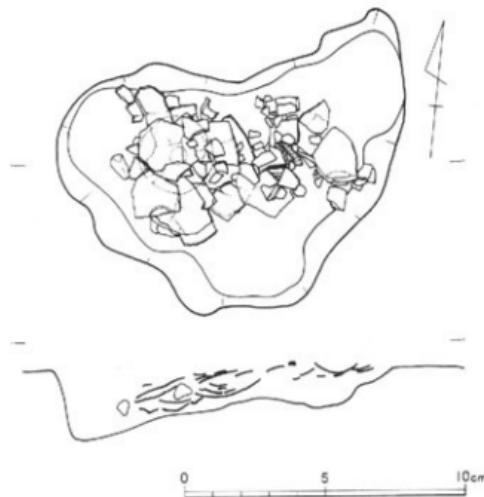


図27-3 SK-5平・断面図

28. 浄蓮寺 II 遺跡

1. 所在地 松山市北久米町 705-1
他

2. 絶対位置 東経132°47'44"
北緯 33°48'06"

3. 調査年月日 昭和63年3月2日～5月
31日

4. 調査面積 2,110m²

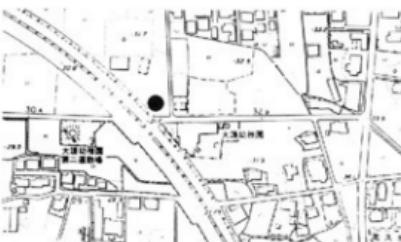


図28-1 浄蓮寺II遺跡位置図

本遺跡は、国道11号バイパス添い、星ヶ岡丘陵より東へ300m、北久米遺跡群の南東、浄蓮寺I遺跡より北西へ100mに位置する。丁度、来住台地から福音寺にかけての低丘陵上に立地する。

調査区内の廃土の関係で、3区に分区し、それぞれA、B、C区と名称を付けた。

造構として、竪穴住居址4棟、掘立柱建物跡5棟、土壙19基、溝状造構9条、他に性格不明造構、ピットを検出した。

このうち、竪穴住居址（SB-6）は、一辺4mの方形住居址で北西壁に幅約2mの張り出し部を持つ。

掘立柱建物跡では、南北棟として、SB-5（2間×3間）、東西棟としてSB-3（3間×3間）、SB-4（2間×3間）、SB-8（2間×4間）、SB-9（2間×3間）、検出した。また、掘立柱建物跡の軸線は、バラツキがある。

出土遺物は、古墳期の土師器、須恵器が主体となって出土しているが、出土量は少なかつた。SB-1からは、6世紀後半の須恵器（环身、杯蓋、高杯、壺）と、土師器（壺、瓶、高杯）が共伴しており、当平野の土師器編年の良好な資料である。また、少量であるが、SB-2、SB-6から弥生土器の胴部の破片が出土しているが、時期決定までは至らない。

同一台地の近隣する浄蓮寺I遺跡においても、当遺跡に類似する掘立柱建物跡も検出している。この事から、当該地域上にやや広範囲な掘立柱群の存在が想定される。それも、やや雑な柱穴の掘り方で小ぶりな建物である事、規画的な配置でなく、重複性があまりない事から、古墳期における倉庫群の様相が推定でき、小規模集団に付随するものと思われ、当時の水田經營地を当遺跡の西側の低地に、住居空間を東側の微高地に求められると考えている。この東は、古地先端部近くに小規模な掘立柱建物跡が多い事及び出土遺物等からもうかがえると考えられる。

(池田・宮崎)

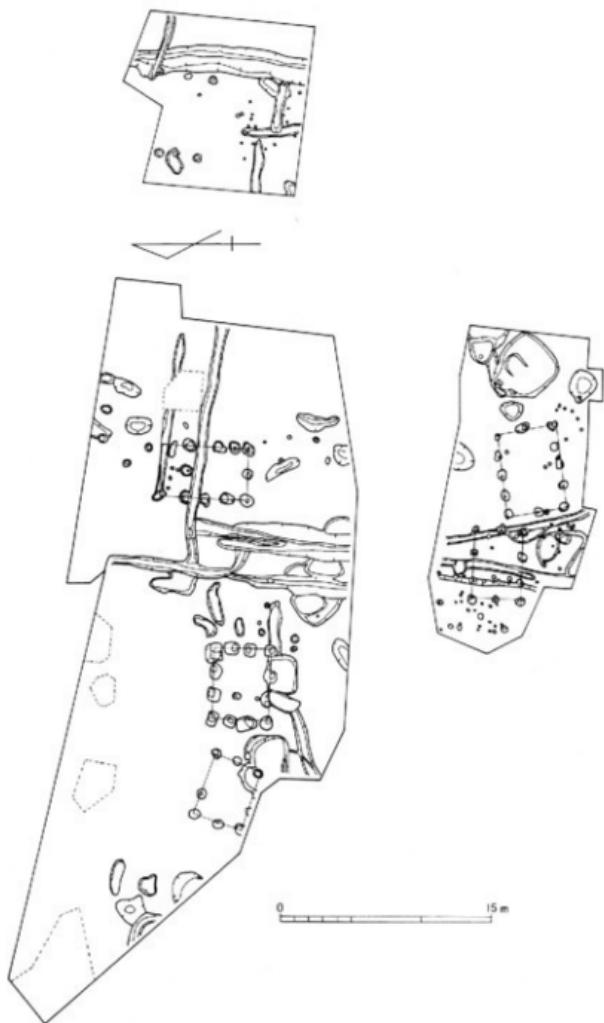


図28-2 造構配置図

29. 北久米常壙遺跡

1. 所在地 松山市北久米町726-3、
726-1

2. 絶対位置 東経132°47'41"
北緯 33°48'57"

3. 調査年月日 昭和63年10月3日～10月
29日

4. 調査面積 100m²



図29-1 北久米常壙遺跡位置図

北久米常壙遺跡は、国道11号バイパスに隣接している低丘陵上に立地している。この北久米地区には、北久米遺跡・浄連寺I・II遺跡。北に隣接する福音寺地区には、竹ノ下遺跡、川付I・II遺跡、筋違A～F遺跡など、遺跡の密度が高い地区である。

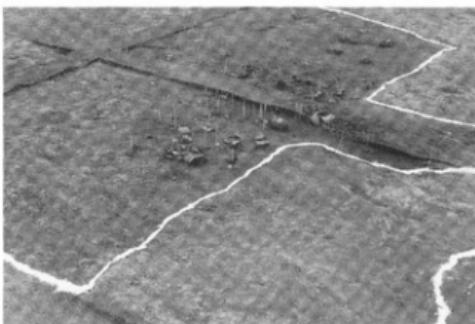
今回、店舗建設に伴い緊急調査を行った。調査区内は、耕作時の削平が全面あり、遺物包含層が残っておらず、耕作土を撤去すると遺構検出面のみであった。

検出した遺構として、方形住居址(SB-1)1棟、掘立柱建物跡(SB-2)1棟、溝3条、土塁2基、ピット27基を検出した。このうちSB-1な、北壁5.5m、東・西壁5.4m、南壁4.8mの方形プランで、削平の関係で壁の残存が少なく3～4cmを残すのみであった。又、幅10～30cm・深さ約5cmの壁溝を南壁及び本壁北側の一部以外で検出した。主柱穴は4本で径25～30cm、深さ20～40cmを測る。

住居内間仕切りか、入口部施設かは定かでないが、西壁に直交する幅10～20cm、長さ約1mの溝を2条、南壁中央に長軸1.4m、短軸0.6mの貯蔵穴を1基検出した。

住居址内出土遺物は、中央より南側の貯蔵穴周辺の床面直上から、須恵器として口縁部中央に13条の波状文を持つ壺の口縁部1点。土師器、器高25cm、胴径22cmの直口の丸底壺。高杯5点が一括で出土しており、古墳時代の土師器編年の良好な資料となると考えている。

(宮崎)



図版29-1 SB-1

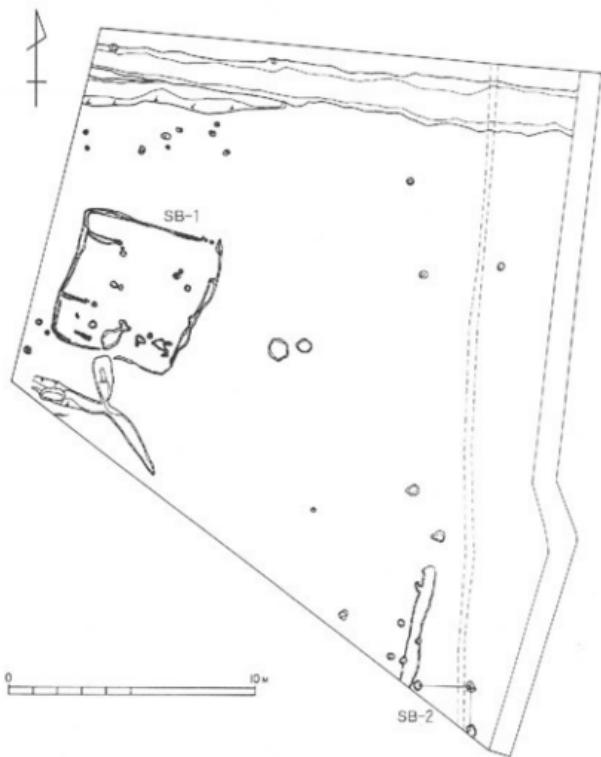
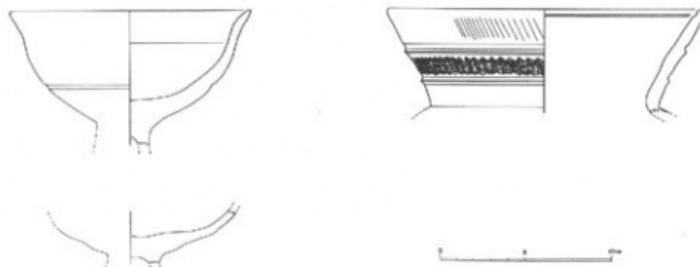


図29-2 遺構配置図



図版29-3 遺物実測図 (SB-1出土)

30. 来住廃寺跡寺域調査



図30-1 来住廃寺と官衙関係遺跡

来住廃寺跡は松山平野東部、来住舌状台地の西端近く（海拔38～39m）に立地する。近年この地域は、都市計画での市街化区域の調整も相まって、緊急調査が激増してきた。その成果として、本遺跡の西北方250mにおいて脇殿風の長大な掘立柱建物や館的な掘立柱建物群を検出した久米高畠遺跡（「松山市埋蔵文化財調査年報1986」参照）や西方400m地で出土した、「久米評」線刻須恵器（本年報P97参照）などがある。これらの成果によって来住廃寺跡を含め来住台地一帯は古代久米郡（評）の政治的中枢地域として大きく注目されている。以上の状況を踏まえ、松山市教育委員会は、文化庁（河原純之主任調査官、佐久間豊調査官）奈良国立文化財研究所（上原真人主任研究官）の指導を得て、昭和62年度（1987）から来住廃寺跡調査を計画的に実施することになった。調査に先立ち、来住台地の地区割（来住6AKA～来住6AKB地区の方眼区画設定・本年報第40-1図参照）を行った。

I. これまでの調査

来住廃寺跡に関しては、1967～78年にかけて3回の発掘調査を行い、講堂とそれに付随する石組雨落溝、塔、僧房、回廊などを確認し、法隆寺式の伽藍配置が想定されている。出土遺物には、山田寺系の素弁十弁蓮華文軒丸瓦や法隆寺系の複弁八弁蓮華文軒丸瓦、また二形態の鷲尾や各種の軒丸、軒平瓦、丸瓦、平瓦などがあり、7世紀後半代に造営され、平安時代まで存続した寺院として位置づけられた。この発掘調査に基づいて、来住廃寺跡は1978年に国指定史跡となった。

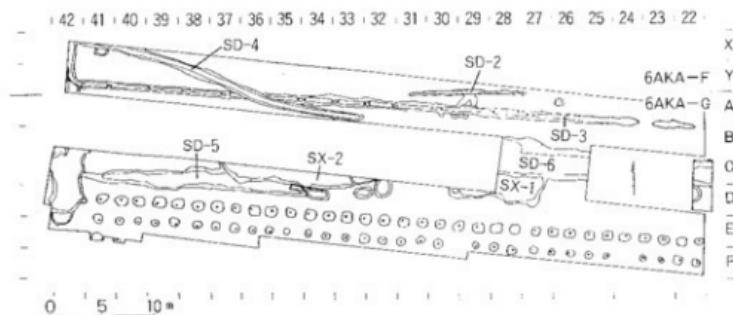


図30-2 北面回廊検出遺構図(6AKA-GA22~GF41地区)

II. 昭和62年度(1987年9月~3月)の寺域調査(6AKA-GA22~GF41)

調査地は来住庵寺講堂の西北方90mにある水田地で、東西63m、南北5mのトレンチを平行して南北2本設定した。

基本層序は、調査地西端では耕作土から黄褐色の地山面まで7層の堆積土層が見られる。これに対し、東端では耕作土直下が地山となり、東部へ行く程に大きく削平を受けていた。

(1) 検出遺構

地山面において、掘立柱による東西方向の回廊状遺構32間分(総長58m)を検出した。柱間は桁行方向1.8m等間、梁行方向1.955mで西端部で南へ折れ曲がり、東端部はさらに東へ延びる。柱掘形は北側柱列が東西方向の長方形(1m×0.7m前後)状をなし、南側柱列は直径70cm前後の円形を呈する。

同廊状遺構の北側では、溝状遺構(SD-3~6)や不整形の掘込遺構(SX-1)を検出した。このうちSD-3・5・6及びSX-1は、回廊状遺構にはほぼ平行しており、SX-1及びSD-6とは同じ埋土が認められた。

(2) 出土遺物

SX-1及びSD-6から7世紀中葉段階の広口壺、杯蓋、鉢、円面碗などの須恵器類、素弁十弁蓮華文軒丸瓦、これに組み合う重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦などが出土した。またSD-3を切ったSD-4からは、来住庵寺の補修期段階と見られる複弁四弁蓮華文軒丸瓦が出土した。

III. 昭和63年度(1988年11月~1989年2月)の寺域調査

昭和63年度には、来住庵寺塔跡の西方5ヶ所にまたがる調査地を設定した。昭和62年度(1987)に検出した北面回廊状遺構に接続する西面回廊状遺構の南延長及び南面回廊状遺構の位置確認をすること、そして昭和52年度(1977)に調査した東面回廊状遺構(当時は来住庵寺の西面回廊として報告)との接続状況を明らかにすることを目的とし、併せて来住庵寺寺域との関係を明確にすることなどが望まれた。

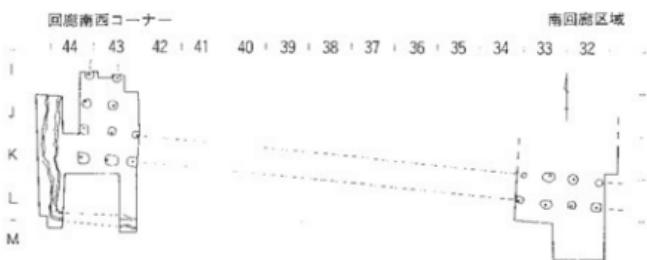


図30-3 南西隅区域及び南面回廊検出遺構図
(6AKA-H地区)

(1) 南東隅区域の回廊状遺構 (6AKA-H 009~H M13)

来住庵寺塔跡の西方14mにある当該地区は、昭和52年(1977)から同53年(1978)にかけて発見した東西回廊状遺構における南北方向の桁行4間分(南北総長7.16m)、梁行1間(1.79m)、南面回廊状遺構における東西方向の桁行7間分(総長10.8m)、梁行1間(1.8m)をそれぞれ確認すると共に、付随の南北溝(S D-7)と東西溝(S D-8)も合わせ検出した。南北溝S D-7の廃絶後にやや西にずれて上層の南北溝S D-9が掘削され、この溝は調査区より南へさらに延びている。出土遺物は東西溝(S D-8)から7世紀中葉段階の高杯2点、下層の南北溝S D-7から重弧文軒平瓦1点が出土し、上層の南北溝S D-9においては、複弁六弁蓮華文軒丸瓦、重圓文軒丸瓦を含め丸瓦、平瓦類が集中出土した。

(2) 南面区域の回廊状遺構 (6AKA-H K32~H L34)

調査地は南面回廊状遺構の推定中央位置から16m西寄りに位置するもので、耕作土直下が黄褐色土の地山となり、かなり削平を受けていた場所である。このため付随の溝もなく、柱掘形の残存状況も浅くなつてたが、東西方向の掘立柱回廊状遺構、桁行4間分(東西総長5.45m)、梁行1間分(1.9m)を検出した。

(3) 南西隅区域の回廊遺構 (6AKA-H I 43~H K44)

同地区の基本層序は上から耕作土・茶褐色土・黒色土・黄褐色土(地山)で地山までの深さ34cmと残りがよい。柱掘形は地山を切り込んで黒色土になる。

南西隅では、南面回廊状遺構において東西方向桁行2間分(総長3.63m)、梁行1間分(1.93m)、西面回廊状遺構において南北桁行3間分(総長5.85m)、梁行1間分(1.91m)、を検出し、これらに付随する南北溝と東西溝とも確認した。

(4) その他の調査区域 (6AKA-H M17・18・20・21~H N17・18・20・21)

前述の調査区域のほか南面回廊状遺構の中間位置2ヶ所の水田調査を行つたが、後述の削平のため、明確な遺構は見られなかった。

表30-1 回廊状遺構の復原

遺構名	全長	桁行柱間	梁行
東面(復原)	98.50	1.79m×55間	1.79m(1間)
西面	97.50	1.95m×50間	1.91m(1間)
南面	103.50	1.815m×57間	1.81m(1間)
北面(復原)	99.60	1.81m×55間	1.99m(1間)

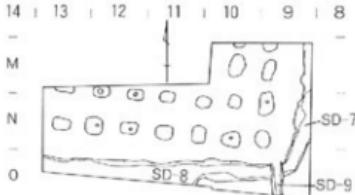


図30-4 南東隅区域の回廊検出遺構図

IV. 検出回廊状遺構について

昭和62年度(1987)12月に奇跡的に発見された北面回廊状遺構(東西総長58m)は、昭和52～53年度(1977～78)の発見の東面回廊状遺構と接続し、昭和63年度(1988)11月以降の調査の結果、それらは来住庵寺の主要堂塔西側(塔址西方14m)地に密接して方1町規模で方形にめぐる掘立柱の回廊(単廊)状遺構になることが明確となった。

回廊状遺構の復原としては別表の数値が得られた。(表-1参照)すなわち、北面回廊状遺構に対して南面回廊状遺構が3.9m長くなり、西面回廊状遺構に対し東面回廊状遺構が1m長くなる不整形方形になる。桁行の柱間は西面回廊状遺構のみが他の面より1間あたり1.95mと数値が大きく、梁行は東面と南面がほぼ共通するが、他の面はそれぞれ食い違いを見せている。柱据形の平面形はいずれの面も外側柱列が桁行方向に長い長方形(1×0.8m前後)をなし、内側柱列がひと回り小さい円形(直径70cm前後)または隅丸方形をなす共通的特徴が見られた。またこれら回廊状遺構の外側にはそれぞれ付随の溝があり、北西方向に排水していた。



図版30-1 南東隅調査区 瓦出土状況

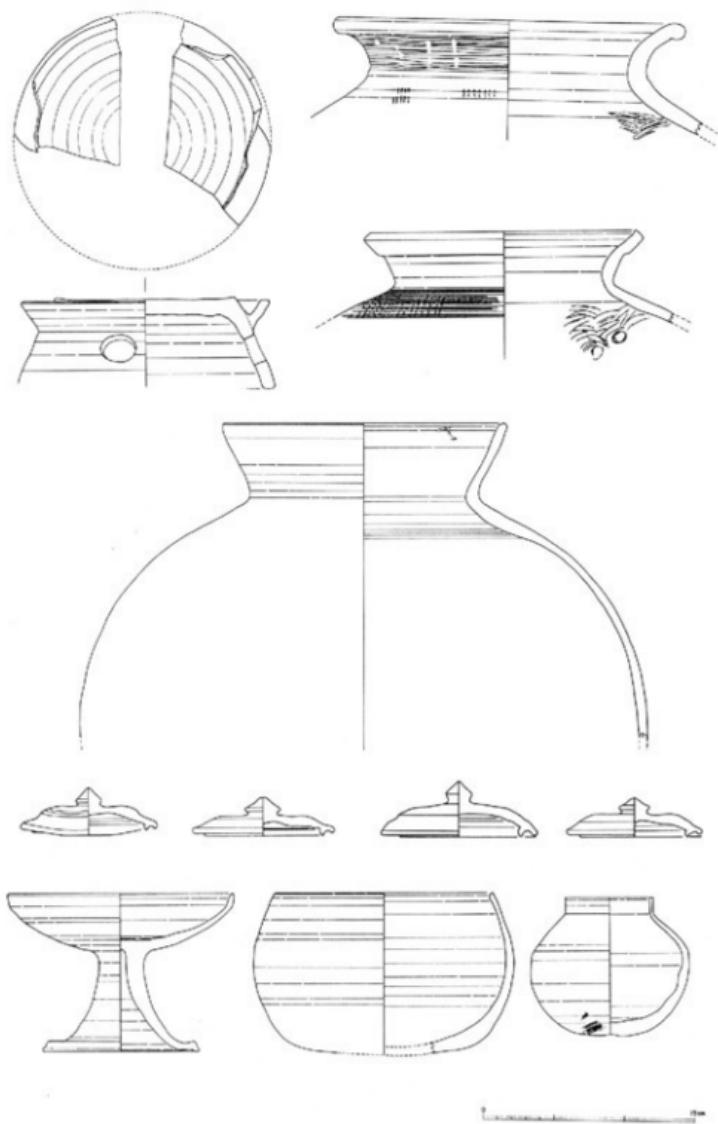


図30-5 出土遺物実測図（北回廊SD-6・SX-1出土須恵器類）

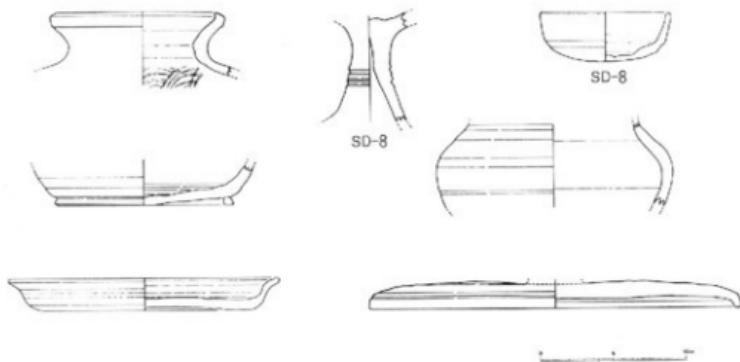


図30-6 遺物実測図（南回廊SD-8外出土）

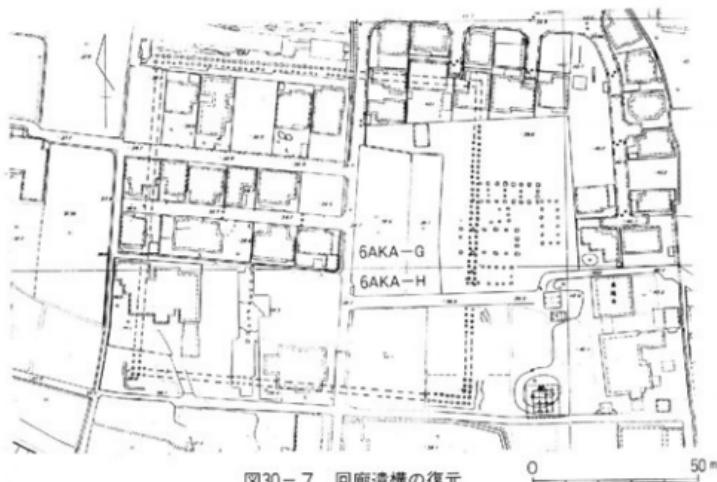


図30-7 回廊遺構の復元

時期的には南面回廊状造構付随の溝から7世紀中葉の須恵器が出土し、東面回廊状造構付随の溝からは来住庵寺創建段階の重弧文軒平瓦が出土した。また北回廊に付随すると考えられるSD-6と埋土を同じくするSX-1からは7世紀中葉を含む第3四半期段階の杯蓋、円面鏡などの須恵器類や素弁十弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦などの瓦類が出土している。しかし依然として、回廊状造構内部の構造や来住庵寺、久米高畠遺跡との関係などは明らかではなく今後解明すべき課題が多い。

(西尾・池田)

31. 久米高畠遺跡（2次調査）

1. 所在地 松山市南久米町 577-13

他

2. 絶対位置 東経 $132^{\circ} 48' 11''$

北緯 $33^{\circ} 48' 37''$

3. 調査年月日 昭和62年6月19日～8月
8日

4. 調査面積 700m²

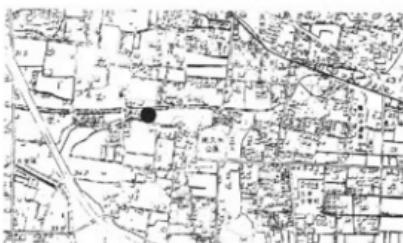


図31-1 久米高畠遺跡2次調査図

久米高畠遺跡2次調査区は、郡衙推定地の久米高畠遺跡1次調査区の北側に位置する。この1次調査区は、米住舌状台地の先端部、2次調査区は段落ち面で堀越川に続く低湿地に立地している。1次調査区の遺構確認面との比高差が2mであった。今回住宅地造成に伴い事前調査を行った。調査に当たり郡衙推定地の北限遺構もしくは、伴う遺物の検出等を考慮し調査を進めた。調査の結果遺物を含む河川址と土壙7基、溝7状。ピット10基。曲物の井戸1基。性格不明遺構1基を検出した。このうち河川は、幅7~?m深さ60cmで東から西へ流れ、西側で2又に分かれて流れている。堆積土は、第1層黒色シルト(微量の砂を含む)、第2層黒色シルトと砂の混合。第3層は、砂礫であった。第1層からは、弥生~中世。
第2層からは、弥生~古墳時代、第3層は、弥生時代の遺物が出上した。曲物の井戸は、曲物径35cm、深さ11cmで掘り方は径44cm、深さ15cmで埋土は白色粗砂であった。中世期と推定される。溝(SD-2)からは須恵器及び土師器が出土し、遺物から7世紀後半段階の溝と考えられる。弥生土器は前期後半、前期末~中期初頭、中期後葉、後期初頭・後期後半が出土している。古墳期では、須恵器(壺・甕・高杯・杯身・杯蓋・瓶・鉢)、土師器(壺・甕・高杯)。中世では黒色土器(A・B)、高台付椀(土師質)、杯、陶器。

石器として、石鎚・石庵丁・石斧・石剣もしくは石戈片。凹石・フレーク・チップ類。木器類では、鍛(ほば)完形)・棒状木器・板状木器・種子類等、他に鉄片が出土。このうち、石剣か石才片は、刃部のみの出土(身幅30cm、残存長3.4cm)で、材質は、黒色片岩であった。

今回の調査により、久米郡衙推定地の北限を示す遺構は検出しなかったが、比高差及び河川址の検出から、2次調査区が段落ち際の河川面で、久米高畠遺跡1次調査区が郡衙推定地北限を示す遺構群に認定できると思われる。

(宮崎)

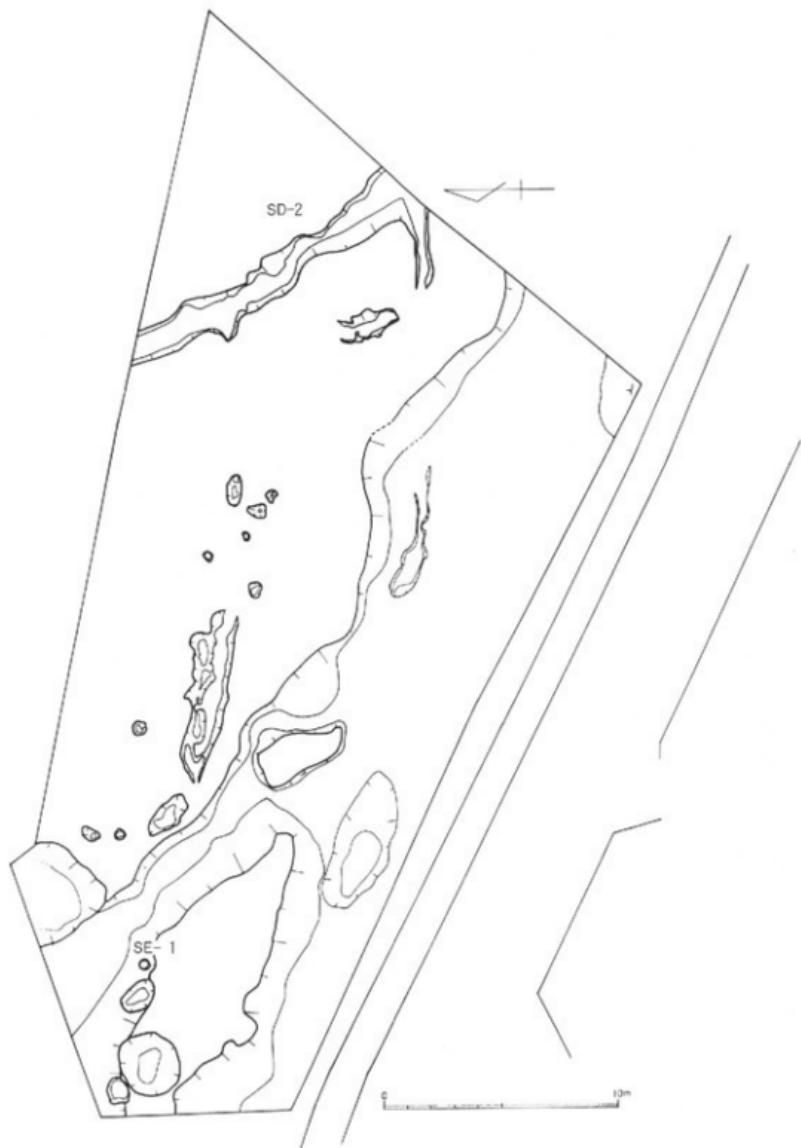


図31-2 遺跡配置図

32. 久米高畠遺跡（3次調査）

1. 所在地 松山市来住町898外2筆

2. 絶対位置 東経132°48'15"

北緯33°48'26"

3. 調査年月日 昭和62年12月10日～

昭和63年2月1日

4. 調査面積 1,000m²

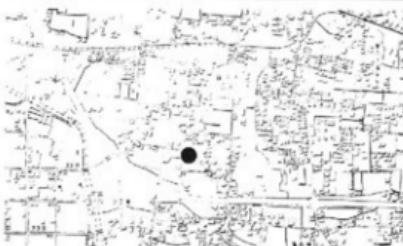


図32-1 久米高畠遺跡3次位置図

当調査区は、来住舌状台地上の久米高畠遺跡第1次調査区より南225m。来住庵寺西回廊より西へ75mに位置する。やや北東より南西に向けてやや微傾斜を持つ立地状況を示している。検出遺構としては、竪穴住居址2棟、土壙22基、ピット41基が上げられる。

竪穴住居址のうちSB-1は長軸5m・短軸2.82mを測る不整の長楕円形プランで、確認面よりの深さは6cmであった。SB-2は、一辺2.9mを測る隅丸方形プランで、確認面よりの深さは10cmであった。両住居址とも出土遺物は少なかったが、7世紀代の時期と考えられる。

土壙のうちSK-13は、長軸1.66m、短軸1.28mの隅丸方形プランで確認面からの深さは18cmであった。このSK-13からは、弥生時代前期後半の壺（体部に刻目がある突帯文を持つ）が出土している。又、当調査区が立地している来住舌状台地上の来住庵寺寺域確認調査区や久米高畠遺跡調査区から、当調査区SK-13とは同時期（弥生時代前期後半）の不整形プランもしくは、隅丸方形プランを呈する土壙を検出している。これら一連の土壙は密集して検出するのではなく、来住台地全体から見ると、単独もしくは、点在して検出している状況である。又、当前期の住居址を来住台地からいまだ検出していない等の事実を踏まえ、来住台上における弥生時代前期後半の遺構分布等から性格を位置づけられるものであり、これからの周辺調査や整理に期待するとともに検討すべきものと考えている。

当調査区検出の土壙をプラン上方形プランと円形プランと2別すると、方形プランが16基円形プラン6基が上げられ、出土遺物が少なく、上記SK-13以外時期決定まで至らなかった。しかしながら、土壙を群としてとらえられると考えられ、調査区南東と西で2群の土壙群としてとらえられると考えている。又、当調査区からは、弥生時代前期後半～白鳳期までの遺物が出土しているが出土量そのものは少なかった。本調査にあたり、若岡丑五郎氏には御援助、御協力をいただきました、ここに記して感謝いたします。 (池田・宮崎)

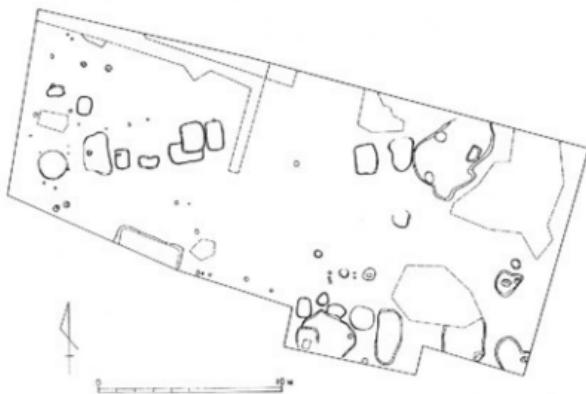


図32-2 遺構配置図

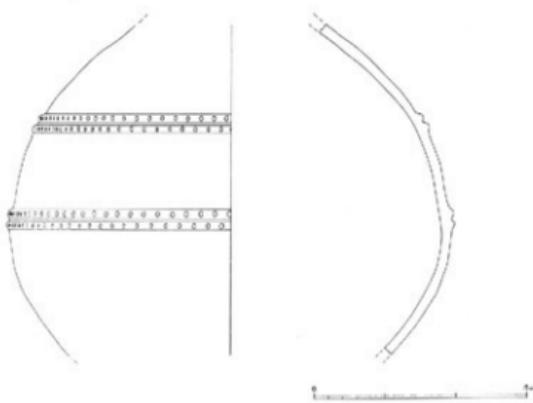


図32-3 遺物実測図



図版32-1 全景



図版32-2 SK-13

33. 久米高畠遺跡（4次調査）

1. 所在地 松山市来住町1149

2. 絶対位置 東経 $132^{\circ}48'06''$
北緯 $33^{\circ}48'29''$

3. 調査年月日 昭和63年7月2日～7月
26日

4. 調査面積 210m²



図33-1 久米高畠遺跡4次位置図

当調査区は、久米高畠遺跡1次調査より南西へ175m。来住庵寺西回廊より西へ170mに位置する来住舌状台地上標高36.7mに立地する。今回個人住宅建設に伴ない事前調査を行った。

調査区北端の落ちは、丘陵の段落ちと考えられる。検出した造構として、溝2条。土塙10基。ピット31基。布掘り状造構1基。このうち調査区を南北に流れる（SD-1）は区画に使われた溝と考えられる。このSD-1からは、7世紀代の須恵器（長頸壺・高杯・瓶）とともに馬具（くつわ）が出土している。

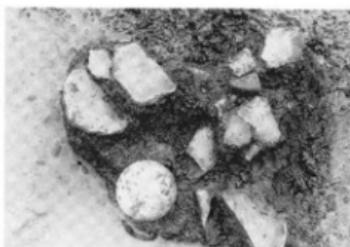
隅丸方形プランを呈する土塙(SK-9)は、長軸2.06m、短軸1.44mを測り、出土遺物としては、弥生前期後半の土器の破片が出土した。調査区北側にSD-1に先行して布掘りを6基持つ布掘り状造構を検出している。これは本年報筋道E遺跡からも検出している。

当調査区からの出土遺物のほとんどは、北側の段落ち及びSD-1からの出土で、弥生時代前期後半～白鳳期で弥生式土器が主体であった。他に鉄器9点、サヌカイト製のフレーク15点が出土した。

(池田・宮崎)



図版33-1 全景



図版33-2 遺物出土状況

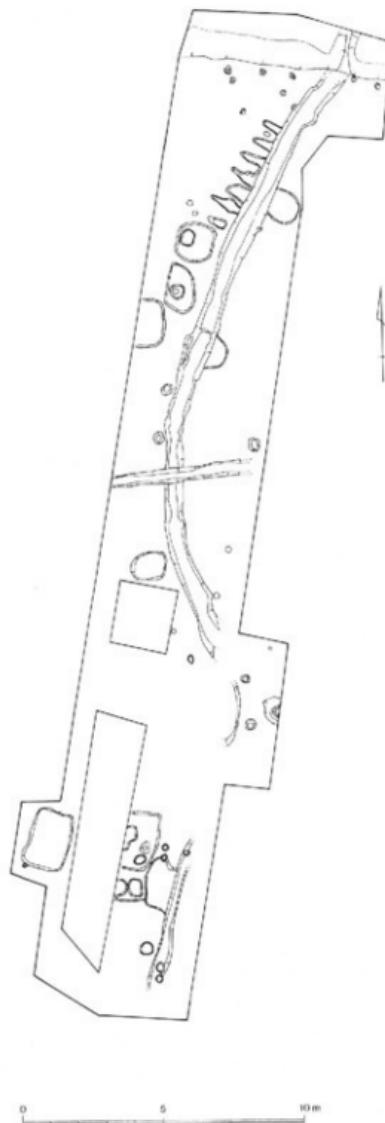


図33-2 造構配置図

34. 久米高畠遺跡(5次)

1. 所在地 松山市南久米町 795 他2筆、来住町1139他2筆
2. 絶対位置 東経132°48'02"、北緯33°48'29"
3. 調査年月日 昭和63年10月26日～12月24日
4. 調査面積 1,707m²



図34-1 久米高畠遺跡5次位置図

本遺跡は、松山市中心部より南東4.5kmに位置し、来住舌状台地上の来住庵寺跡から北西部一帯をさす。昭和60年の1次調査区より、官衙関連造構の掘立柱建物跡や、掘立塀に囲まれた「館」の建物跡が検出されており、来住庵寺域を含め注目されている地域である。

今回、貸店舗建設に伴い緊急調査を行った。調査区の旧状は北から南へ下がる微傾斜を持つため調査区内の北側は、耕作時の削平があり造構の密度が少なかった。

包含層の残存は、南側1/3程度しか残っておらず、造構の残存も基底部しか残っていないものもあった。検出した造構としては、竪穴式住居址6棟、掘立柱建物跡6棟、土壙5基、ピット126基、溝2条、その他3基であった。この内、弥生時代の造構としては、円形住居址2棟(SB-2・3)、隅丸方形住居址1棟(SB-4)を検出した。3棟とも、前述のとおり削平がひどく、微傾斜の山側を1/3程度が残存しているのみであった。また、前期後半の不整形の土壙2基も検出した。古墳時代～古代の造構として、竪穴式住居址3棟(SB-1・5・6)、掘立柱建物跡6棟(SB-7・8・9・10・11・12)、溝1条(SD-1)が上げられる。SB-1は方形住居址、SB-5は壁の外周に講めぐらした隅丸方形住居址である。SB-6は、北壁中央に「カマド」を持つ4本柱の隅丸方形住居址である。掘立柱建物跡のうち、東西棟がSB-7、SB-10、SB-12、南北棟がSB-8、SB-9、SB-11である。このうち、柱穴の掘り方が大形で方形タイプが、SB-7(3間×4間)、SB-12(3間×?)が上げられる。他はやや小ぶりの円形タイプSB-8(2間×4~5間)、SB-9(1間×1間)、SB-10である。また、SB-11には、雨落ち溝(SD-1)を西側にもっており、柱穴のうち、根積め石(丸石8個を用いている)を持つもの1基。掘立柱建物の軸線は、SB-9を除き真北を中心6°以内に軸線を持ち、久米郡衙推定地(久米高畠1次調査区)や、来住庵寺跡及び来住庵寺域調査で確認された回廊や回廊内の建物跡の軸線に類似する。

出土遺物は、土器としては弥生時代前期後半、中期初頭、中期後葉、後期後半。古墳時代の土師器(前期・中期・後期)、須恵器(6世紀末～8世紀初頭)。

石器として、石斧、石鎌、石皿、他に白玉、鉄片1点が出土した。また、先土器時代後期の細石刃が1点出土した。

久米高畠5次調査区で造構の時期が確定しているのは、弥生時代前期後半の土壙と古墳時

代前期の竪穴式住居址（SB-6・4世紀末）であった。

掘立柱建物は、建物跡の軸線や、柱穴の掘り方、柱穴内の埋土が類似していることから、7世紀初頭～8世紀初頭段階、つまり久米評～久米郡衙・来住庵寺建立段階の建物跡と考えている。また、用途としては、調査地外の西側が、一段下がる丘陵端部であることや建物跡の規模、配置等から「倉」、倉庫等の高床式建物跡と推定される。また、今回の調査により、来住舌状台地（来住庵寺跡より西側）上の久米郡衙推定地内の西端部に倉庫が確認された意義は大きく、この推定地内の調査及び整理・検討が進めば、久米郡衙の様相が検証される為、詳細な調査が必要な地域である。

(宮崎)



図34-2 遺構配置図

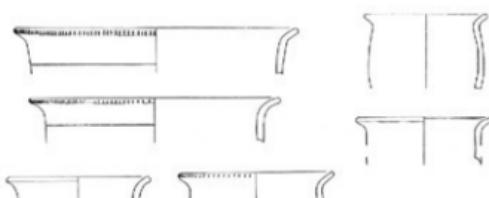


図34-3 遺物実測図 (SK-2出土)

35. 久米高畠遺跡（6次調査）

1. 所在地 松山市来住町1159、1160

2. 絶対位置 東経 $132^{\circ}48'10''$

北緯 $33^{\circ}48'37''$

3. 調査年月日 平成元年1月7日～1月
12日

4. 調査面積 40m²



図35-1 久米高畠遺跡6次位置図

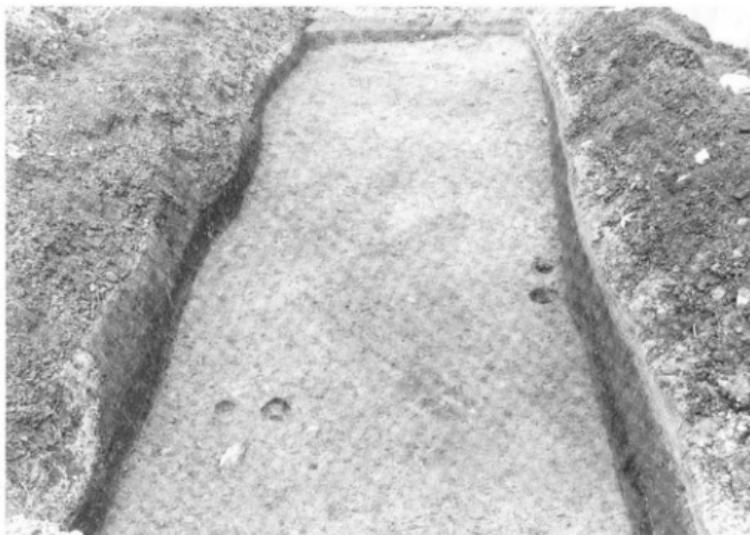
本調査区は、久米高畠遺跡1次調査地より西へ150m、来住庵寺西回廊より北西へ275mに位置し、来住舌状台地においては、西側の台地上に立地する。

基本層序は、第1層(耕作土)、第2層(灰褐色土少量暗褐色土を含む)、第3層(暗褐色土)、第4層(黒色土)で、遺物包含は、黒色土が主体であった。調査区が、北東から南西に向けて傾斜を持つ為、耕作等の削平の為、黒色包含層は北で5cm～南で80cmの厚さを計る。

検出した遺構として、土坑2基。ピット3基であった。

出土遺物は、調査区中央西寄りに集中して出土し、弥生時代前期～白鳳期の土器片のみであった。

(池田・宮崎)



図版35-1 全景

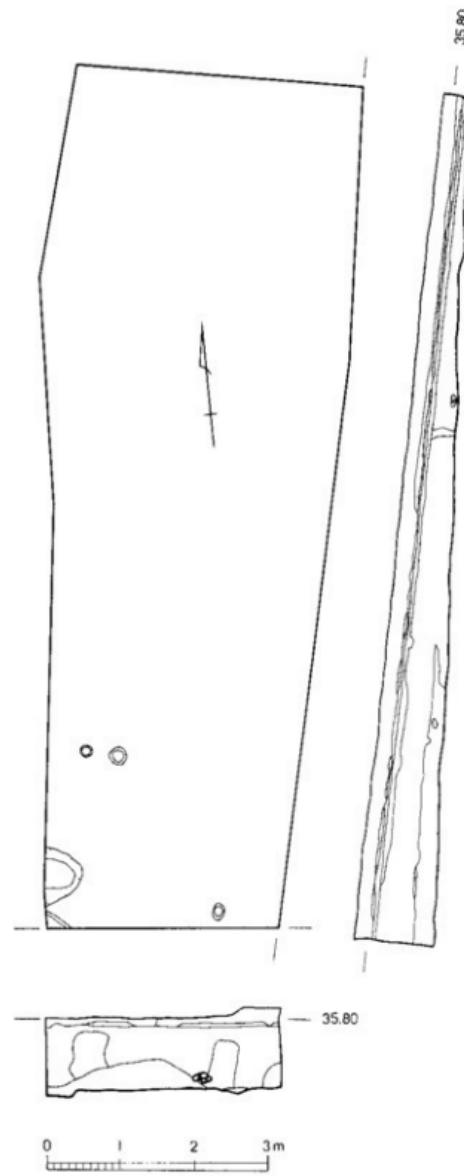


图35-2 造桥配置图

36. 来住町遺跡(1次)

1. 所在地 松山市来住町519

2. 絶対位置 東経132°48'25"

北緯 33°48'33"

3. 調査年月日 1988年11月16日～同年11
月23日

(試掘調査を含む)

4. 調査面積 1,632m²



図36-1 来住町遺跡1次位置図

本調査は、来住遺物包含内における共同住宅建設に伴う事前調査である。

立地・周辺の歴史的環境 本調査区は、松山平野東部にひろがる来住台地上に立地する。標高は40.6mである。調査区西方200mには白鳳時代寺院跡の米住廃寺がある。調査区周辺の遺跡概要等は来住廃寺及び久米高畠遺跡報告書を参照されたし。

調査の概要 試掘及び本調査において調査区北半・西半は昭和20～30年代の粘土採掘（瓦に使用）により遺跡が破壊されていた。調査は遺物包含層の範囲確認と同層の遺物・遺構確認を目的として実施した。基本土層は図36-2であり第Ⅳ・V層が遺物包含層である。第Ⅳ・V層の遺物は弥生土器（図36-5）、土師器、須恵器他であり、両層とも前記遺物が混在して出土した。第VI層上面（図36-4）では自然流路を確認した。

小結 本調査の資料は、米住廃寺の東域を考える上での資料となり、今後の同地区的調査資料の基本となるものである。なお、本調査の実施にあたっては、地主大西努、株式会社設計の各氏には多大の協力・援助をいただき感謝の意を表します。（梅木）

第I層	20cm
第II層	15cm
第III層	10cm
第IV層	5cm
第V層	60cm
第VI層	

図36-2 土層図 (S=1/20)

- 第I層 表土
- 第II層 床土
- 第III層 灰褐色シルト
- 第IV層 灰褐色シルト 遺物包含層
- 第V層 黒褐色シルト 遺物包含層
- 第VI層 地山（黄白色土）

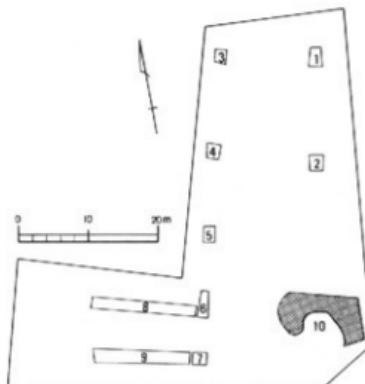


図36-3 造構配置図

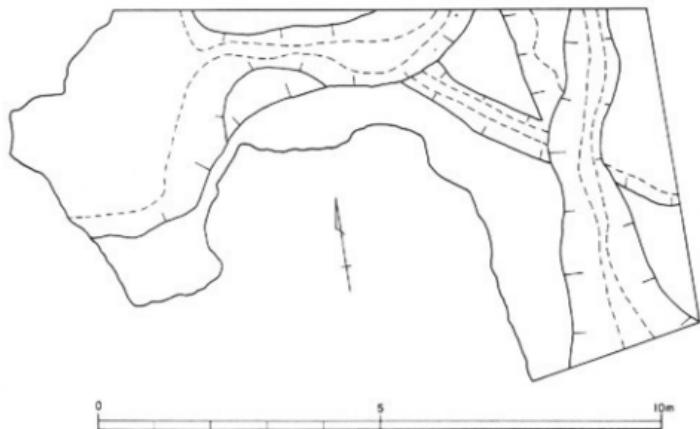


図36-4 第VI層上面遺構配置図

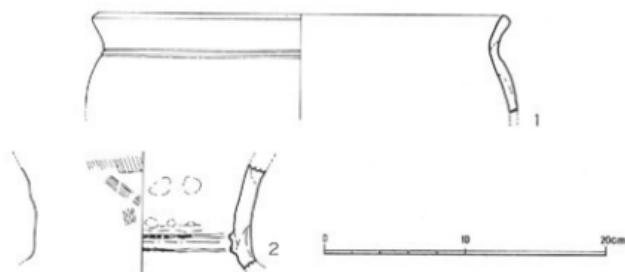


図36-5 遺物実測図（包含層出土）



図版36-1 第IV層上面検出自然流路（西より）



図版36-2 作業状況（西より）

37. 南久米才歩行遺跡

1. 所在地 松山市南久米町503-1、
504-3

2. 絶対位置 東経132°47'55"
北緯 33°48'38"

3. 調査年月日 昭和63年10月26日～12月
24日

4. 調査面積 679m²



図37-1 南久米才歩行遺跡位置図

本遺跡は、松山市中心部より南東約4.5kmの遺跡の集中が見られる米住舌状台地の北西を流れる堀越川の河岸段丘の落ち際に立地する。又、話題になっている「久米評」出土（久米高畠7次）や、古墳期の住居址を検出している南久米片廻遺跡に近接しており、来住庵寺跡、久米高畠遺跡等の都御関連遺跡に密接に関連する遺跡である。

調査区は、堀越川沿いに立地している為、堀越川の河床が調査区の4/5を占めている。調査により堀越川は東から西に流れ、当調査区においてゆるやかに北に向かって流れを変えた事が確認できた。

検出した造構としては、溝4条、土壙4基、ピット6基である。このうち溝(S D-1)は丁度堀越川が北へ向かう流れの変換点を東西に横切る状況で掘り込まれており、水田址に伴うかは定かでないが、何らかの用途に使われたと思われる。

出土遺物は、弥生時代中期初頭～中世にかけて出土しており、周辺の集落の存在が想定される。弥生式土器として、中期初頭段階の口縁直下に8条の沈線を持つ甕。中期中葉段階の頭部に指頭圧痕を有する尖底を持つ甕が出土している。又、弥生時代中期末の土器溜まりから四線文系土器の壺・甕・高杯が出土しており弥生式土器の出土の主体を占めていた。

古墳時代の上器として、須恵器（壺・甕・高杯・杯身・杯蓋・高台付杯・匙）と土師器（甕支脚・高杯等）が出土しており、6世紀前半及び7世紀後半～8世紀が主体を占めた。

中世の上器としては、土師質（皿・杯）、須恵質（盤）、瓦器、黒色土器、瓦、貿易陶器等が出土した。石器としては、石斧、石鎌、凹石、石庖丁、石皿。他に鉄器類、加工木器、植物遺体、獸骨類。又、土製品として両面に指突を全面に施された紡錘車が1点、銅製品として、小刀用の柄が1点出土した。

又、今回の調査及び整理作業に対して、株式会社アーテック（代表取締役：宮崎）には、協力・援助をいただきました。ここに記して感謝いたします。

(宮崎)

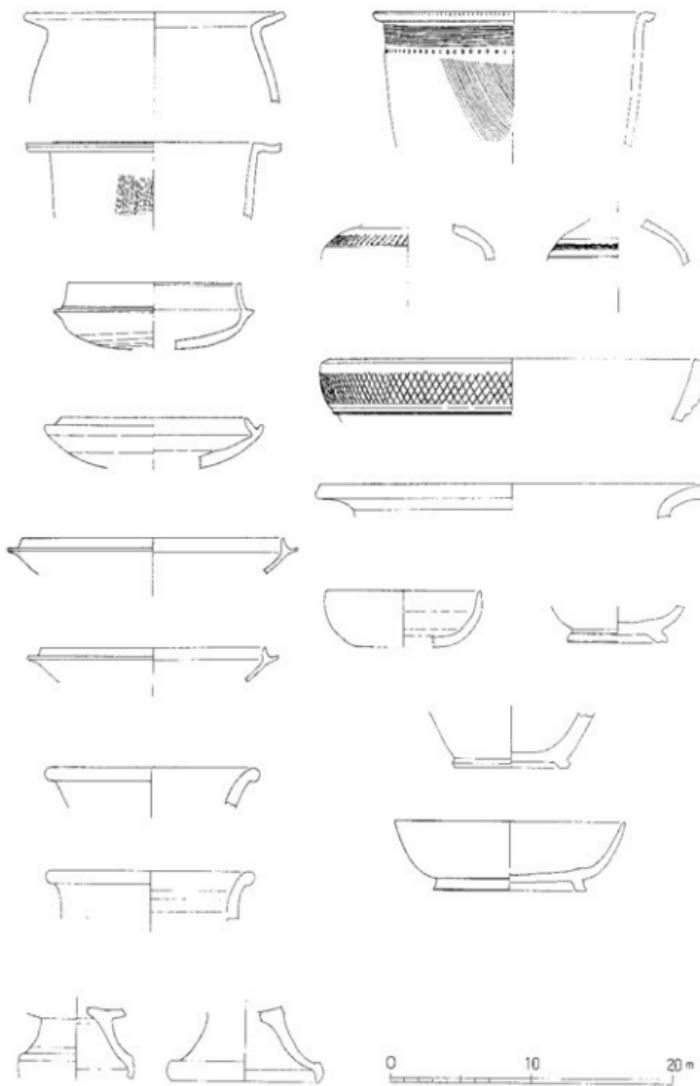


図37-2 遺物実測図

38. 久米窪田古屋敷遺跡

1. 所在地 松山市久米窪田町 837 - 1 外
2. 絶対位置 東経 $132^{\circ} 48' 58''$
北緯 $33^{\circ} 48' 20''$
3. 調査年月日 昭和62年1月26日～4月8日
4. 調査面積 2,000m²

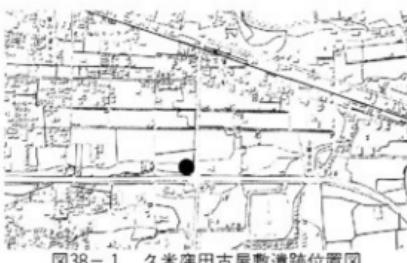


図38-1 久米窪田古屋敷遺跡位置図

本遺跡は、松山平野を西流する重信川、石手川、小野川をはじめとする大小河川によって形成された扇状地を眼のあたりにする洪積台地の先端部、海拔48mに位置する。この周辺地域では、国道11号バイパス関連遺跡として愛媛県教委によって調査が行われた久米窪田Ⅰ～V遺跡において、弥生前期、中期末から後期の住居址、土壙墓、古墳時代から9世紀に至るまでの住居址、掘立柱建物、井戸等が検出されている。特に、南に隣接する久米窪田II遺跡では、2×3間を主とする掘立柱建物群とともに、円面鏡、墨書き器、瓦、人形、木簡等を出土しており、久米郡衙関連の遺跡としての可能性を指摘されている。

調査は0.5mの段差を持つ2枚の水田のうち、東の高い1枚をA区、西の低い1枚をB区として行った。A区では、弥生前期末から中期初頭の土壙14基、溝状造構1条、時期は不詳であるが、おそらく弥生時代に属すると思われる円形住居址1棟を、また、7世紀代の掘立柱建物9棟、竪穴住居址2棟、溝6条を検出した。土壙はすべて弥生に属する。SK-5は中期、その他は前期末の遺構である。出土遺物のうち甕においては、多条のヘラ描き沈線を口縁下に施されるものが多く、列点文、或いはヘラ描きの鋸歯文を伴うものもある。また、中期としたSK-5からは甕の胴部片しか出土していないが、外面のヘラ磨きの入念さ、内面を縱ヘラ削りして器壁を極めて薄く作っているところから、中期中葉を遡らないものと思われる。溝状造構、SD-7は中期初頭に位置づけられる。SB-7は削平のため、確実に造構に伴う遺物の出土をみなかったが、直径8mに及ぶ規模、プランからみて中期以降の住居址であろう。

7世紀の建物群は、その主軸方位から3つのグループに分けられる。磁北にほぼ近い方位をとるA群、SB-10、13、約8°東に振るB群、SB-3、9、11、12、約12°東に振るC群、SB-1、2、4、5、6である。C群、SB-6の柱穴がB群、SB-11を切り、しかも7世紀前半代の遺物を出土するSD-1を切っている。B群のSB-11、12ともにSD-1に切られていることから、SD-1の時期を境にしてB群がC群に先行している。ただし、B群のうちでのSB-3、9の前後関係は不明である。C群の時期はSD-3、6の時期、7世紀後半代と考えている。A群、B群の時期は包含層の遺物から7世紀前半代におさまるものと思われる。

なお、遺構には伴わなかったが、包含層から重なりあった状態で東播系の片口鉢と底部糸切りの土師杯が出土した。片口鉢は13世紀中頃に比定される遺物である。その出土状況からみて一括性は高く、当地の土師杯をまとめる上でのメルクマールとなり得るものと考えている。

B区においては、削平のため数条の小溝が検出されたのみで、建物跡等の検出はみなかつたが、北東から南西にかけての河川状遺構が検出され、弥生から古墳時代の遺物が混涵状態で出土した。
(栗田)



図38-2 A区遺構配置図

39. 久米窪田森元遺跡

1. 所在地 松山市久米窪田町 853、
854-1

2. 絶対位置 東経132°48'51"
北緯 33°48'20"

3. 調査年月日 昭和62年4月8日～5月
5日

4. 調査面積 1,600m²

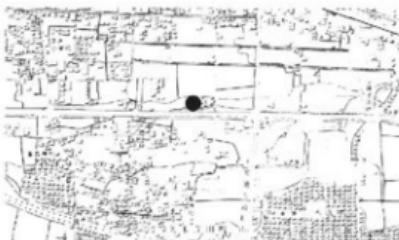


図39-1 久米窪田森元遺跡位置図

古屋敷遺跡の西方約200mに所在する水田地の現状変更に伴う発掘調査である。古屋敷遺跡で検出された河川状遺構の西岸に位置し、海拔は46.5mを測る。調査区東半は削平のため、遺物包含層は遺存しなかったが、地山面において幅0.5mの浅い溝を北西から南東に長さ35mにわたって検出した。遺物の出土はみられなかった。調査区北端においても同規模の溝を東西に検出している。この溝からは7世紀前半代の須恵台付長頭壺が1点出土した。遺物を包含する黒色粘質土は主に調査区南西部に遺存しており、この地域において縄文後期の上塙状遺構SK-1と、SK-1を切る小溝SD-5、7世紀後半から10世紀に涉る遺物を出土した溝SD-4、土壤墓と考えられるSK-2がSD-4を切った状態で検出されている。

SK-1は長径2.1m、短径1.1mの三日月状のプランをなす。弧状辺から弦状辺に向かって次第に深くなり、現状での最深部で25cmを測る。弦状辺部をSD-5によって切られている。地山が何らかの要因で舟底状に掘り込まれた窪みに自然堆積した無遺物の黒色微粒土を掘り込んで形成されている。埋土は黒灰色粘質土の單一層で、縄文後期の遺物が出土した。完形に復元できるものはないが、破片での個体数は40点余りを数える。器種は条痕文の粗製深鉢、浅鉢、縁帶文深鉢、沈線文及び、沈線文に列点を加えた深鉢、口端部と体部に縄文を施す小型鉢等である。磨消縄文はみられない。沈線+列点の深鉢の頸部には橋状把手、縦位の貼り付け突帯を持つ。後期後葉の一括遺物として取り扱えるものとして考えている。

SD-4は幅2.5m、深さ0.7m、断面U字状の溝である。SK-1の東2mで長さ10mにわたって検出された。7世紀後半代の須恵器數点と、底部ヘラ切りによる土師杯を20個個体出土している。これらの土師杯は10世紀後半代に比定されよう。

SK-2はSD-4を切った状態で検出された。発掘区西南端の農道下にあるため、全容を明らかにすることはできなかったが、短辺0.8mの長方形プランを持つものと思われる。断面三角形の貼り付け高台を有する土師碗底部と、高台を欠失した黒色土器A類椀の破片が出土した。

(栗田)

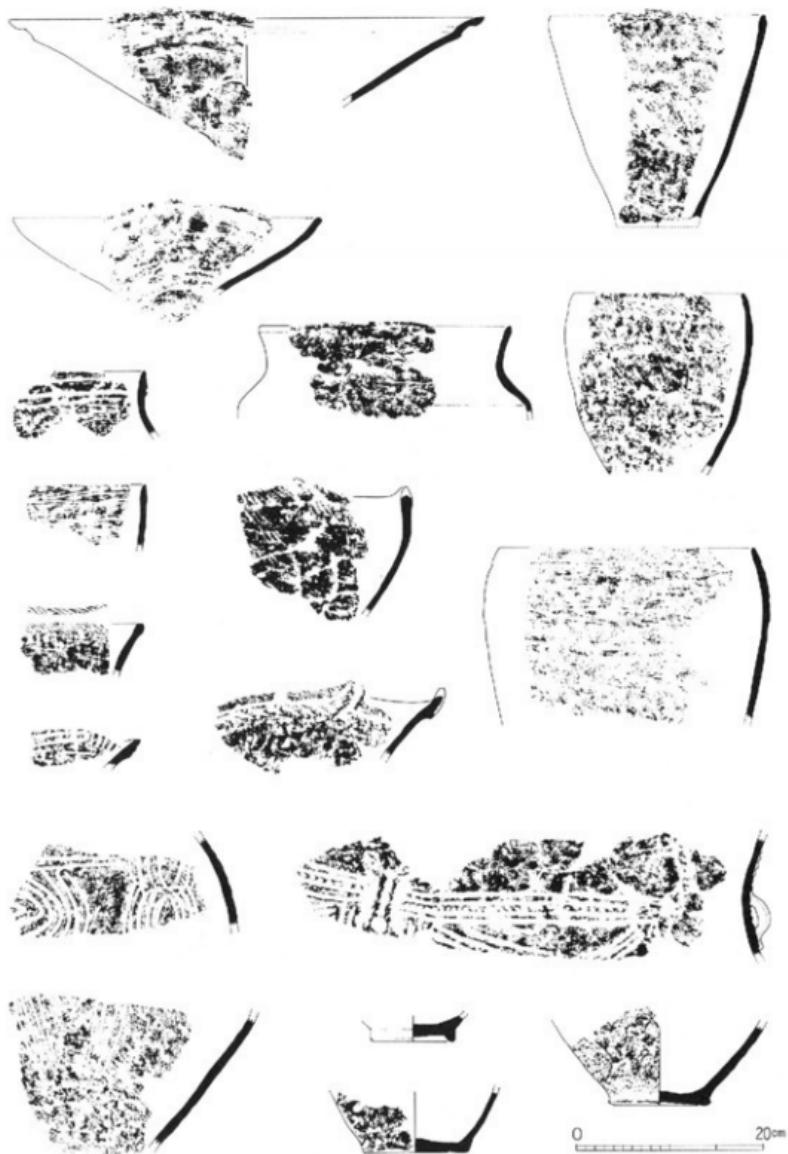


図39-2 遺物実測図 (SK-1)

40. 久米高畠遺跡（7次調査）「久米評」出土遺跡

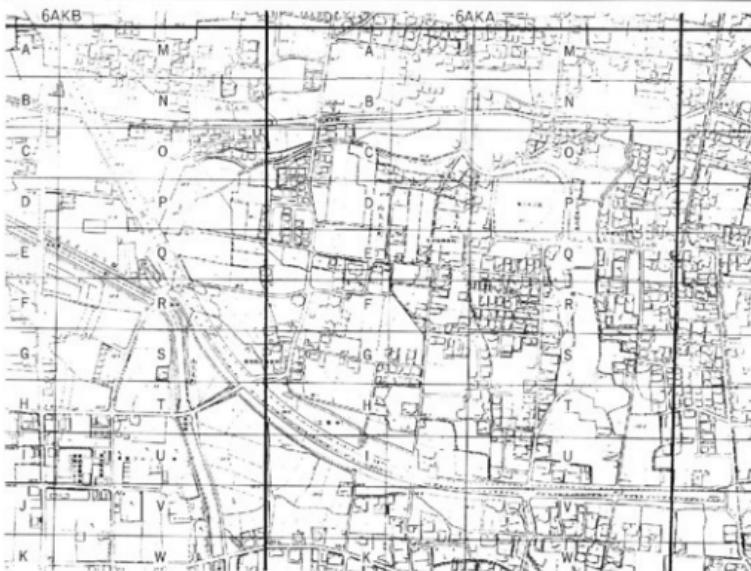


図40-1 久米高畠遺跡 7次位置図（来住地区域画割付図）

1. 所在地 松山市南久米町569番地
(市道久米92号線)

3. 調査年月日 平成元年1月11日～
2月11日

2. 絶対位置 東経132°47'59"
北緯33°48'35"

4. 調査面積 148m²
5. 調査員 西尾・重松・宮崎・丹下・
武智・小笠原

本遺跡は松山城の南東4.5km、洪積台地からなる来住舌状台地西先端部（海拔32.4m）に立地する。北方50mには掘越川、南方200mに小野川がそれぞれに河岸段丘を形成しつつ西流し、同台地を囲むように西方350m地で合流している。また同台地は1段高くなり、周辺が見渡される地形を呈している。

同台地での近年の調査としては前述（本年報、来住庵寺寺域調査）のように来住庵寺ほか大規模の回廊上遺構や高畠地区に広がる官衙遺構など古代久米郡の中核地域としての遺跡の展開が見られている。

調査は松山市道久米92号線拡幅工事の際によるもので拡幅工事としても1m前後の最小規模範囲であったが重要遺跡密集地で同台地先端の立ち上がり部分に当たることなどを考慮し緊急調査した遺跡である。

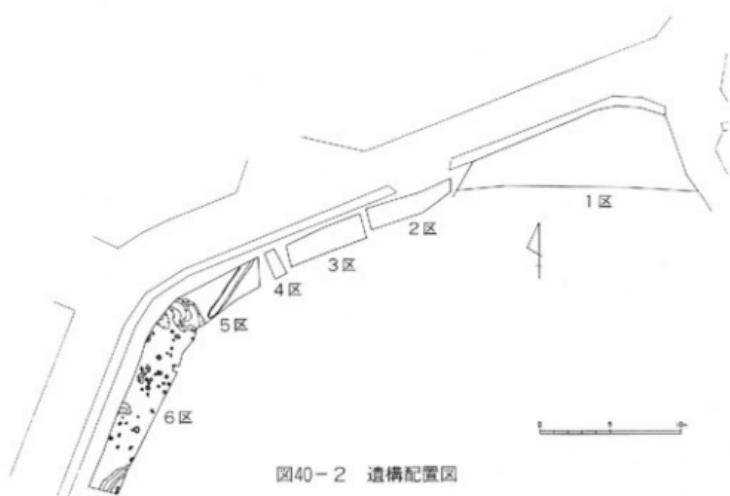


図40-2 遺構配置図

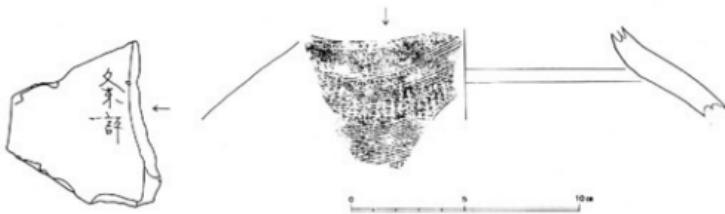


図40-3 「久米評」線刻須恵器実測図

「久米評」線刻須恵器について

出土地の層序は耕作土(20cm) 茶褐色土(7cm) 黒褐色土(10cm)で、この下層にあたる黒褐色土の地山上面にへばりついた状態で、小量の土師器片須恵器片が出土した中から奇跡的に認められたものである。

須恵器の器形としては体部上面から頸部下部分が僅かに残るもので、復原器高25cm前後の中型甕が考えられる。体部外面には横方向のカキ貝状の調整を施し、体部内面に荒目の同心円痕跡がある、頸部内面はヨコナデ仕上げになる。摩滅度は少ない。線刻の銘字「久米評」は頸部下の外面に鋭利な工具状のもので3文字を横方向に施している。

検出遺構としては、溝2条・土壙2基・ピット41基・性格不明1基が上げられ、いずれも市道調査区西南の丘陵段落ちに統く平坦面からの検出であった。

今回における「久米評」を線刻する須恵器出土は前述（本年報、米住庵寺寺域調査頁）のこれまで検出した官衙遺構の初期的段階の時期を示唆すると共に地形的にみて出土地そのものが郡衙推定地の西端範囲をも示唆した標識的遺跡である。
(西尾・宮崎)

付編 松山市埋蔵文化財関係資料

例 言

1. 本編は、松山市教育委員会文化教育課が近年行った市内埋蔵文化財確認調査・同発掘調査・同資料展示に関する報告である。
2. 昭和61年度以前の同資料報告は松山文化財調査年報Ⅰにて行っており、本編では昭和62～63年度資料を主に報告を行う。
3. 資料作製（一覧表及び付録図）は、梅木謙一、丹下道一、山之内志郎、相原浩二、森田晶子、栗林千恵、藤沢真美が行った。
4. 表1、表2の番号は、埋蔵文化財確認願いの申請書番号に順するものである。
なお、欠番は申請取り下げ等によるものである。
5. 付録図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図三津浜・松山北・郡中・松山南を使用した。

■参考文献 松山市教育委員会「松山市文化財調査年報Ⅰ（昭和60～61年度）」昭和62年3月発行

昭和62年度松山市埋蔵文化財確認調査一覧

No.	所 在 地	面 積(m ²)	標 高(m)	露 出 部	露 出 方 向	位 置(cm)	備 考
0	水前町252	7,148.3	67.5	私	試	4. E31.6, S19.5	
1	北畠町155-1	705.7	10.1	私	立	3. E41.6, S 5.0	
2	小坂1丁目280-1他	1,156	25.5	私	試	4. E13.0, S 4.2	
3	久米塙田町155-1	369	46.0	私	立	4. E23.7, S 12.6	
4	福音寺町128	1,616	22.0	私	試	4. E11.9, S 5.9	
5	久米塙田町157-13他	1,479	36.0	私	本	4. E19.5, S 10.8	久米高畠2次
6	祇谷67丁目1122地	9,129.9	60.0	私	本	2. E10.2, S 26.1	祇谷六丁場
7	永住町518	872.3	49.2	私	試	4. E15.6, S 10.7	
8	東住町866	1,825.6	39.3	私	試	4. E19.9, S 11.2	
9	鹿ノ子町141-3	458.8		私	試	4. E23.3, S 12.0	
10	下伊豆町450	209.6	138.0	私	立	2. E22.5, S 27.0	
11	安城寺町132-6他	557.4	4.6	公	立	1. E13.8, S 16.9	
12	福音寺町7745-5	678.9	23.5	私	試	4. E12.3, S 5.4	
13	北桜本町3239-1他	213.0	77.0	私	立	4. E36.8, S 16.6	
14	勝間町2-22他	1,599.3	135.0	私	本	1. E36.8, S 9.4	高井山古墳群
15	飛山町20-3	35.2	23.0	私	立	4. E11.3, S 7.2	
16	東野1丁目4069-3	198.1	56.0	私	立	2. E19.7, S 35.3	
17	鹿ノ子町447-5	198	47.0	私	立	4. E23.5, S 10.6	
18	みどりヶ丘300-183	113.1	3.5	私	立	1. E40.7, S 27.7	
19	中村2丁目283-1	123.5	27.0	私	立	1. E10.5, S 1.8	
20	東野町4丁目12-24	207.9	61.0	私	立	2. E29.9, S 35.1	
21	北井門町111-4	298.2	24.2	私	立	4. E11.8, S 14.0	
22	祇谷1丁目971-4	141.1	44.0	私	試	2. E11.7, S 27.0	
23	祇谷4丁目971-5	126.5	41.0	私	試	2. E11.1, S 27.2	
24	祇谷4丁目971-6	121.1	44.0	私	試	2. E11.2, S 27.4	
25	枝松町6丁目61-6	162.6	27.5	私	立	4. E14.4, S 5.0	
26	西石井町219	593.3	20.0	私	立	1. E 9.6, S 10.2	
27	各町257-6他	192.2	18.0	私	立	2. E 3.3, S 19.0	
28	南久米町685-3	130.9	30.0	私	立	4. E20.8, S 11.2	
29	辻町220-1	160.3	14.3	私	立	2. E 0.8, S 20.2	
30	＝	177.2	14.3	私	立	2. E 0.8, S 39.2	
31	＝	143.3	14.3	私	立	2. E 0.8, S 39.2	
32	西石井町342-4	109.4	20.0	私	立	4. E 9.2, S 10.4	
33	久米塙田町1792-4	409.9	45.0	私	試	4. E24.2, S 13.0	
34	北畠町948-1	125.7	9.0	私	立	3. E30.4, S 0.6	
35	朝生郷町313-1	796.6	19.5	私	試	4. E 7.8, S 5.5	
36	北畠町9790	209.9	8.0	私	立	3. E38.9, S 0.9	
37	山越1丁目561-20	94.2	19.0	私	立	2. E 3.9, S 26.9	

No.	開 勘 地	面 積 (a)	標 高 (m)	測 定 方 法	調査 方 法	位 置 (m)	備 考
38	桑原2丁目822-3	236	* 39.5	私 立	4. E 16.3, S 4.0		
39	道歩町1丁目8-53	30.6	24.0	私 立	2. E 6.1, S 31.9		
40	桑原1丁目809-2	121.0	38.0	私 立	1. E 16.7, S 2.3		
41	鹿ノ子町65-2-3	985.0	42.5	私 立	4. E 36.9, S 46.1		
42	北船木町323-2	234.3	77.0	私 立	4. E 36.9, S 46.1		
43	桑原1丁目809-4他	600.0	36.5	公 立	4. E 15.8, S 9.0		
44	櫻味4丁目212-6	148.8	39.0	私 立	2. E 15.5, S 36.7		
45	久万ノ台785-1	889.5	16.2	公 立	1. E 43.4, S 36.2	久万ノ台公園	
46	北舟門町234-1他	942.9	24.0	私 立	4. E 11.3, S 14.9		
47	平井町255他	721.3	65.0	公 立	4. E 28.9, S 11.7		
48	桑原1丁目810-1	400.3	36.0	私 立	4. E 15.0, S 5.0		
49	木佐町596-2他	114.0	37.0	公 立	4. E 19.5, S 11.4		
50	櫻味4丁目212-7	198.4	39.5	私 立	2. E 15.7, S 36.7		
51	祝賀2丁目209他	50.0	50.0	私 立	2. E 12.4, S 28.3		
52	桑原6丁目534-2	231.9	34.5	私 立	4. E 15.8, S 2.2		
53	御生町1丁目10-18	136.1	20.0	私 立	4. E 7.8, S 5.3		
54	追跡跡4-24	116.2	27.0	私 立	2. E 7.9, S 30.2	南海放送道路	
55	南久米町180-3	196.7	私 立	4. E 19.9, S 8.5			
56	福音寺448-1	1,502.3	29.0	私 立	4. E 14.9, S 6.1	福音寺道路	
57	追跡...方287-12	119.7	32.5	私 立	2. E 11.0, S 32.4		
58	久米庭園192-6	628.1	45.5	私 立	4. E 22.7, S 12.3	森元	
59	樺町甲424-2	216	28.0	私 立	2. E 7.3, S 9.6		
60	豊原町958-16	213.0	25.2	私 立	4. E 15.0, S 7.7		
61	北久米町664-1	652.7	34.6	私 立	4. E 17.5, S 8.6		
62	福音寺町342	400	31.1	私 立	4. E 16.4, S 6.8		
63	北久米町705-1他	7,110	31.7	私 立	4. E 17.0, S 8.0	淨慈寺II道路	
64	平井町2338	849	60.7	私 立	4. E 28.5, S 11.6		
65	櫻味4丁目204-1他	945	39.5	私 立	2. E 16.0, S 36.7	櫻味西区地盤跡	
66	古賀院1丁目714-2他	374.5	27.0	私 立	2. E 5.5, S 2.2	吉野宮ノ谷遺跡	
67	船ノ谷町245-6他	4,135.3	9.0	私 立	1. E 41.7, S 22.2	向山古墳	
68	博峰2丁目58	1,691	42.1	私 立	2. E 16.2, S 35.3	博峰立派道路	
69	段谷4丁目964	305.5	44.4	私 立	2. E 11.5, S 27.0		
70	今堀家町105-2他	1,561.5	32.0	私 立			
71	追跡跡4月町甲1600-3	903.9	64.2	私 立	2. E 14.6, S 30.2		
72	北久米町215-2他	1,588.9	8.8	私 立	3. E 39.8, S 1.1	北久米地内道路	
73	久米庭園1946-4	245	47.5	私 立	4. E 24.5, S 12.3	古原敷	
74	志喜田町548-1他	137.9	3.5	私 立	1. E 31.9, S 34.6		
75	平井町甲44-2	345.2	85.0	私 立	4. E 33.7, S 10.2		
76	櫻味4丁目212-1	35.7	30.0	公 立	2. E 15.6, S 36.9		
77	東野4丁目569-2他	224	59.0	私 立	2. E 29.3, S 35.2		
78	鹿ノ子町731-5	125.4	44.4	私 立	4. E 22.8, S 10.6		
79	天山町6-5	666.1	24.3	私 立	4. E 11.8, S 6.2		
80	鹿ノ子町154-3	495	* 50.0	私 立	4. E 23.9, S 11.9		
81	北久米町2丁目478-1	635	33.0	私 立	4. E 18.9, S 9.5		
82	今堀家町94-1	983	31.5	私 立	4. E 16.6, S 13.3		
83	平井町3157-104	233.8	47.0	私 立	4. E 23.5, S 13.6		
84	堤之内官有地	148.5	21.0	公 立	2. E 4.7, S 33.6		
85	福音寺町15-13他	4,165	70.0	私 立	4. E 21.8, S 5.2		
86	櫻味4丁目204	8.4	39.3	公 立	2. E 16.1, S 36.9		
87	立花6丁目341	130	210.0	私 立	4. E 8.2, S 5.0		
88	久米庭園町326	* 44.0	公 立	4. E 29.7, S 15.9			
89	北久米町131	100	34.0	私 立	4. E 19.1, S 9.0		
90	南久米町567-1	508.3	32.5	私 立	4. E 18.7, S 10.7		
91	船ノ谷町331-8他	74.2	* 9.0	公 立	1. E 41.9, S 19.9		
92	古賀院1丁目951-1他	978.3	10.4	私 立	1. E 39.3, S 28.3		
93	桑原6丁目499-1	1,252	33.0	私 立	4. E 15.8, S 2.9		
94	南久米町351-1	737	33.5	私 立	4. E 18.7, S 11.0		
95	今堀家町305-1	574	* 31.0	私 立	4. E 16.1, S 14.0		
96	南江戸町1丁目820-1	985	13.4	私 立	3. E 45.5, S 0.5		
97	小堀町1丁目23-1他	911	25.5	私 立	4. E 13.1, S 4.4		
98	福音寺町425他	1,243.5	27.0	私 立	4. E 15.3, S 5.9		

(註) ①面積 調査対象面積。②標高 * -推定値、() - 調査区内平均値。③測定内容 公 - 施主公共団体、私 - 施主一般。④調査方法 立 - 立会い、試 - 試掘調査。⑤位置 お隣地土地理院発行の2万5千分の1図上津波江、同松山北2、同郡中3、同郡山南4を指す。右欄各図の位置値。

昭和63年度松山市埋蔵文化財確認調査一覧

No.	開　発　地	面積 (sq.m.)	標高 (m.)	測量資料	方法	報告・遺構	遺物	位置 (cm)	備考
1	北久米町447 3+449	1,235	35.1	私 試	包	土師	4 E 19.3, S 9.2		
2	星ノ岡乙4+45	3,300	630.0	私 試	(土)	土師、陶、瓦	4 E 14.4, S 8.9		
3	福音寺町267-11	495	24.0	私 試			4 E 13.8, S 6.7	本跡調査へ	
4	山越1丁目329-11+16	310	17.7	私 試			2 E 2.3, S 27.8		
5	南久米661-8	10	40.3	私 試			4 E 21.4, S 11.3		
6	みどりヶ丘1066-25	141	(6.4)	私 試			1 E 41.5, S 26.6		
7	若草町8	4,500	23.0	公 試			2 E 5.2, S 32.3		
8	松末町1丁目79-4+5+6	954	26.0	私 試	(包)		4 E 15.2, S 5.2		
9	北久米町779-3+727-1	1,003	31.0	私 試	包(包)	土師	4 E 16.5, S 7.9	小跡へ、遺塚	
10	吉善5丁目283-3+4-5	357	21.3	私 試			1 E 5.2, S 20.3		
11	平井戸町1093-3+1094-3	317	27.0	私 試			4 E 31.7, S 11.8		
12	鹿江戸5丁目768-767-1	1,005	13.4	私 試	(包)	陶	1 E 45.3, S 34.8		
13	南久米町1003-1+504-3	679	31.0	私 試	包、陶	陶、土師、礫	4 E 18.1, S 10.2	南久米歩行	
14	平井戸町2564-623号	1,786	37.5	私 試	包(包)	陶、土師、礫	4 E 26.7, S 11.0		
15	北久米町47-1他	498	33.3	私 試	(包)	陶	4 E 18.8, S 9.3		
16	森町2丁目965	638	38.0	私 試			2 E 15.9, S 36.6		
17	道後今宿986-6+9	211	34.0	私 試			2 E 11.7, S 31.0		
18	瀬ノ子町1029-3	880	59.7	私 試		土師、陶	4 E 23.5, S 8.7		
19	南久米町607-2+610-2+615-1	696	36.8	私 試	(包)	土師	4 E 21.0, S 10.3		
20	立花町丁目307-1	673	29.8	私 試			4 E 7.4, S 4.9		
21	東山町45-1	308	■14.0	私 試			1 E 42.0, S 23.6		
22	東石舟町400-2+3	511	21.7	私 試			4 E 10.6, S 9.7		
23	道後今宿198-2	286	■32.0	私 試			2 E 10.8, S 30.6		
24	博味4丁目296-1	430	40.2	私 試			2 E 15.7, S 35.7	椿峰高木	
25	福食寺町1丁目5番乙	128	■23.7	私 試			4 E 12.6, S 6.1		
26	南久米町775地2第、来住町1130地2第	1,707	35.0	私 試	(包)		4 E 18.3, S 11.3	久米高畠5次	
27	森町2丁目865	356	37.0	私 試	(包)		4 E 16.8, S 1.2		
28	来住町1394-1	1,218	33.5	私 試			4 E 17.7, S 14.1		
29	針田町107-3	330	■9.5	公 試			3 E 42.4, S 6.0		
30	高瀬町506	646	65.0	公 試			3 E 36.0, S 2.3		
31	久万ノ内1169-1	357	13.7	公 試			1 E 49.0, S 27.6		
32	太山寺町2441-1	112	■10.0	公 試			1 E 38.0, S 11.9		
33	東方町型635	433	39.3	公 試			4 E 27.3, S 31.0		
34	山越1丁目317-9	296	■18.5	私 試			2 E 2.3, S 27.6		
35	水泥町447-1+4-545-1-4	1,218	58.0	私 試			4 E 29.2, S 14.8		
36	来住町149	255	36.0	私 試	包(土)(包)		4 E 19.1, S 11.4	久米高畠4次	
37	南土居町4丁目1	869	■44.0	私 試			4 E 21.7, S 16.4	廻、本格へ	
38	南久米531-1+2	1,697	32.0	私 試			4 E 17.8, S 10.4		
39	南江戸4丁目1-1	374	■13.0	公 試					
40	瀬ノ子町36番	264	43.0	私 試			4 E 22.5, S 11.1		
41	東方町甲1221-3	443	57.5	私 試		土師	4 E 25.5, S 29.8		
42	朝生田町230-4	265	20.0	私 試			4 E 8.4, S 5.5		
43	水窪町317	306	57.5	私 試			4 E 29.3, S 15.0		
44	桑原町丁目772外1第	1,453	■49.0	公 試			4 E 15.0, S 1.9		
45	今在家町45-1+6-1	2,365	■32.7	私 試			4 E 17.3, S 14.0		
46	南江戸5丁目744-1+265-1+770	1,876	13.4	私 試	(土)木樁	土師、陶、瓦	1 E 45.2, S 35.0	南江戸5丁目所在	
47	北久米町22+23+24+25+29+30	2,887	42.7	私 試			4 E 11.3, S 12.5		
48	瀬ノ子町190-2	233	47.0	私 試			4 E 28.8, S 11.1		
49	今在家町324-1	179	■31.5	私 試			4 E 16.2, S 14.4		
50	南久米町534-1	872	■30.0	私 試	包、土、瓦	土師、陶	4 E 17.6, S 10.7	削除	
51	桑原町4丁目12-2+3-4	549	38.0	私 試			4 E 18.2, S 3.0		
52	来住町1159+1160	525+267	■36.1	私 試	包、土、瓦	陶、土師、礫	4 E 19.1, S 10.5	久米高畠5次	
53	辻町69-1	222	■14.0	私 試	○		2 E 0.2, S 34.5		
54	北久米町18番	485	42.7	私 試			4 E 20.9, S 7.0		
55	南江戸5丁目1521-1	125	42.7	私 試			1 E 45.0, S 35.2		
56	来住町319	1,632	40.7	私 試	瓦	陶、土師、礫	4 E 21.2, S 12.1		
57	瀬ノ子町211-2+4-212-5	581	50.0	私 試	×		4 E 24.2, S 11.4		

No	所 在 地	面 積 (ha)	標 高 (m)	測 計 方 法	包 含・透 構	遺 物	位 置 (cm)	場 所
58	黒ノ子町212-2	149	50.0	私 試	×		4. E24.3, S11.5	
59	久米原町1844-1-845 4	1,038	46.6	私 試	包, 譲	瓶, 牛糞, 瓶	4. E24.8, S12.6	
60	香川町3丁目3	1,196	23.9	私 ○			2. E 8.0, S34.6	
61	久米原町1833-1-824-1	1,817	45	私 試			4. E23.3, S12.4 ②	E24.2, S12.4
62	久万ノ台1292-1-1317-2	1,303	18.6	私 試			1. E44.1, S28.7	
63	福音堂町709-1	1,239	23.4	私 試 包	透	透	4. E13.3, S 6.2	
64	今在町272-1	1,157	30.1	私 ○	急	瓶, 小罐	4. E16.5, S12.7	
65	別府町432-9	334	45.0	私 立			1. E37.0, S32.3	
66	桜川町101-3-4-470-1-4	996	20.1	私 ○			4. E 6.3, S 5.1	
67	市道石井45号線	438	18.1	公 立			4. E 7.5, S 6.0	
68	西瀬石井47号線	306	18.2	公 立			4. E 7.8, S 6.5	
69	山越1丁目274-9	161	18.5	私 立			2. E 2.9, S27.2	
70	南久米町115-1-2	315-705	36.1	私 立			4. E19.9, S 8.9	久米北野
71	黒ノ子町60-1	463	43.0	私 本			4. E22.5, S11.8	
72	金原4丁目1849-1	612	37.3	私 試 包(?)	土	土	4. E17.0, S 2.1	
73	赤佐町1151-1	394	36.0	私 ○			4. E19.1, S10.7	
74	久米原町1154-1-2	120	43.9	私 ○			4. E23.7, S12.6	
75	南久米町575-1-2	1,978	34.9	私 試	井	井	4. E18.9, S 10.1	
76	未登記164	1,454	38.4	私 ×			4. E18.3, S11.2	
77	東野5丁目甲711-1-712	1,133	57.3	私 試	頬	頬	2. E19.5, S35.1	
78	大虎町1155-15	265	62.5	私 立			4. E29.8, S13.5	
79	南久米町782-1	1,118	34.0	私 試 包, 七, ピ	井	井	4. E18.9, S10.6	
80	東方町甲1299-5	272	59.0	私 立			4. E26.4, S30.1 ②	E13.3, S10.4
81	南久米町781-783	294-651	34.0	私 試				
82	南久米1丁目207	700	39.3	私 試 包, 井		土, 瓶, 傷	2. E15.7, S36.4	
83	北久米町690-691-887-1	337	32.9	私 試			4. E17.3, S 8.0	
84	金原1丁目193-5	657	37.7	私 試 包, ピ		土, 瓶	4. E15.3, S 5.4	
85	中野4丁目180-3	350	21.1	私 △			4. E10.7, S 5.4	
86	御幸町2丁目206-60	56.1	21.0	私 立				
87	南久米町685-1他	900	39.9	私 試 包	井, 右	井	4. E21.0, S11.1	
88	北端木町甲1359番地	241	12.0	私 ○				
89	東松町358	826	36.1	私 試		土, 瓶	4. E19.2, S11.9	
90	平野町2074-3	327	50.2	私 立			4. E27.6, S11.2	
91	南久米町758他 東松町761他	1,904	37.9	私 試			4. E19.9, S10.7	本格へ
92	名原4丁目802-6	185	36.0	私 立			4. E15.6, S 6.0	
93	山西町250他 利府町250他	64,909	35.4	私 △			1. E40.0, S31.5 ④	
94	山西1丁目314他	1,2796	18.0	私 ○			2. E25.5, S27.3	
95	〃			私 試			4. E10.4, S13.6	
96	黒ノ子町94番3	289	44.0	私 ○	急(?)	土, 瓶	4. E22.6, S11.3	
97	東原4丁目1858-3	265	59.0	私 試 包	瓦	瓦	2. E20.3, S36.0	
98	道後今1053-1	238	31.3	私 △			2. E10.6, S30.6 ⑥	
99	山西町53-1他	18,714	5.9	私 △			1. E34.8, S31.2 ⑥	
100	水瀬町572-1	580	57.0	私 試			4. E29.0, S14.6	
101	鶴見田276	694	19.1	私 試				日本にちっていふ 日本をさす 5.6
102	東原4丁目1827-1他	472	57.0	私 立			2. E19.7, S35.4	工事済
103	山西1丁目287-1	1,077	17.7	私 ○			2. E 2.4, S26.8	
104	半掛町甲1490-1	634	69.2	私 立			4. E30.6, S11.9	
105	未登記555他	1,666	40.2	私 ○			4. E20.8, S11.4 ⑥	
106	小原4丁目41-1他	847	29.3	私 試				
107	北久米町870-2他	561	29.8	私 試				
108	小原4丁目40-2	149	27.1	私 ○				
109	小原4丁目295-1他	5,058	24.2	私 ○				
110	久米原町901-1	279	42.6	私 ○				
111	南久米町669番地	148	31.5	私 ○				久高
112	桑原1丁目381-2	2,053	38.0	私 ○				
113	下伊谷町1045-15	247	38.0	私 ○				
114		70	38.8	私 ○				

昭和62~63年度松山市埋蔵文化財発掘調査一覧

No	遺跡名	所在地	調査目的	時代
103	久米津田古墳敷遺跡	久米津田町837丁目	緊急	弥生前~古墳後
104	中村松田遺跡	中村丁目65-2外	"	弥生後
105	大謙遺跡	太山寺町甲496~498地	"	彌文後~晩
106	高月山古墳群	勝岡町乙22地	"	弥生後、古墳前
107	船ヶ谷向山古墳	船ヶ谷町245-6地	"	弥生中、古墳中
108	吉郷宮ノ谷遺跡	古郷1丁目714-2-3	"	弥生中~後
109	久万ノ古道跡	久万ノ古785-1地	"	弥生~中近世、古墳
110	北森院地内遺跡	北森院町215-2地	"	弥生後~近世
111	南江戸桑山遺跡	南江戸5丁目770-765-1-744-1	"	近世
112	古照G遺跡3次	南江戸2-3丁目	"	古墳~近世
113	客谷B地区古墳群	南江戸6丁目1586地	"	古墳後
114	大峰古道跡	南江戸5丁目1586-6	"	弥生中
115	辻遺跡	朝日ヶ丘1丁目1376地	"	弥生中~後
116	澤遺跡	朝美2丁目4-30	"	弥生中~後、古墳終末、奈良、平安
117	道後城北RNB遺跡	道後城又6-24	"	彌文後~晩、奈良
118	松山城北郭遺跡	平和通4丁目1-6	"	近世
119	道後鶯谷遺跡	道後鶯谷町5-32	"	弥生中
120	桜谷六丁場遺跡	桜谷6丁目1122地	"	弥生中~古墳後
121	祝谷大地田遺跡	祝谷1丁目964	"	弥生中~古墳後
122	伊古憩部遺跡	下伊古	"	旧石器、弥生中~古墳
123	樽味四反地遺跡	樽味4丁目204番1~4	"	弥生中~古墳後
124	樽味立派遺跡	樽味2丁目58	"	弥生中~後、古墳
125	樽味高木遺跡	樽味4丁目206-1	"	弥生中~古墳後
126	桑原山中遺跡	桑原5丁目499-1	"	弥生後~古墳
127	筋違D遺跡	星ヶ岡町621-1	"	弥生前~古墳
128	筋違E遺跡	福音寺448-1	"	弥生~古墳
129	筋違F遺跡	福音寺426-427-4	"	旧石器、弥生中~古墳
130	福音寺川付遺跡	福音寺567-11	"	弥生後~白鳳
131	淨蓮寺日進跡	北久米町705-1地	"	弥生中~白鳳
132	北久米常暦遺跡	北久米町726-3-727-1	"	古墳
133	来往庵寺跡確認調査	来往町858	学術	白鳳
134	久米高畑遺跡2次	南久米町577-13地	緊急	弥生前~平安
135	久米高畑遺跡3次	来往町898外2番	"	弥生、奈良
136	久米高畑遺跡4次	来往町1149	"	弥生~白鳳
137	久米高畑遺跡5次	南久米町736地2筆・来往町1139地2筆	"	弥生中~後、古墳~古代
138	久米高畑遺跡6次	来往町1159-1160	"	弥生~白鳳
139	来往町遺跡1次	来往町519	"	弥生~古墳
140	南久米才歩行遺跡	南久米町503-1-504-3	"	弥生中~平安
141	久米津森元遺跡	久米津森町872-6	"	彌文後、古墳後、中世
142	久米高畑遺跡7次	南久米町509番地	"	弥生~白鳳、中世

遺構・遺物等	調査面積 (m ²)	調査日数 (日)	調査後の措置	調査年度	No.
掘立柱建物遺構	2,000	48	工事実施	61年	103
竪穴住居址	1,400	50	"	61~62年	104
遺物包含層、土塙	4,500	100	"	62年	105
古墳3基	300	28	"	62年	106
古墳1基	4,135		"	63年	107
溝状遺構、樹状遺構、表塙	200	8	"	63年	108
掘立柱建物、溝状遺構	500	10	"	62年	109
掘立柱建物、溝状遺構、井戸、土坑墓	2,203		"	63年	110
木棺墓	500		"	63年	111
遺物包含層	3,000	95	"	62年	112
トレンチ調査、古墳2基	900	152	"	63年	113
竪穴住居址、掘立柱建物、溝、樹状遺構	1,500	164	"	62~63年	114
遺物包含層	3,000	211	"	63年	115
掘立柱建物、樹状遺構、溝	500	60	"	63年	116
遺物包含層(奥)、小河川遺構(奈)	300	26	"	62~63年	117
北ノ郭の石垣	250	14	"	62年	118
遺物包含層	200	12	"	62年	119
遺物包含層、竪穴住居址「平形鋼劍」	9,200		"	62~63年	120
遺物包含層	200		"	62年	121
竪穴住居址、掘立柱建物	8,100		"	63年	122
A丁火山灰、沿河川	1,500	68	"	63年	123
竪穴住居址、掘立柱建物、「貨泉」	1,700	99	"	63年	124
竪穴住居址、掘立柱建物、溝	430	45	"	63年	125
溝状遺構、土坑	1,252		"	63年	126
掘立柱建物	70	?	"	62年	127
竪穴住居址、掘立柱建物	1,234		"	62年	128
竪穴住居址、掘立柱建物	1,500		"	63年	129
墓地、溝	495		"	63年	130
竪穴住居址、掘立柱建物	2,110		"	62年	131
竪穴住居址、掘立柱建物、溝	100	?	"	63年	132
回廊状遺構	4,000		現状保存	62~平成元年	133
遺物包含層、河川址、溝、井戸	700		工事実施	62年	134
方彌竪穴遺構(跡)、建物跡(奈)	1,000	22	"	62年	135
溝、土塙	210		"	63年	136
竪穴住居址、掘立柱建物、溝	1,707	?	"	63年	137
土塙	40		"	63年	138
自然流路	1,600	6	"	63年	139
自然流路、溝	679		"	63年	140
溝状遺構、土塙	1,600	20	"	62年	141
「久米郎」縁刻須恵器	148		"	63年	142

松山市古照資料館利用状況（昭和59～63年度：月別）

年 月	学 生	人		計	開館日数	1日平均人數
		男	女			
昭和59年4月	712	143	84	939	24	39
5	2,246	182	257	2,685	25	107
6	244	111	188	543	26	21
7	215	39	95	319	26	13
8	203	33	58	294	27	11
9	268	32	91	391	24	16
10	673	36	189	898	24	37
11	263	107	89	459	24	19
12	251	25	23	299	24	12
昭和60年1月	44	36	24	104	23	5
2	69	22	7	98	23	4
3	98	53	21	172	26	7
計	5,286	819	1,126	7,231	296	24
昭和60年4月	606	62	38	706	24	29
5	1,514	151	201	1,866	25	75
6	392	229	211	832	26	32
7	201	72	71	344	26	13
8	183	88	85	656	27	24
9	890	278	352	1,520	23	66
10	819	156	273	1,248	25	50
11	471	336	477	1,284	24	54
12	170	77	96	343	24	14
昭和61年1月	219	65	67	341	23	15
2	207	54	75	336	23	15
3	1,490	141	119	1,750	25	70
計	7,462	1,699	2,065	11,226	295	38
昭和61年4月	393	173	182	748	25	30
5	1,485	154	214	1,853	25	74
6	341	60	83	484	25	19
7	154	116	151	421	27	16
8	303	159	156	618	27	23
9	230	121	436	787	23	34
10	583	202	333	1,118	25	45
11	403	208	266	877	24	37
12	739	267	208	1,214	23	53
昭和62年1月	599	179	249	1,027	23	45
2	459	217	218	894	23	39
3	1,430	169	234	1,883	25	73
計	7,119	2,035	2,730	11,874	295	40
昭和62年4月	836	206	217	1,259	25	50
5	1,600	177	159	1,936	24	80
6	289	303	421	1,013	25	40
7	215	489	255	959	27	35
8	533	232	249	1,014	26	39
9	485	96	119	700	24	29
10	409	421	543	1,373	25	55
11	438	230	368	1,036	23	45
12	446	206	296	948	23	41
昭和63年1月	248	169	162	579	23	25
2	187	189	267	643	23	28
3	642	369	400	1,411	26	54
計	6,328	3,087	3,456	12,871	294	44
昭和63年4月	322	266	964	1,552	25	62
5	1,396	175	142	1,713	23	74
6	620	181	178	979	26	37
7	243	164	273	680	27	25
8	280	276	310	866	26	33
9	298	170	469	937	24	39
10	460	243	394	1,037	24	45
11	428	302	446	1,176	25	47
12	143	110	109	362	23	15
平成元年1月	186	108	58	352	22	16
2	124	108	153	385	22	17
3						
計	4,500	2,103	3,406	9,639	267	36

松山市考古博物館(仮称)の開館案内

松山市制100周年記念事業として、本年秋に(仮称)松山市考古博物館を開館する予定です。本館は縁豊かな松山総合公園の一画に、現在の古照資料館を拡充発展させ、松山平野の歴史を考古学の立場から調査・研究・展示・普及することを目指しています。

常設展示室(463m²)は、瀬戸内海にひらく松山平野の原始・古代を基本テーマに旧石器・縄文・弥生・古墳・歴史の時代区分ごとに生産・生活・交流を重視して、全体を16のコーナーに分け、それぞれ代表的な土器・石器・青銅器・鉄器・木器など考古資料8,200点を展示します。展示にあたっては、模型・ジオラマ・ビデオ・イラストなどを活用して、わかりやすい展示を目指しています。代表的なコーナーは、展示室正面中央の昭和48年に発掘された古照遺跡(古墳時代前期)の塚を復元展示するもので、展示は保存科学の研究成果が生かされています。また、松山平野を中心に瀬戸内海沿岸で発達した弥生時代の平形銅劍をとりあげ、祝谷六丁場遺跡の埋納された平形銅劍の出土状況を全国で初めて展示する他、平形銅劍の色と光を再現します。さらに、松山平野最古の寺院のひとつとして知られている国指定史跡来住庵寺は、近年の調査によって、隣接して大規模な回廊状遺構、「久米評」銘の刻書土器など重要な発見が相次いでおり、その現況をお伝えしようと考えています。

なお、開館を記念して「平形銅劍への発達」をテーマにした特別展示と記念講演を企画しています。

(松山市埋蔵文化財センター開設準備室・相田則美、上田真、山之内忠郎、俊成典和)



松山市埋蔵文化財センター・考古博物館(仮称)完成予想図

編集後記

松山市埋蔵文化財年報Ⅱの出版に際しましては、発掘調査事業に当たりご尽力頂きました地権者をはじめ関係各位の皆様方に厚くお礼申し上げます。

近年、急激に増加する諸開発事業の波にもまれながら、発掘調査に追われ遅々として進まない埋蔵文化財の保存・保護の障壁に押しつぶされぬよう励まし合い、緒に付かない整理作業に日々切迫した思いを抱いておりました。

そのような状況の中、ここに若手調査員の情熱と自らを厭わぬ努力により昭和62年度～昭和63年度に実施されました本格調査の概要がまとめられましたことは、価値多きものであります。本報告書の出版を望む声の多いなか、はなはだ勝手な言い草とは存じますが、一同、報告書作成に携わる喜びと心地良い安堵感にその責任の重さを一時忘れ、共に歓喜に酔う事も飛躍への前章となりうるものと確信いたすところであります。

昨今の報道でもご案内のように重要資料の発見が相次ぎ、瀬戸内の一地域としての重要性が高まる中、本書に掲載させて頂きました以外に、調査概要を待望されているものも少なくないと存じますが、今後、一層の調査精度の向上を図るとともに、迅速な調査成果の公開に努めてまいりたく存じます。

また、平成元年度秋 市制百周年を記念し(仮称)埋蔵文化財センターが、埋蔵文化財研究の総合拠点として開館を迎えますが、これを画期とし、本市、文化財行政を推進する所存であります。

まだまだ、開発の波は、食えを見せず、今後も貴重な埋蔵文化財の破壊につきましては予断を許さない状況にあり、史跡・住居跡・周辺地域をはじめ先人から受け継いだ郷土の貴重な文化遺産の保存・伝承にあたり、関係各機関並びに市民の皆様のますますのご支援と深いご理解をお願い申し上げて後記といたします。

付図1 昭和62・63年度松山市埋蔵文化財発掘調査位置図



付図2 昭和62年度松山市埋蔵文化財確認調査位置図



付図3 昭和63年度松山市埋蔵文化財確認調査位置図



松山市埋蔵文化財調査年報II

昭和62～63年度

発行日 平成元年3月

発行 松山市教育委員会

〒790 松山市二番町4丁目7番地2

T E L (0899)48-6520

印 刷 原印刷株式会社

